

鯉ノ水遺跡

—主要地方道河口湖精進線の建設に伴う発掘調査報告書—
(東海道甲斐路跡・旧鎌倉往還跡 鯉ノ水地点)



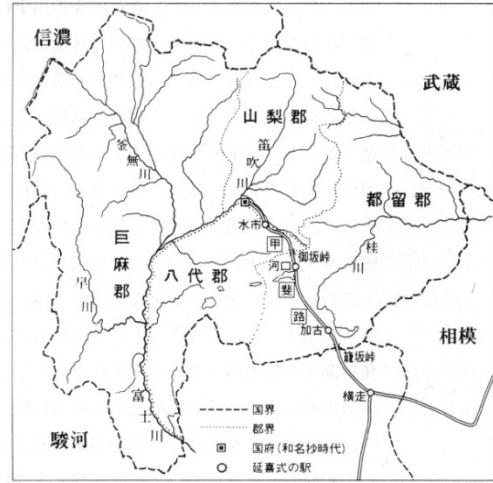
2015.3

富士河口湖町教育委員会
山梨県土整備部

鯉ノ水遺跡 発掘調査のあらまし



御坂山地から見た河口地区と富士山・河口湖（平成 26 年 7 月 16 日撮影）



古代甲斐国府と駅路（『山梨県史』より）

鯉ノ水遺跡の立地する山梨県南都留郡富士河口湖町河口地区は、古代に都（平城京・平安京）を中心に諸国と結ぶためにつくられた七道駅路のひとつである東海道から分岐し御坂峠を越えて甲斐国府に至る古代の律令官道「東海道甲斐路」（御坂路）と呼ばれる道路が通っていたとされ、平安時代の法典『延喜式』に記載された、都と国府の間を国司などが移動する際に使用される馬を常駐し交代させ、国司などの役人に宿と食料を提供するための施設である「河口駅」があったといわれ、当時の河口という地名が現在にも残っていると考えられています。

鯉ノ水遺跡の発掘調査は今回が初めてですが、遺跡のすぐ東にある滝沢遺跡の発掘調査が山梨県埋蔵文化財センターにより4回にわたって行われています。国道137号河口2期バイパス建設工事に先立ち行われた第1次調査、富士吉田市新倉からトンネルを抜けて河口2期バイパスへつながる国道137号吉田河口湖バイパス建設工事に先立ち行われた第2次～第4次調査では、弥生時代から平安時代にかけての遺跡であることが明らかになりました。特に奈良・平安時代（8世紀～10世紀頃）の堅穴住居跡が約50軒発見され、この一帯が古代の律令官道に沿って広がっていた奈良・平安時代の集落であったことが考えられます。



俯瞰写真（北から）



俯瞰写真（東から）

やかに傾斜した地形にあり、東では山からの運ばれてきた土砂、西では河口湖の湖水によってもたらされた砂や泥が堆積していました。

今回の鯉ノ水遺跡の発掘調査は、国道137号吉田河口湖バイパスを河口湖畔まで延伸する道路として計画された主要地方道河口湖精進線の建設工事に先立つて行われました。

遺跡を南北に町道2101号が縦断し、町道から東をI区、町道の西をII区、III区と調査区域を設定しました。このあたりは、御坂山地の南麓で、河口湖の北東部の標高840m前後に立地しており、周囲には水田が広がっています。

幅約15m、長さ200mにわたる調査範囲では東の山地から徐々に西に向かって河口湖のほとりへと緩



旧鎌倉住還跡



東海道甲斐路跡

I 区では、地表下約1mの層から中世末から近代頃まで使われていたと推測される旧鎌倉住還の道路遺構1条、地表下2mの層から古代東海道甲斐路の道路遺構1条、土坑3基、土石流の流路跡1条、時期・用途不明の硬化面1条が、II区では、土石流の流路跡1条が、III区では地表下約2mの層から古墳時代中期の土器が集中する包含層がそれぞれ発見されました。町道2101号は旧鎌倉住還の伝承があり、この道路に平行して道路遺構が上下に2条発見されたことから、古代以降継続的に似た線形の道路が繰り返しつくられてきたことが分かりました。古代東海道甲斐路の道路遺構は山梨県内で初の発見であり、古代甲斐国の成立を考えるうえで重要な手掛かりが得られました。

古代東海道甲斐路の道路遺構は、土石流によって一部が破壊されていました。その土石流の砂礫には古墳時代から平安時代にかけての土器の破片が多く含まれ、遺跡の東に



土石流の砂礫から出土した土器

ある山から発生した土石流が滝沢遺跡周辺の集落遺跡を押し流しながら下ってきたものと考えられます。含まれる土器の中で一番新しいものが平安時代の10世紀初頭のものであることから、土石流はこの頃発生したものと考えられます。古代東海道甲斐路は、この時点で一時使用ができなくなったのかもしれません。強烈な勢いで土器が押し流されたために、土器の割れ口は非常にきれいな状態で発見されました。



II区 第1号土石流・流路跡

II区では、I区の道路遺構を破壊した土石流の流路の続きが見つかり、土石流の砂礫の中には大量の土器の破片が混ざっていました。一部、古墳時代の土器も含まれますが、多くは奈良～平安時代の土器です。土器に墨で文字が記された墨書き土器や先のとがった道具で文字などを記した刻書き土器もみられ、やはり滝沢遺跡周辺の集落遺跡の一部が押し流されたことが想定されます。土器の破片は、I区と同じように割れ口がきれいなままのものと、すり減っているものとに分かれ、土石流により猛烈な勢いで押し流



土石流で粉砕された土器



土石流から出土した馬の歯

されてきたものと河川の流路のように緩やかな流れしたものがあると考えられます。また、土器とともに馬の歯が多く見つかりました。土器といっしょに流されてきたものと考えられますが、鯉ノ水遺跡や滝沢遺跡の周辺で馬が飼われていたことが想

像され、馬を常駐させていたと考えられる河口駅との関わりも注目されます。駅に常駐させるための馬を飼育する場所が近くにあったのかもしれません。



III区 古墳時代中期土器出土状況



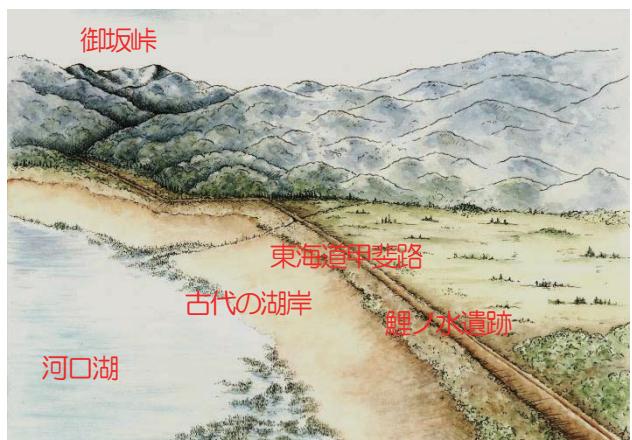
III区 出土 古墳時代中期の土器（上：甌・下：坏）

III区は、今回の調査で最も西に位置し河口湖に近い地点です。地層を観察すると湖の底で堆積した砂層などがあり、かつては湖の一部だった可能性が考えられます。I区で発見された古代東海道甲斐路の道路遺構が使われていた当時、III区は湖水だったと推測されますが、地表面からおよそ2メートルの深さに古墳時代中期の土器が集中して発見されました。古墳時代は奈良・平安時代よりも河口湖の水位が低かった可能性があります。発見された土器は、I区やII区のように土石流などによって運ばれてきたものではなく、土器をその場に置いたか廃棄したとみられ、もともとの形が分かる程度に復元できるものが多くありました。河口湖のほとりの水辺で何か祭祀（おまつり）をし、その際に土器をそなえたとも考えられます。

I～III区の全体の調査を通して、古代東海道甲斐路が河口湖の湖畔に面した湿地につくられ、弱い土地の上に頑丈な道路をつくるために版築工法が取られていたこと、その頑丈な道路が土石流によって破壊されたという災害の歴史を知ることができました。また、河口湖の水位は時代によって増減があることもわかり、かつての鯉ノ水遺跡の周辺の環境や景観を復元することができます。さらには、近くにある滝沢遺跡が古代東海道甲斐路と密接なかかわりをもつ遺跡であることもとらえることができました。



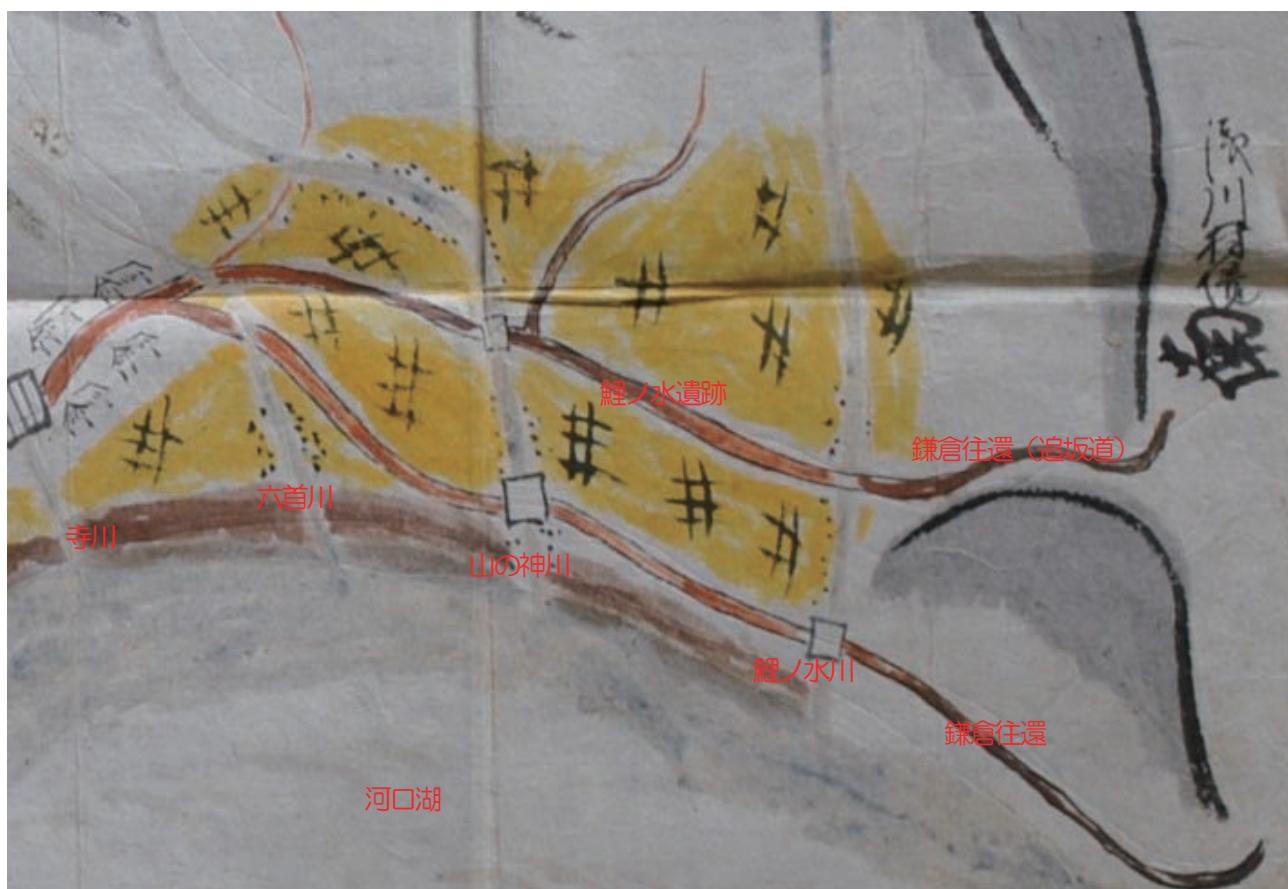
発掘調査当時（2013）の景観



古代の鯉ノ水遺跡周辺の景観イメージ（画・筒井眞澄）



河口村絵図 明和8年（1771） 河口浅間神社蔵



同図 鯉ノ水遺跡付近拡大

序 文

本書は、2013（平成25）年度に実施した、山梨県南都留郡富士河口湖町河口地内に所在する鯉ノ水遺跡の発掘調査報告書です。この調査は、山梨県県土整備部が行う主要地方道河口湖精進線建設工事に伴うもので、富士河口湖町教育委員会が調査主体・機関として行う初の本格的な発掘調査となりました。鯉ノ水遺跡は河口湖の北東岸の河口地区の南方に位置し、河口湖に突出した産屋ヶ崎から1kmほど北にあります。河口地区の小字滝沢及び鯉ノ水地内に所在します。鯉ノ水遺跡の東方約100mにおいて国道137号河口2期バイパス及び同国道吉田・河口湖バイパスの建設工事に先立つ滝沢遺跡の埋蔵文化財発掘調査により、堅穴住居跡が合計約50軒検出され、多量の墨書き器を含む遺物が出土しています。滝沢遺跡の周辺は、旧鎌倉往還が河口から河口湖東岸の浅川に南下する経路の沿道にあたり、産屋ヶ崎から霜山にかけて伸びる尾根線上にある追坂（老坂）を越える峠道のたもとに位置します。旧鎌倉往還は、古代の律令官道（駅路）である東海道甲斐路の経路を継承しているものと考えられ、遺跡が所在する富士河口湖町河口地区は、平安時代の法典『延喜式』に記載された甲斐国三駅の一つ「河口駅」が置かれた地と推定されてきました。

鯉ノ水遺跡は、主要地方道の建設用地が滝沢遺跡に近接することから2012（平成24）年度に詳細分布確認調査を実施し新たに発見された遺跡です。32箇所の試掘調査の結果、版築構造をもつ硬化面が地表から約2メートルの深さに存在することが判明し、古代の東海道甲斐路の道路遺構である可能性が考えられました。また砂礫層から奈良～平安時代に位置付けられる土器が出土したほか、古代の河口湖の湖岸線を想定し得る土層が確認されました。さらに、古墳時代中期の土器が河口湖に近い地点でまとめて出土し、古墳時代から古代にかけて河口湖の水位に変動があったことも把握されました。

発掘調査の結果、中世末～近世にかけて使用されたと考えられる旧鎌倉往還の道路遺構が確認されたほか、山梨県内では初の検出となる古代の東海道甲斐路の道路遺構、その道路遺構を破壊した土石流の流路跡、旧来の河口湖に面した地点における古墳時代中期の遺物包含層が発見されました。特に古代の東海道甲斐路の道路遺構の発見により、河口地区に古代律令官道（駅路）が存在したこと、後世の鎌倉往還がその経路を継承していることが実証され、山梨県の古代以降の交通や交流、全国規模においても内陸交通を考えるうえで重要な事例を得ることができました。今後は河口駅や駅に伴う施設、陸上交通と水上交通の接点となる津など交通に関する重要な遺構の発見につながる可能性が期待されます。

最後に、調査にあたって御指導・御協力をいただいた関係機関並びに調査・整理作業に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

富士河口湖町教育委員会

教育長 梶原正孝

例　言

- 1 本書は山梨県南都留郡富士河口湖町河口地内に所在する鯉ノ水遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、主要地方道河口湖精進線建設工事に伴う事前調査であり、山梨県県土整備部より富士河口湖町教育委員会が委託を受け、同教育委員会が発掘調査・整理作業・報告書作成を実施したものである。
- 3 発掘調査にあたった組織は次のとおりである。

調査主体 富士河口湖町教育委員会

調査機関 富士河口湖町教育委員会生涯学習課

調査担当者 発掘調査：平成25年度 杉本悠樹（主任・生涯学習課学芸員）

整理作業：平成26年度 杉本悠樹（主任・生涯学習課学芸員）

組織体制 平成25・26年度

富士河口湖町教育委員会 教育長 梶原正孝

生涯学習課 課長 中村孝一

課長補佐 五味和代

社会教育係長 渡辺浩基

同様文化財担当 杉本悠樹

- 4 発掘調査期間および整理作業期間は以下のとおりである。

平成25年度 発掘調査 平成25年7月22日～8月30日

基礎的整理作業 平成25年9月10日～平成26年3月28日

平成26年度 本格的整理作業 平成26年6月2日～平成27年1月31日

- 5 本書の執筆・編集は杉本悠樹が行った。動物遺体（獣骨類）の分析を山梨県立博物館学芸員 植月 学氏に依頼し第4章に掲載した。

- 6 遺構写真・調査風景写真は杉本が撮影した。

- 7 報告書掲載遺物写真は杉本が撮影した。

- 8 発掘調査における世界測地系座標に基づく基準杭設定、俯瞰写真等航空写真撮影及び写真測量図化については株式会社 シン技術コンサルに委託した。

- 9 発掘調査における遺構及び遺物出土地点の計測・図化は、株式会社 シン技術コンサルに委託し、同社の課長代理 歌代久志氏が現場に常駐して作業を行った。

- 10 本報告書に関わる記録図面・写真・出土遺物などは一括して富士河口湖町教育委員会に保管してある。

- 11 発掘調査および整理作業においては次の方々・機関にご協力・ご教示を賜った。記して感謝の意を表す次第である。（50音順、所属・敬称略）

雨宮加代子、雨宮弘聰、石神孝子、石川泰永、稲垣自由、入江俊行、上杉 陽、植月 学、内山 高、内山美恵子、海老沼真治、大島正之、大隅清陽、岡野秀典、河西 学、勝間田仁美、加藤信子、株式会社 加取、株式会社スタジオ三十三、河口浅間神社、木本雅康、協栄エンジニアリング株式会社、倉沢宗治、輿水達司、古代甲斐国官衙研究会、小林健二、五味信吾、椎名慎太郎、篠原 武、末木 健、清野陽一、鷹野義朗、高橋晶子、武部健一、田代 孝、田中大輔、田村美山、帝京大学文化財研究所、外川寿雄、中田 進、永田亮一、中村大輔、中山 晋、中山誠二、新津 健、野崎 進、野代幸和、萩原孝一、畑 大介、原 正人、平川 南、平野 修、本庄 久、富士河口湖町小立地区画整理組合、フジコンストラクト株式会社、保坂和博、保坂康夫、堀内 亨、堀内 真、堀内政春、正木季洋、御山亮済、撫養健至、村石眞澄、室伏 徹、望月秀和、森原明廣、八巻與志夫、山梨県建設技術センター、山梨県考古学協会、山梨県富士・東部地域県民センター、山梨県埋蔵文化財センター、山梨県立考古博物館、山梨県立博物館、有限会社 上田屋商会、依田幸浩

12 発掘作業・整理作業参加者は以下の通りである。

発掘作業員 井出清春、伊藤隆夫、上野美紀、大額照明、斧田文夫、倉沢和彦、小林けい、小林正彦、駒谷清子、駒谷発男、貴家昭二三、新垣幸雄、鈴木俊夫、高尾和美、高田悦三、高藤浩文、高山光子、田中奈津代、椿 孝二、外川栄重、外川昌宏、中田 昇、中村公夫、額谷いち子、野村秀治、林 宏、古屋正弘、古屋 實、堀田晃希、蒔田宗人、山脇照良、渡辺めぐみ

整理作業員 平成25年度 伊藤隆夫、小林けい、駒谷清子、高山光子、額谷いち子、布施あいり
平成26年度 鈴木俊夫、田中 泉、筒井眞澄、中村公夫、林 宏、前川幸男

凡 例

- 1 本報告書の遺構・遺物の挿図縮尺は原則として以下の通りである。

〔遺構〕 全体図：1/1,000、出土遺物分布図：1/200（I区上層のみ1/100）、道路遺構：1/100または1/60、
土石流・流路跡：1/100、土坑：1/60、ピット：1/60

〔遺物〕 土器：1/3（但し細片、製塩土器は1/2）、土製品・石器：1/2

- 2 道路遺構や溝状遺構などの遺構番号は、調査区ごと検出順に付したものである。調査区は、東端から町道2101号線までをI区、同町道から西に4筆をII区、さらに西の4筆をIII区とした。
- 3 調査区は世界測地系座標によって設定しており、全体図中におけるグリッド名と別に付した数値は座標線の数値である。よって南北グリッド線および図中の北印は真北を指す。
- 4 遺物のドットは●=土器、■=石器、▲=土製品、◆=馬歯・獸骨、☆=古銭、★=古代製塩土器、○=陶器の記号で示し、番号は調査区ごとの遺物図版の通し番号と対応している。
- 5 遺物挿図中、土器類の断面図において黒く塗りつぶしてあるものは須恵器、灰釉陶器を示す。また土器類の器面に用いたスクリーントーンは黒色処理、赤色塗彩された範囲を示す。
- 6 遺構断面図中のレベルポイント部分にある数字は標高（単位はm）を示す。
- 7 土器観察表中の色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1990年版による。

目 次

鯉ノ水遺跡 発掘調査のあらまし

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の目的と課題	1
第3節 発掘調査の経過	2
第4節 室内調査等の経過	3
第5節 調査に係る事務手続き	4
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法と成果	9
第1節 調査の方法	9
第2節 基本層序	9
第3節 I区の遺構と遺物	15
第1項 第1号道路遺構・旧鎌倉往還跡	15
第2項 第2号道路遺構・東海道甲斐路跡	18
第3項 第1号硬化面	22
第4項 土坑・ピット	22
第5項 土石流・流路跡	26
第4節 II区の遺構と遺物	37
第1項 第1号土石流・流路跡	37
第2項 第2号土石流・流路跡	50
第5節 III区の遺構と遺物	50
第1項 第1号土石流・流路跡	50
第2項 古墳時代の遺物包含層	50
第4章 自然科学分析	58
第1節 鯉ノ水遺跡出土の動物遺体	58
第5章 総 括	62
第1節 奈良・平安時代の遺構・遺物について	62
第1項 東海道甲斐路の道路遺構	62
第2項 土石流・流路跡	62
第3項 墨書き土器・刻書き土器	62
第4項 古代製塩土器	63
第5項 動物遺体	63
第2節 古墳時代の遺物について	63
第1項 I・II区の古墳時代の遺物	63
第2項 III区の古墳時代の遺物	64
第3節 中世～近世の遺構・遺物について	64
第1項 旧鎌倉往還の道路遺構	64
第2項 中世～近世の遺物	64
第4節 鯉ノ水遺跡の古環境の検討	65

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第2図 鯉ノ水遺跡 調査地点位置図	8
第3図 鯉ノ水遺跡遺構配置図・グリッド配置図	10
第4図 基本層序確認地点	11
第5図 I区基本層序断面図（1）東壁	12
第6図 I区基本層序断面図（2）北壁	13
第7図 II・III区基本層序断面図 北壁	13
第8図 I区第1号道路遺構・旧鎌倉往還跡 平面図	16
第9図 I区出土遺物分布図（上層・旧鎌倉往還跡）	17
第10図 I区全体図（下層・古代面）	19
第11図-1 I区第2号道路遺構・東海道甲斐路跡平面図	20
第11図-2 I区第2号道路遺構・東海道甲斐路跡断面図	21
第12図 I区第1号硬化面	23
第13図-1 I区土坑・ピット（1）	24
第13図-2 I区土坑・ピット（2）	25
第14図 I区第1号土石流・流路跡	27
第15図 I区出土遺物分布図（下層・古代面）	30
第16図-1 I区出土遺物（1）	31
第16図-2 I区出土遺物（2）	32
第16図-3 I区出土遺物（3）	33
第16図-4 I区出土遺物（4）	34
第16図-5 I区出土遺物（5）	35
第16図-6 I区出土遺物（6）	36
第17図 II区全体図	38
第18図 II区第1号土石流・流路跡	39
第19図 II区出土遺物分布図	40
第20図-1 II区出土遺物（1）	44
第20図-2 II区出土遺物（2）	45
第20図-3 II区出土遺物（3）	46
第20図-4 II区出土遺物（4）	47
第20図-5 II区出土遺物（5）	48
第20図-6 II区出土遺物（6）	49
第21図 III区全体図	51
第22図 III区第1号土石流・流路跡	52
第23図 III区出土遺物分布図	54
第24図-1 III区出土遺物（1）	55
第24図-2 III区出土遺物（2）	56
第24図-3 III区出土遺物（3）	57
第25図 ウマの歯冠長・歯冠高の比較	60
表目次	
第1表 出土動物遺体一覧	59
第2表 I区土器観察表	66
第3表 II区土器観察表	69
第4表 III区土器観察表	72
第5表 出土動物遺体一覧	74

第1章 調査の経緯・経過

第1節 調査に至る経緯

国道137号は、御坂峠を越えて甲府盆地と富士山麓を結ぶ御坂路・旧鎌倉往還の経路を継承し、自動車道化された幹線道路であり、山梨県内における重要な交通の大動脈として機能してきた。山梨県内外の物流・移動のため普段から交通量が多く、特に休日には慢性的な渋滞がしばしば発生してきた。富士河口湖町河口の集落を通過する箇所は、道路幅が狭く線形も湾曲しており、大型車などの通行に際しては沿道の歩行者に危険性が生じていた。この課題を解決するために国道137号河口2期バイパスが富士河口湖町河口～追坂間に計画・建設され、平成23年12月から供用が開始された。このバイパスの工事に先立ち山梨県埋蔵文化財センターによる工事用地の試掘調査の結果、6件の遺跡が確認され本調査が実施され、河口地区に濃密に遺跡が分布することが明らかとなった。このバイパスからT字状に分岐し、新たに開削された新倉トンネルを経由して富士吉田市にアクセスする国道137号吉田河口湖バイパスが計画され、分岐点となる富士河口湖町河口字滝沢において山梨県埋蔵文化財センターにより滝沢遺跡の第2～3次調査が実施された。このT字の分岐点から河口湖の湖畔方面に道路を延伸し、富士吉田市方面から河口湖の湖畔道路を結び、大石地区から甲府盆地に至る若彦トンネルを利用して災害時の避難道路としても機能させることを目的として主要地方道河口湖精進線の延伸が計画された。

起点となる吉田河口湖バイパスとの接点が周知の埋蔵文化財包蔵地である滝沢遺跡の一部に含まれ、用地が同遺跡に近接することから、滝沢遺跡の西への範囲確認を含め、道路の用地における埋蔵文化財の詳細分布調査を平成24年度に富士河口湖町教育委員会が実施した。吉田河口湖バイパスの接点から旧国道137号の交差点予定までの約300mの区間において32基の試掘坑を調査し、遺構及び遺物が検出された約2,500m²について、平成25年度に発掘調査を実施することになった。本発掘調査を実施することになった範囲は、従来の滝沢遺跡との連続性が認められなかったことから、道路用地の大半が属する字鯉ノ水の地名を冠した「鯉ノ水遺跡」として新たな周知の埋蔵文化財包蔵地にした。

第2節 調査の目的と課題

周知の埋蔵文化財包蔵地である滝沢遺跡に近接することから、集落遺跡として知られる同遺跡の広がりが西にどの範囲まで及ぶのかを調べることを目的のひとつとし、基点から西進し旧国道137号（現町道0115号）までの道路用地に32基の試掘坑を設定し、重機によってトレーナーを掘削し、詳細分布調査を平成24年度に実施した。また、道路用地には町道2101号が交差しており、同町道は旧鎌倉往還であるとの伝承が地域で残っていることから、道路用地に古道が埋蔵されている可能性があり、道路遺構を検出することが課題となった。山梨県内において、古代の律令官道である「東海道甲斐路」の道路遺構は未発見であり、これまでの河口地区における国道137号河口2期バイパス建設に伴う発掘調査においても検出されておらず、古道の伝承地域を横断する当該工事が検出する好機であることを認識し、道路遺構の要素を見出すことに努めた。調査の結果、滝沢遺跡に近接する地点には遺構・遺物の分布がみられず、町道2101号の両側から奈良・平安時代を主体とする土器等の遺物の分布が確認され、さらに工

事用地のうち旧国道 137 号（現町道 0115 号）寄りの地点で古墳時代中期の土器が分布する状況が把握された。町道 2101 号の東に接する地点からは、地表から約 2 m の深さにおいて硬化面が検出され、断面観察の結果により版築工法が取り入れられていることが判明したこと、硬化面の表面を平安時代の 9 世紀後半～10 世紀初頭の土器片が混入した砂礫層に覆われていたことから、古代の道路遺構である可能性が濃厚となった。トレーニングの上層からは、現在のアスファルト舗装の道路の前身となる道路遺構も確認され、ほぼ同一の経路上に 3 層（3 時期）の道路が重複していることが明らかとなった。詳細分布調査により、遺構または遺物が検出された約 2,500 m²について、新たな埋蔵文化財包蔵地として「鯉ノ水遺跡」と名付け、平成 25 年度に発掘調査を実施する運びとなった。道路遺構の調査においては、面的な広がり、道路幅、残存延長、側溝の有無、道路の断面構造を調査し、古代東海道甲斐路の姿を初めて明らかにすることが課題となった。また、町道 2101 号（旧鎌倉往還）の西は河口湖の湖岸線が迫っており、古代の湖岸線の位置を検証することも課題になった。調査範囲の西端部付近での古墳時代中期の土器がまとまって出土した地点は、古代の段階では湖水であった可能性が高く、河口湖の湖水の水位変動が想定されることから、包含層の範囲の広がりと遺物が散布する状況の背景を検証することが課題となった。

当該地域に所在が想定されている古代東海道甲斐路の河口駅の位置を含め、古代の河口湖畔の景観を復原し、甲斐路の経路、近接する滝沢遺跡の性格の再検討を課題とする。

第 3 節 発掘調査の経過

鯉ノ水遺跡の発掘調査に先立ち、平成 25 年 5 月 2 日に山梨県県土整備部（富士・東部建設事務所吉田支所）、山梨県教育委員会学術文化財課、富士河口湖町教育委員会による現地協議を行ない、調査範囲等の確認をした。工事主体者である富士・東部建設事務所吉田支所から、発掘調査に先立つ表土剥ぎによって生じる堆土については、主要地方道河口湖精進線の道路工事において埋め戻すと道路としての強度が確保できないという理由から、堆土を遠隔地に搬出するよう指示が出された。堆土の搬出先は富士河口湖町小立地区内にて行われている土地区画整理の組合に依頼したところ、同区画整理地内の換地に際し農地として換地する用地の埋め土として受け入れが可能との回答を得た。発掘調査地である河口地区から小立地区までダンプカーにより搬出することとなった。表土剥ぎ及び堆土運搬を合わせ土工事として業務委託し、発掘調査地点を縦断する町道 2110 号を境に西を第 1 工区（鯉ノ水地区）、東を第 2 工区（滝沢地区）と分け、重機により表土を除去しながらダンプカーに積載し搬出した。発掘調査地点から堆土の集積地である富士河口湖町小立地区画整理地までの距離はおよそ 6 km あり、ダンプカーによる土砂運搬の往来が多くなることから、富士河口湖町長と山梨県富士・東部地域県民センター所長との間で「土砂運搬に伴う生活障害等の防止に関する協定書」を締結した。第 2 工区から先行して表土剥ぎを実施し、東から西に向けて進めた。平成 25 年 7 月 8 日（月）から表土剥ぎを含む土工事を着手し、同月の 31 日までに調査地点全体の作業が完了した。



発掘調査は、町道 2101 号を境として、東に位置する字滝沢の地点を「I 区」と設定し、町道から西に

所在する 8 筆の用地を 4 筆ずつ分け、町道から西の 4 筆を「Ⅱ区」、調査区西端の 4 筆を「Ⅲ区」と設定した。平成 25 年 7 月 22 日に表土剥ぎを含む土工事が先行して完了していた字滝沢の I 区から発掘調査に着手した。ただし、試掘調査の結果、町道 2101 号の路肩から東の 5 m の範囲において地表以下約 1 m の深さに中世末から近世にかけての道路遺構が存在することが確認されていたため、この範囲のみ表土剥ぎを地表以下 1 m に留め、二面調査を実施した。その他の I 区の範囲は古代の遺構及び遺物が検出される地表以下 2 m の深さまで表土を除去した。旧鎌倉往還の道路遺構と考えられる面と、その他の範囲の下層の古代の面を並行して精査し、土石流跡が調査区を横断している状況が確認された。7 月 27 日には I 区の上面の道路遺構の空中写真を撮影し、同月の 30 日までの間で上面の道路遺構の調査を実施し、翌 31 日から 8 月 1 日にかけて重機による面下げを行い、I 区全体が同一の深度となった。面下げにより試掘調査で検出されていた古代東海道甲斐路の道路遺構の一部と思われる硬化面が再度露出し、道路遺構の全体像の確認作業を行った。古代の道路遺構の一部は遺跡の南東方向からの土石流により破壊されている状況が確認された。

8 月 8 日に報道機関を対象とした現地公開を行い、新聞各紙・テレビ局が報道した。8 月 10 日には現地説明会を山梨県考古学協会の協力を得て実施し、約 100 名の参加者が来場した。8 月 12 日には、古代東海道甲斐路の道路遺構を含む I 区の空中写真撮影を行い、翌日から 8 月 16 日まで道路遺構に直交する 3 基のサブトレーニングを設定し断面の調査を実施した。道路遺構のサブトレーニングのうち、中央と南に設定したものについては、道路遺構の版築構造は明瞭に確認されたことから、中央を帝京大学の学芸員実習として、南のものを株式会社スタジオ三十三に業務委託し、土層断面の剥ぎ取りを行なった。I 区の調査と並行して、II 区の調査に 7 月末より着手し、I 区において古代の道路遺構を破壊したと考えられる土石流と連続する流路跡が検出され、土石流の砂礫層から大量の土器片が出土した。また、馬歯や炭化物も混在している状況が確認された。I 区の調査が終了すると、II 区の調査と並行して III 区の調査に着手し、古墳時代中期の土器を主体とする遺物包含層が検出された。8 月 29 日まで II 区、III 区の調査を行い、8 月 30 日に II 区、III 区の空中写真撮影を実施して発掘調査を終了した。



第4節 室内調査等の経過

室内調査は、出土遺物の洗浄を平成 25 年 9 月 9 日から富士河口湖町子ども未来創造館の創作ルームにおいて開始した。洗浄し乾燥した出土遺物から順次注記を行い、破片がまとまって出土した III 区の古墳時代中期の遺物については接合作業を実施した。平成 26 年 3 月 28 日までに基礎整理作業が完了した。

平成 26 年 5 月に富士河口湖町の広報誌において本格的整理作業に従事する作業員を募集し、6 月 2 日から富士河口湖町中央公民館 2 階の資料室を整理作業室として作業に着手した。土器の実測、拓本、トレイス、遺物台帳の作成、土器の復元、写真撮影、写真編集を行った。平成 27 年 1 月 23 日までに作業員による整理作業を完了し、報告書の執筆及び編集作業を平成 27 年 1 月末まで継続して実施した。



第5節 調査に係る事務手続き

平成 24 年 3 月 12 日 山梨県富士・東部建設事務所長から文化財保護法第 94 条第 1 項に基づく通知の提出（滝沢遺跡の範囲に一部が該当するものとして）

平成 24 年 3 月 14 日 上記の通知を富士河口湖町教育委員会から山梨県教育委員会に進達

平成 24 年 3 月 19 日 山梨県教育委員会教育長から試掘確認調査の指示の通知（教学文第 3120 号）

平成 24 年 3 月 22 日 上記の通知を富士河口湖町教育委員会から山梨県富士・東部建設事務所に伝達

平成 24 年 10 月 23 日 富士河口湖町教育委員会教育長から文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく発掘調査の着手報告を山梨県教育委員会教育長に提出（試掘確認調査）

平成 24 年 12 月 13 日 富士河口湖町教育委員会から試掘確認調査によって出土した遺物について、富士吉田警察署長に埋蔵物発見届・保管証を、山梨県教育委員会教育長に保管証を提出

平成 24 年 12 月 13 日 富士河口湖町教育委員会から文化財保護法第 97 条第 1 項に基づく「遺跡発見の通知」を山梨県教育委員会に提出（鯉ノ水遺跡として遺跡台帳に登録）

平成 25 年 1 月 15 日 山梨県教育委員会から富士河口湖町教育委員会に埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について通知（試掘確認調査分）

平成 25 年 1 月 15 日 山梨県教育委員会から埋蔵文化財包蔵地の発見について通知（鯉ノ水遺跡）

平成 25 年 4 月 19 日 山梨県知事と富士河口湖町教育委員会教育長の間で発掘調査の協定書を締結

平成 25 年 6 月 7 日 山梨県知事に富士河口湖町教育委員会から道路予定区域形質変更等許可申請書を提出

平成 25 年 6 月 7 日 富士河口湖町長から山梨県富士・東部地域県民センター所長に土砂運搬事前協議書を提出

平成 25 年 6 月 11 日 山梨県知事から道路法 32 条の規定に基づき道路占用の許可が出される

平成 25 年 6 月 24 日 山梨県富士・東部地域県民センター所長と富士河口湖町長間で「土砂運搬に伴う生活障害等の防止に関する協定書」を締結

平成 25 年 6 月 27 日 富士河口湖町長から山梨県富士・東部地域県民センター所長に土砂運搬業者の決定について通知

平成 25 年 9 月 2 日 山梨県知事と富士河口湖町教育委員会教育長の間で整理作業の協定書を締結

平成 25 年 9 月 4 日 富士河口湖町教育委員会教育長から文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘調査の着手報告を山梨県教育委員会教育長に提出（本発掘調査）

平成 25 年 9 月 5 日 富士河口湖町教育委員会から本発掘調査によって出土した遺物について、富士吉田警察署長に埋蔵物発見届・保管証を、山梨県教育委員会教育長に保管証を提出

平成 25 年 9 月 17 日 山梨県教育委員会から富士河口湖町教育委員会に埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について通知（本発掘調査分）

平成 25 年 10 月 11 日 富士河口湖町教育委員会教育長から発掘調査終了報告を山梨県教育委員会教育長に提出（本発掘調査）

平成 26 年 3 月 18 日 富士河口湖町教育委員会教育長から山梨県知事宛に発掘調査終了報告書を提出

第2章 遺跡の位置と環境

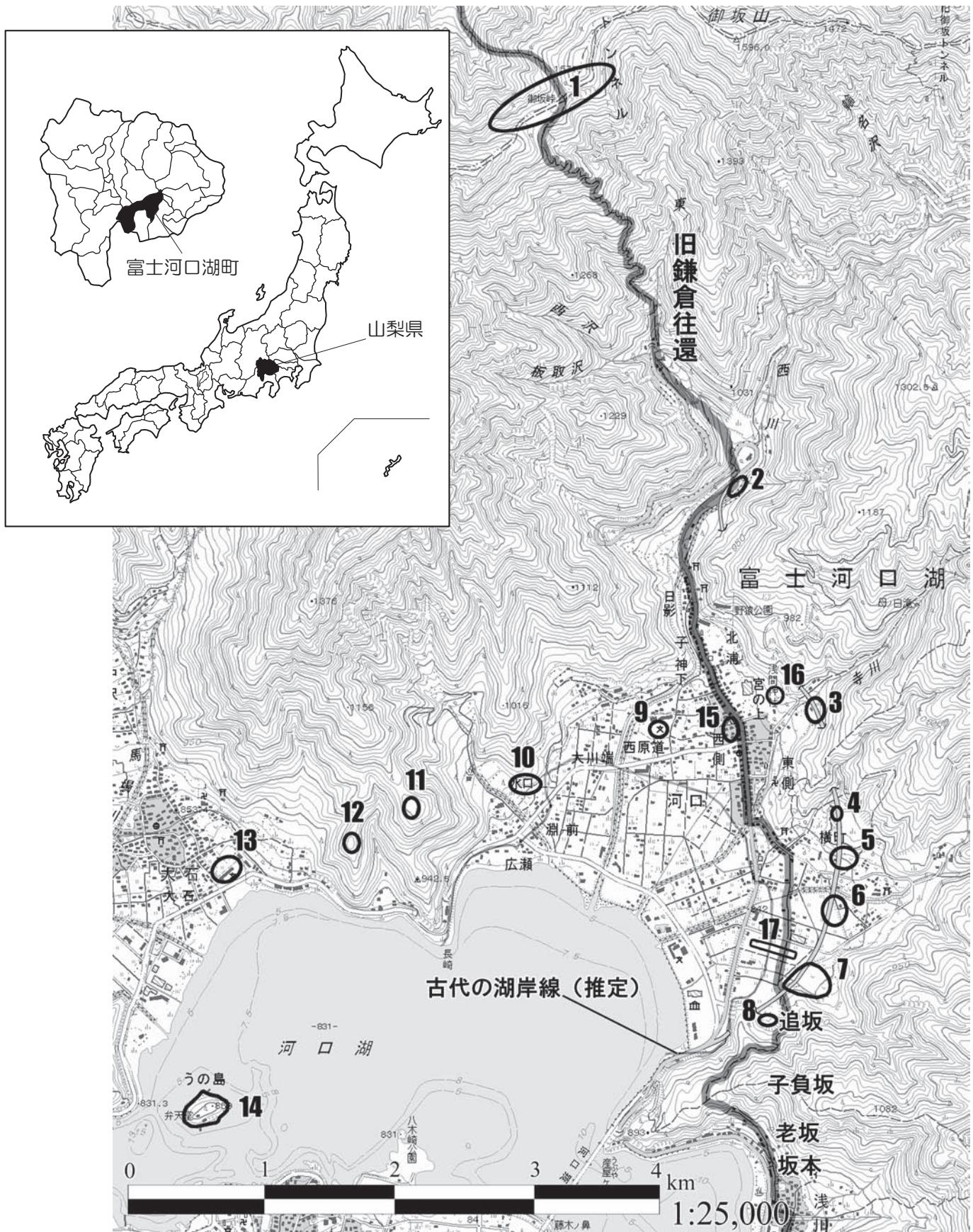
第1節 地理的環境

鯉ノ水遺跡が所在する山梨県南都留郡富士河口湖町河口地区（以下、「河口地区」と略す。）は、富士山の北麓、富士五湖のひとつ河口湖の北東岸、御坂山地の南麓、三ッ峠山の西に位置する。河口湖は富士山の噴火により流入した溶岩流が形成した堰止湖で、自然の排水路を有さない湖である。このため、近世以前は降雨による増水後、自然蒸発を待たなければ水位が低下しない状況にあった。河口地区は、周辺の御坂山地や三ッ峠山などの山々に降った雨が沢を伝わり河川となり河口湖に流入する地点にあり、東から鯉ノ水川、山の神川、六首川、寺川、西川、梨川の6河川があり、河口湖畔において最も多くの河川が流入する地域である。地名もこの状況から生じたものと推測される。これらの河川が運んだ土砂が堆積して形成された小規模な扇状地が湖畔に面して連続している。湖畔に面した地域は、湖水の増減により湖岸の進退が繰り返され、湿地帯となり、アシやヨシなどが繁茂する自然景観であった。河口湖によって富士山の溶岩流が食い止められていることから、河口地区には富士山の溶岩流は及んでいないが、火山灰などの堆積は広い範囲で確認されている。鯉ノ水遺跡の調査地点付近は、湖水に面した旧来の湖岸、土砂の堆積により埋め立てられたかつての湖底、霜山などの東に連なる山々で発生した土石流の流路など、長い年月のなかで地形が変化していく状況がうかがい知れる層位が試掘確認調査及び本発掘調査により確認された。

第2節 歴史的環境

河口地区は、旧鎌倉往還（御坂路）の御坂峠の南に位置し、峠を越えて道を往来する人々が休息するための宿場的な地域となり、中世以降は富士信仰の道者が寄宿する御師住宅が軒を連ねる集落となった。旧鎌倉往還は、古代の律令官道（駿路）である東海道の支路・甲斐路の経路を継承していると伝えられ、『延喜式』に記載された甲斐の3駅のひとつ「河口駅」の比定地と考えられている。御師集落の南端に位置する寺川橋から旧鎌倉往還の経路は東に迂回し、追坂（老坂）という霜山から河口湖に突き出す産屋ヶ崎にかけての稜線上にある峠を越え、南に隣接する大字浅川に至る線形をとる。この経路は、江戸時代の後期に編纂された『甲斐国志』に伴い描かれた「都留郡川口村絵図」にも記載されている。この経路の線形については、河口湖の湖水を排出する水路の存在しなかった近世以前において、湖水を迂回することを目的としたものと考えられる。

河口地区の中心的な集落は西川の左岸、寺川の右岸の平坦地上に形成されており、現在も御師集落の地割が色濃く残っている。集落の南北を弧状に旧国道137号（旧鎌倉往還）が縦断し、その東西に細い路地である「タツミチ」が複数交差し、かつての御師住宅へと通じている。集落の中心には、河口浅間神社が鎮座し、『日本三代実録』に記載された貞觀7年（865）に富士山噴火の鎮火のために甲斐国に勧請された浅間明神の比定社として位置づけられ、史跡富士山の構成要素となり、世界文化遺産富士山の構成資産として登録されている。この河口浅間神社の西に旧国道を挟んで西川遺跡（第1図15）が存在する。一般住宅の建設や下水道工事に伴う調査によって奈良時代から平安時代にかけての遺物が検出されており、「川」という地名の記銘と推測される墨書き土器（須恵器）の壺形土器（8世紀中葉）、須恵器や



- 1.御坂峠(史跡富士山構成要素)・御坂城(中近世)
 2.庖橋遺跡(縄文～近世)
 3.谷抜遺跡(縄文・平安～近世)
 4.塚越遺跡(縄文～弥生・近世)
 5.炭焼遺跡(古墳・平安～近世)
 6.井坪遺跡(縄文・平安)
 7.滝沢遺跡(縄文～平安)
 8.追坂遺跡(縄文)
 9.大築地遺跡(縄文)
 10.金山遺跡(縄文)
 11.広瀬の城古山(中世)
 12.大石の城山(中世)
 13.大石遺跡(縄文)
 14.鵜の島遺跡(縄文～古墳)
 15.西川遺跡(奈良～近世)
 16.宮ノ上遺跡(平安～近世)
 17.鯉ノ水遺跡(古墳～近世)

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡（旧鎌倉往還の経路・古代の湖岸推定線）

土師器の破片を二次的に利用した転用硯が出土したほか、富士山麓地域及び山梨県東部地域では初の事例となる8世紀後葉から9世紀初頭に位置づけられる焼き塩に用いた製塩土器の破片も検出されており、御師集落の地下に古代の遺跡が埋蔵されていることが徐々に明らかとなっている。

鯉ノ水遺跡は、河口地区の中心的な集落から南におよそ1km離れた地点に位置し、東に霜山、西に河口湖があり、両者に挟まれた緩やかな傾斜地に所在する。現況としては周辺に水田が広がっている。鯉ノ水遺跡を南北に縦断する町道2101号は旧鎌倉往還の伝承をもつ道路であり、この道路を境に東が滝沢、西が鯉ノ水に小字が分かれ、町道から西の字鯉ノ水の地域は湿地帯で湖水が迫ることもあったと伝えられる。地質的にも字鯉ノ水においては湖底堆積と思われる層が確認されている。町道から東の字滝沢では、霜山から伸びる複数の沢や斜面の崩落により発生した土石流による砂礫などが堆積している。鯉ノ水遺跡の東方約50mには、奈良・平安時代の集落遺跡として知られる滝沢遺跡（第1図7）があり、現在は国道137号河口2期バイパスによって両遺跡は分断されている。滝沢遺跡と鯉ノ水遺跡の間には遺跡の空閑地がある。滝沢遺跡については、平成17年（2005）に国道137号河口2期バイパスの建設工事に伴う第1次調査が、平成21年（2009）、23年（2011）、25年（2013）には、同国道の吉田河口湖バイパスの建設に伴う第2～4次の発掘調査が山梨県埋蔵文化財センターによって実施され、堅穴建物跡が累計で約50棟検出されており、奈良・平安時代の集落が広がっていることが判明し、多量の墨書き器が伴出している。

現在、霜山の西麓から河口湖の沿岸にかけての平坦地には六首川、山の神川、鯉ノ水川の河川流路が固定されているが、鯉ノ水遺跡の試掘確認調査、本調査による土層状況から、かつては土石流が葉脈状に複数回流下していることが想定される。

鯉ノ水遺跡の南方には、旧鎌倉往還の追坂（老坂）という峠道があり、大字河口側では追坂、南に隣接する大字浅川側では老坂と表記し、いずれも読みは「オイサカ」である。両者の中間には子負坂（コオイサカ）という地名があり、南北に同一の地名によって挟まれた状況にあり古代の境界にみられる地名の特徴を有している。「オイサカ」は「オオサカ」（大坂・逢坂）に由来するものと考えられ、この峠が古代甲斐国における郡界などの何らか境界を示している推測される。北から追坂、子負坂、老坂と三つの地名が直線的に連続する。尾根の地点に子負坂が位置しており、「子」は「古」と同じ音読であることから、かつての峠を示す地名とも捉えられ、直線を基調とする古代の道路の様相に合致する。なお浅川側の老坂の南には坂本という小字もあり、古道の経路の峠のたもとを示す地名が現在も確認できる（第1図）。調査地点を南北に横断する町道2101号は旧鎌倉往還の伝承をもつ道路であり、前述のとおり、この道路を境に東が滝沢、西が鯉ノ水と小字が分かれることから、旧鎌倉往還が地域の区割りに意識されていたことがうかがえる。



0 50m
1:2,000

第2図 鯉ノ水遺跡 調査地点位置図

第6章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

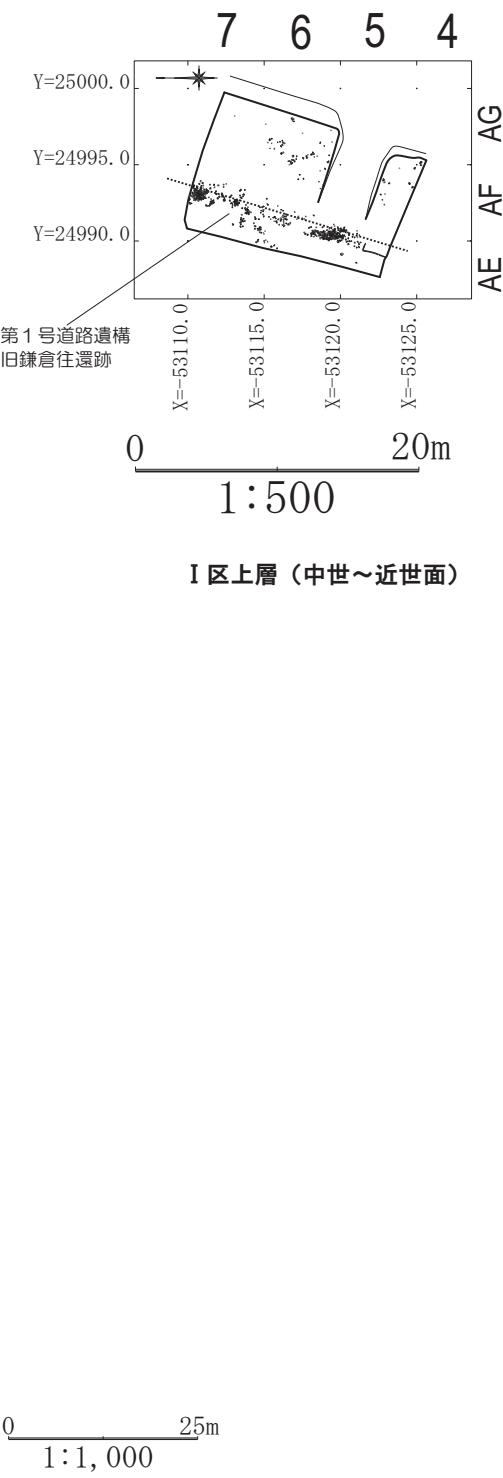
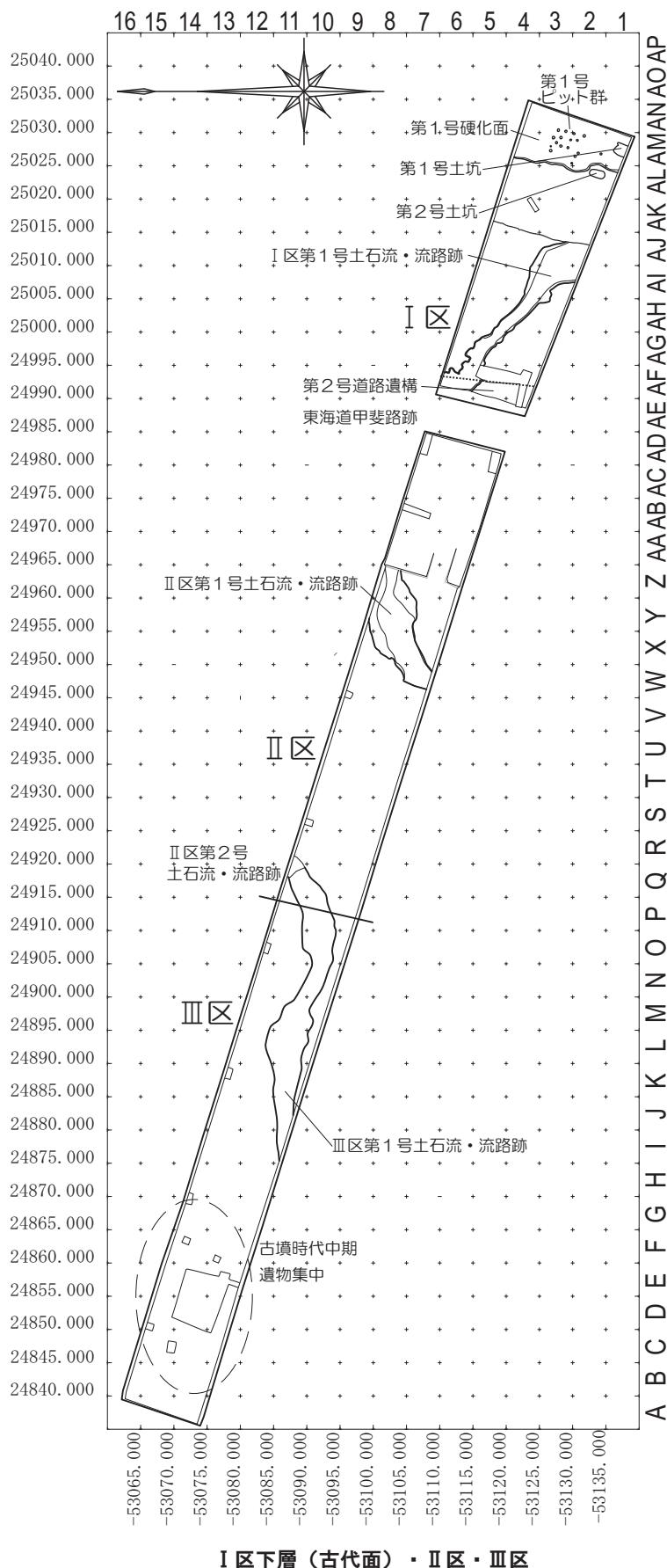
鯉ノ水遺跡は、主要地方道河口湖精進線の道路用地における発掘調査であるため、道路の線形に沿って東西に長い調査範囲を呈しており、第1章で触れたとおり、調査範囲のうち直交する町道2101号を境に東をI区、西の範囲をII・III区とし、II区とIII区は従来の水田地の4筆ずつで分割して設定した（第2図）。I区は東西約45m、西端の南北幅は11m、東端は国道137号河口2期バイパスとの交差点となるため南北幅が広くなり16.8mを測り、面積は630m²。町道2101号を挟んで、II区は東西64.5m、南北12.5mの矩形で面積は806m²。III区は東西89m、南北12.5mの矩形で面積は1121.4mを測る。調査区全体では、東西約200mの範囲に及び総面積は2557m²である。

調査の方法は、重機を用いて試掘確認調査で得られた成果をもとに遺物包含層または遺構確認面まで掘削を進め表土を除去した。グリッドは世界測地系座標に基づき、調査地点の西端側を基準に一辺5mのグリッドを設定した。ただし、発掘調査において記録作業にトータルステーションを用いたため、調査区内にはグリッド杭の打設は行っていない。出土した遺物、検出された遺構の所属グリッドは計測されたデータ上で確認した。調査区の南北方向に南からアラビア数字で1・2・3…、東西方向に西からアルファベットの大文字でA・B・C…の順（Z以降はAA・AB・AC…）で記号を付しており、それぞれが交差する地点をA-1グリッド、B-1グリッドのように表している。座標値については、I区のAH-5グリッドでX=-53120m（南北）、Y=25000m（東西）、II区のX-9グリッドでX=-53100m（南北）、Y=24950m（東西）、III区のN-11グリッドでX=-53090m（南北）、Y=-24900m（東西）、III区D-15グリッドでX=-53070m（南北）、Y=24850m（東西）となっている。標高は、I区のAM-5グリッドで838.95m（下層古代面）、I区のAG-6グリッドで839.5m（上層中世末～近世面）、I区のAF-4グリッド（下層古代面）で838.40m、II区のAC-8グリッドで837.1m、III区のF-13グリッドで834.1mをそれぞれ測る。

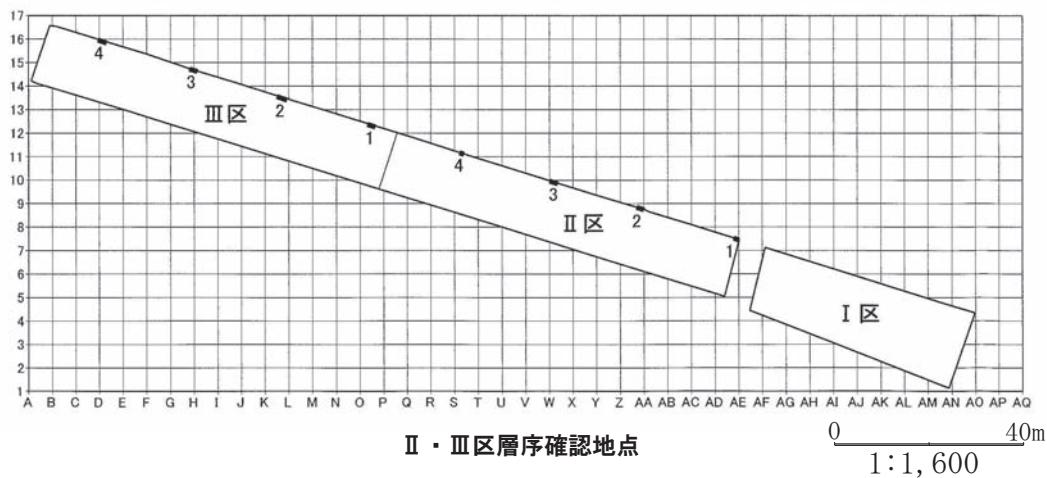
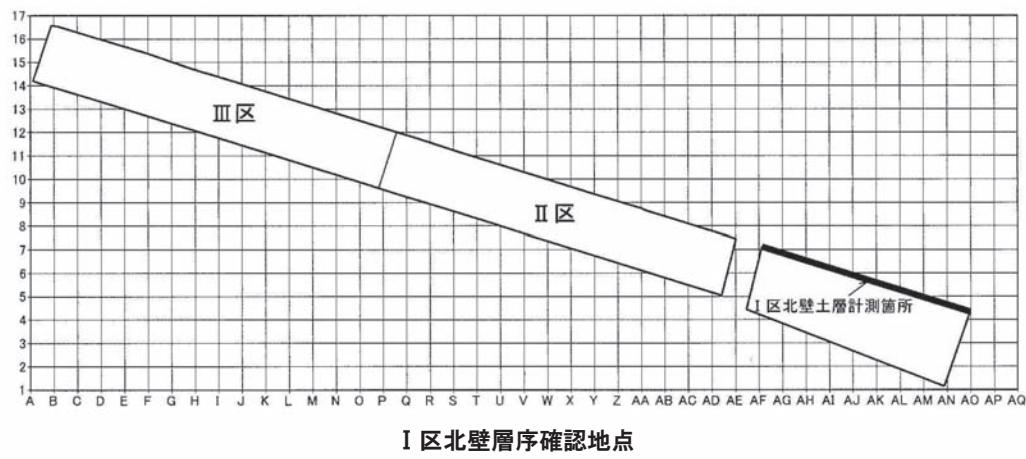
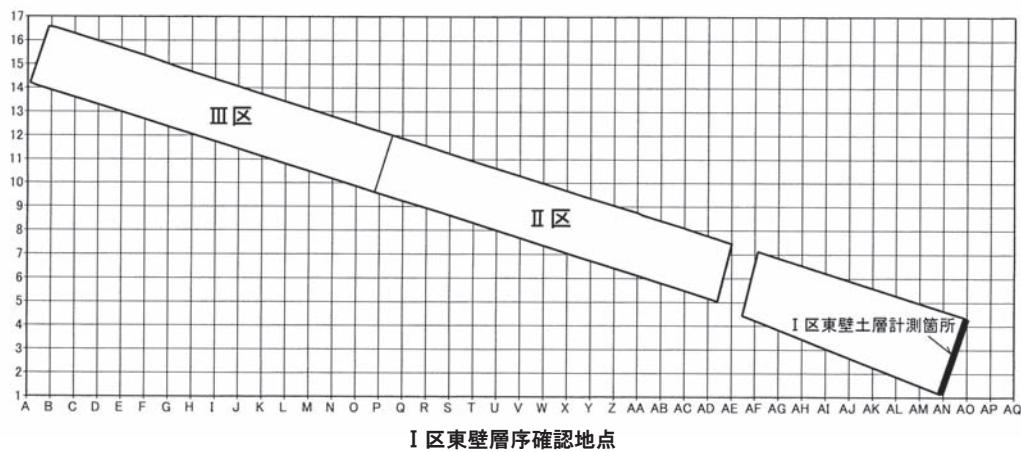
重機による表土の除去が完了した後、人力による掘り下げを進め、遺構確認面の精査を行い、発見された遺構については、土層観察用のベルトを設定し、あるいは半裁して掘削した。また、遺構の範囲及び形状が不明確なものについてはサブトレーナーを設定して土層観察のうえ調査を進めた。各遺構については、平面図・土層断面図を作成し、出土遺物の位置を記録した。これらの図化及び記録作業はトータルステーション、遺跡管理システムのソフトウェアを供えたコンピュータで行った。調査の進捗状況及び発見された遺構・遺物の状況は35ミリ一眼レフカメラで撮影した。そして、各調査区が面的に掘り上がった状態で空中写真撮影による測量・図化を行った。

第2節 基本層序（第4～7図）

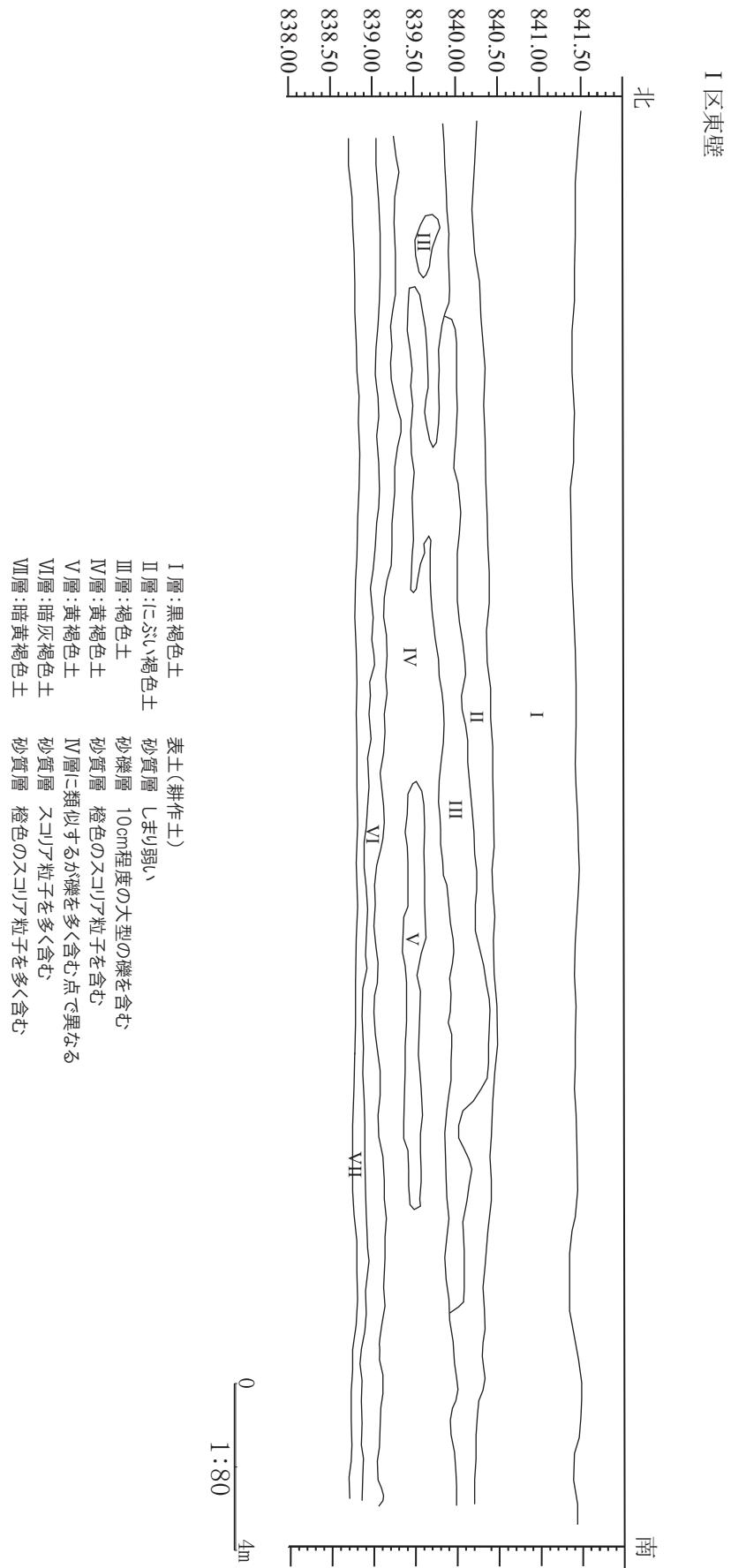
鯉ノ水遺跡は、霜山西麓から河口湖畔にかけての緩やかな傾斜地に立地し、I区からIII区にかけて徐々に標高が下がって行く地形にある。I区からII区にかけては霜山周辺からの土石流による堆積が確認でき、II区からIII区にかけては河口湖の湖水が及んだことによる水中堆積の痕跡が確認された。I区については、調査区の東壁及び北壁の全体を図化し、II・III区について旧来の水田の区画の1筆に1ヶ所の割合で柱状図を作成し土層を確認した。



第3図 鯉ノ水遺跡 遺構配置図・グリッド配置図

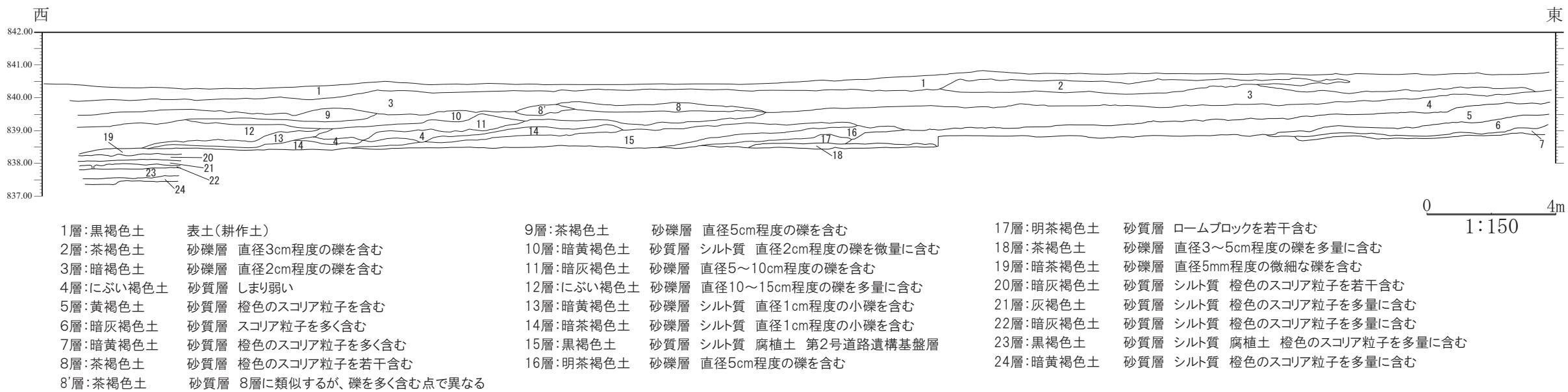


第4図 基本層序確認地点



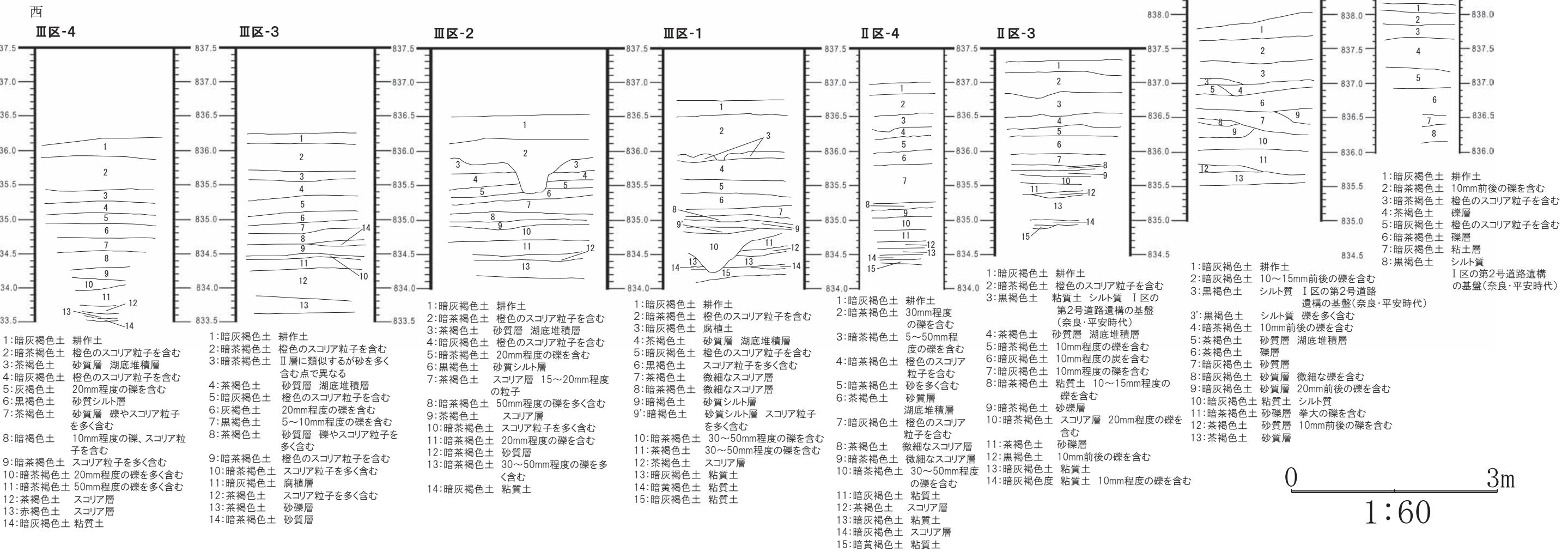
第5図 I区基本層序断面図（1）東壁

I 区北壁



第6図 I区基本層序断面図（2）北壁

II・III区北壁



第7図 II・III区基本層序断面図 北壁

I区の第2号道路遺構・東海道甲斐路跡の基盤となる土層が黒色のシルト質で構成されており、繁茂している植物が腐朽して形成された土層と考えられる。この黒色シルト層が鯉ノ水遺跡における奈良・平安時代の時期を示す層位として捉えられる。この黒色シルト層はII区の東端から西に約40mの地点まで分布する。概ねこの範囲までが古代の河口湖の湖畔に面し水性植物が繁茂していた範囲と認識できる。この層を掘り込んでI区第2号道路遺構・東海道甲斐路跡が構築され、その上に霜山周辺から流下した土石流がもたらした砂礫層が被覆している。この砂礫層には多量の9世紀前半から10世紀初頭の土器が含まれており、10世紀初頭の土器が下限であることから、10世紀初頭に発生した土石流と推定される。この土石流の砂礫の上面にはI区の第1号道路遺構・旧鎌倉往還跡が構築されており、出土遺物に戦国時代から江戸時代にかけてのものが散見することから、土石流によりもたらされた砂礫上において後世に再び道路を復興したものと考えられる。

II区の東端から西に約40mの地点からII区の西端にかけて茶褐色の砂質層の分布が現地表面から約1mの深さに確認された。この砂質層は湖底に沈殿した砂と考えられ、かつてこの範囲に湖水が達していた可能性が示唆される。II区の東端から西に約40mの地点が古代（奈良・平安時代）の湖岸の汀線と推測される。この砂質層の下にはさらに礫層やスコリア層が重なっており、富士山の噴火による火碎物の降下、山からの土石流の流入、湖底での泥の沈殿が長い時代のなかで繰り返されてきたことが捉えられる。III区では暗灰褐色の粘質土が認められ、腐植土として捉えられる層位が古墳時代中期の遺物包含層となっている。この状況から、古墳時代中期は古代よりも河口湖の水位が低く、汀線が西に位置していたと推定される。

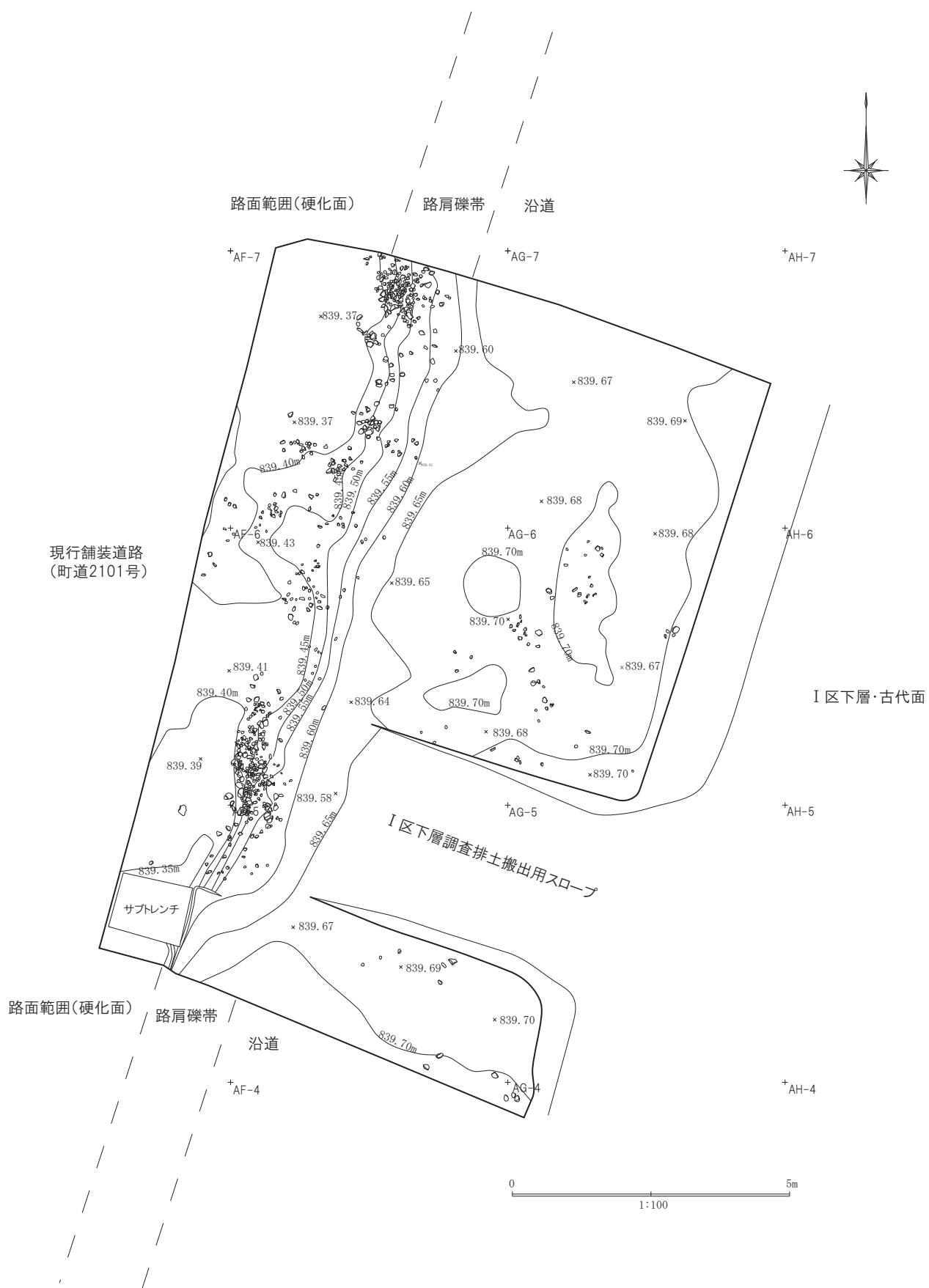
鯉ノ水遺跡の発掘調査地点は東西に長く、霜山山麓から河口湖畔にかけての傾斜地における古環境を示す層位を詳細に観察できる好条件の立地にあると言える。

第3節 I区の遺構と遺物

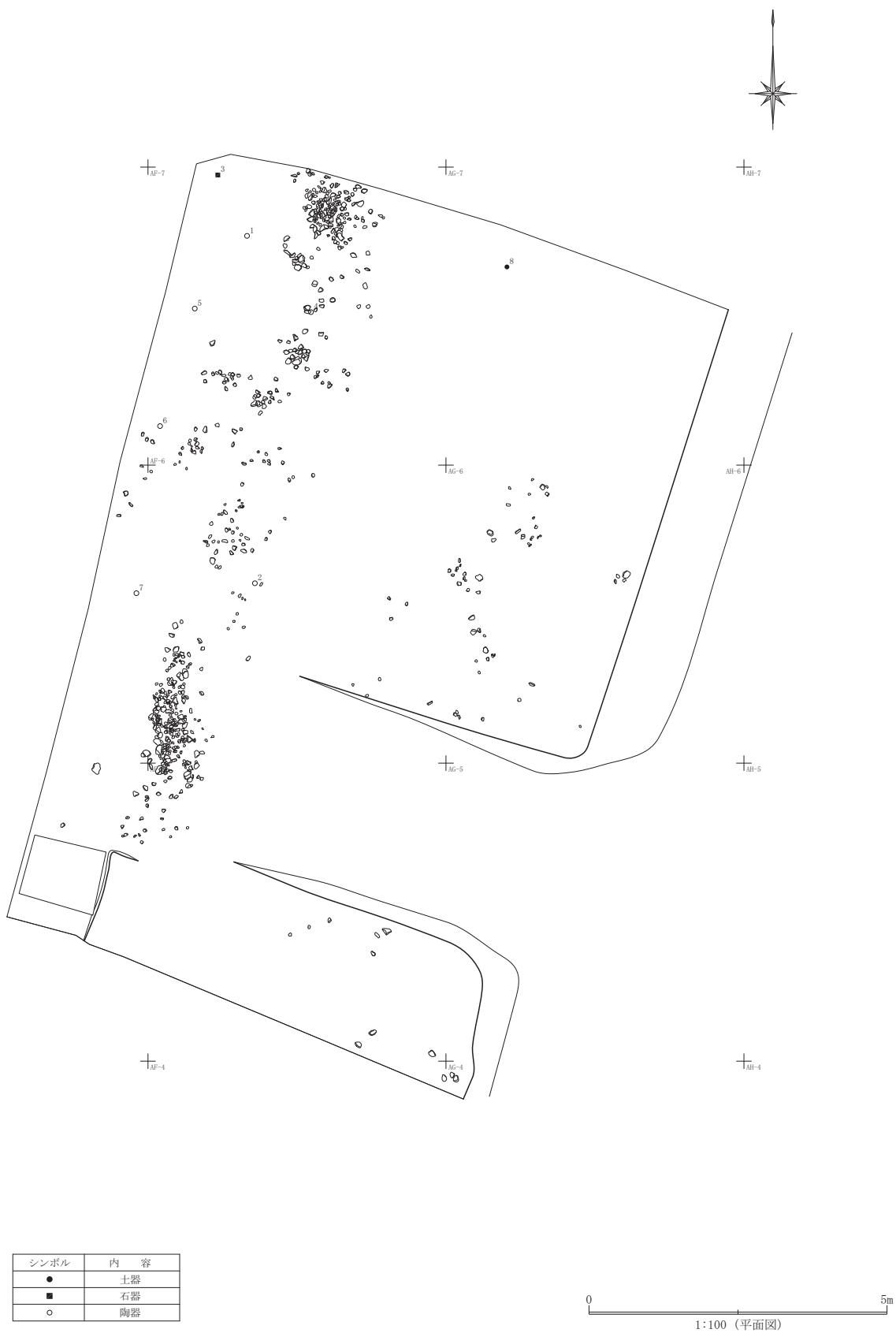
第1項 第1号道路遺構・旧鎌倉往還跡（第8・9図）

鯉ノ水遺跡を南北に縦断する町道2101号は、旧鎌倉往還の伝承をもつ道路であり、この町道に平行する線形の道路遺構が現地表から約1mの深さで検出された。本遺構が属するグリッドは、AE-4・5、AF-4～6である。平成24年度の試掘調査の際に断面で確認されており、そのデータをもとに表土を除去した。南北長11.9m、東西幅1.1～1.86mの規模で凹面を呈しており東側に小礫が幅1m～1.4mで帯状の列で南北に分布している状況が認められる。小礫の帶を含め検出された道路幅は2.1～3.26mである。道路の中心部は現在の町道2101号の下にあり調査をすることができなかったが、対面するII区において類似した痕跡が認められないことから、現在の町道の幅の範囲に収まるものと考えられる。路側の小礫は表面が摩耗しており道路を往来する人や馬などの踏みつけによるものと推測される。道路線形の軸線はN-16°-Eを向いており、現在の町道と同じ方向性を有している。試掘調査時の断面観察では側溝と思われる窪みが認められたが、本調査において平面的な存在は確認されなかった。

江戸時代に描かれた河口村絵図の多くには、鎌倉往還の経路を示したものに河口湖の湖畔を経由するルートと追坂（老坂）を越えるルートを併記する例がみられる（都留市蔵「森嶋家絵図」・河口浅間神社蔵「河口村絵図」など）。このうち、追坂・老坂を越えるルートを「追坂道」と表記する事例もあり、湖水が増水した時など湖岸の往還が通行不能になった際に迂回路として通行すると記されている絵図も存在する（河口浅間神社蔵「河口村絵図」）。発掘調査により検出された第1号道路遺構が鎌倉往還の追坂道であり、甲斐と駿河を結び全国にアクセスする重要な交通路が遺構として確認された。



第8図 I区第1号道路遺構・旧鎌倉往還跡 平面図



第9図 I区 出土遺物分布図（上層 第1号道路遺構・旧鎌倉住還跡）

出土遺物のうち図示し得たものは、第16図-1（上段）1～9の9点である。1・2、4～7、9は陶磁器の破片である。1は、染付の瀬戸美濃系の陶磁器の碗で江戸時代後期・19世紀のものである。2は、江戸時代の碗で、灰釉と鉄釉が確認できる。4・6は、長石釉が塗られた皿の底部片で、戦国時代末～江戸時代初頭（16世紀の終わり～17世紀初頭）の所産である。5は、青磁の蓋で、江戸時代に位置付けられる。7は、江戸時代の染付の小碗で、瀬戸美濃系のものである。9は、天目茶碗の体部下部の小片で、戦国時代末～江戸時代初頭（16世紀の終わり～17世紀初頭）のものと推定される。これらの陶磁器片は本遺構が道路として使用されていた時期に廃棄されたものと考えられ、道路の使用年代を判断する要素としてとらえられる。概ね戦国時代末～江戸時代を通して使用されていたことがうかがい知れる。3は黒曜石製の石器で、わずかながら刃部の加工が認められ、削器の一種と推測される。時期は縄文時代～弥生時代中期と考えられる。8は土師器の甕または壺の胴部の破片であり古墳時代の所産と思われる。8は小礫の帶状の列から東に離れたAG6グリッドから出土した。3及び8は、遺構の基盤となっている砂礫が土石流として東方の霜山山麓から流下した際に運ばれたものと考えられ、鯉ノ水遺跡の東方に縄文時代～古墳時代の遺跡が存在することが示唆される。

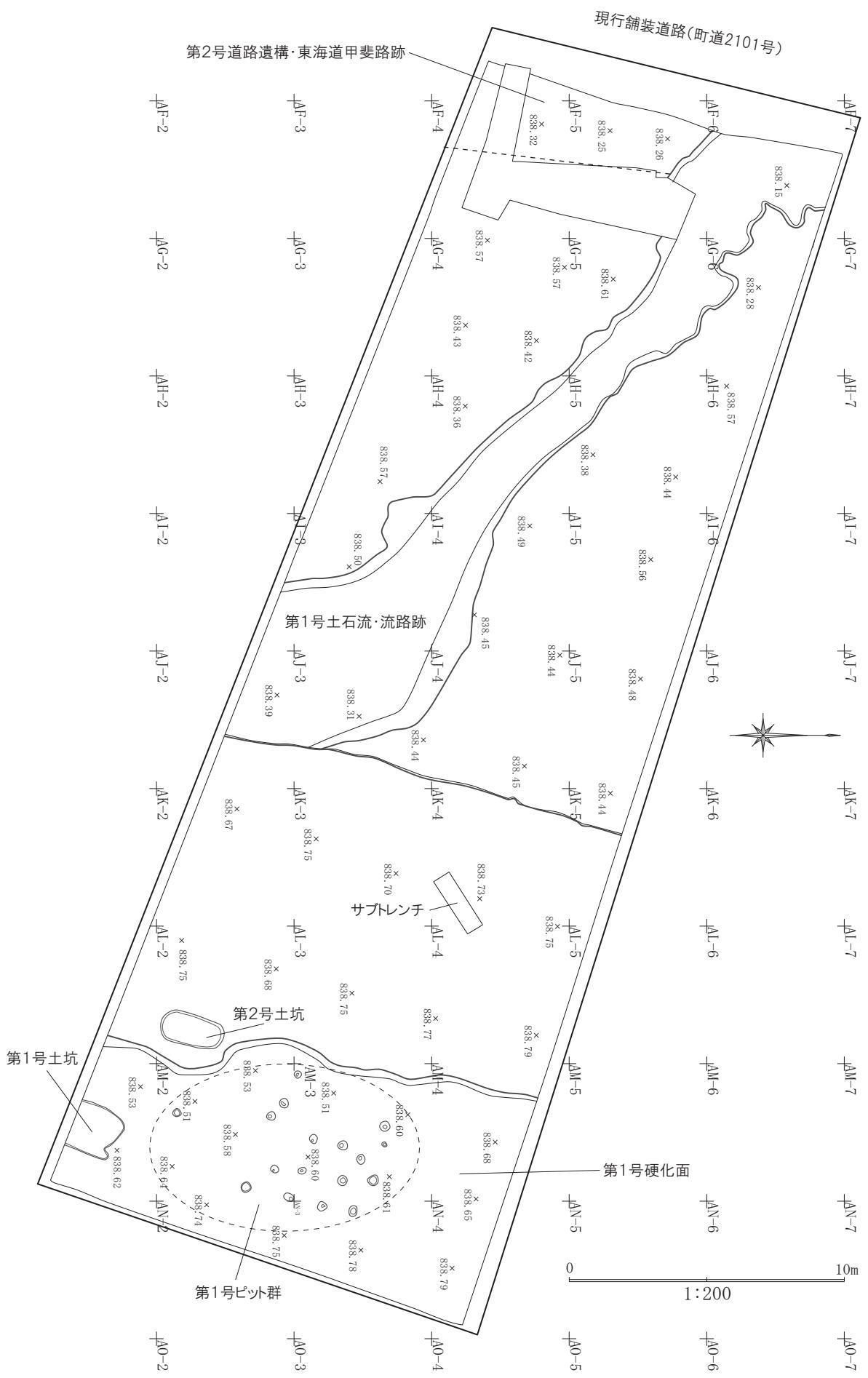
第2項 第2号道路遺構・東海道甲斐路跡（第11図）

旧鎌倉往還道路遺構の約1m下層、現地表面から約2mの深さに構築された道路遺構である。平成24年度の試掘調査の際に硬化面が検出され、サブトレンチを掘削し断面観察をしたところ版築工法が認められたことから道路遺構である可能性が濃厚となった。本調査において、面的な広がりを確認したところ、東西幅3.16m（最大）、8.42m（最長）の範囲に硬化面が分布することが確認され、本節第5項で触れる土石流により本遺構の北側の一部が破壊されていることが判明した。本遺構が属するグリッドはAE-4・5、AF-4～6であるが、AF-6に属する部分の大半は土石流で失われている。第1号道路遺構・旧鎌倉往還跡と同様、道路遺構の中心から西端は現状の町道の下にあり、全容を把握することはできなかったが、最大で検出されている東西幅（道路幅）が3mを超過していること、対面するII区において道路遺構が確認されず現状の町道の直下に収まっていることから、本遺構は6mの幅を有していると推測される。古代東海道の本道が12mであることが調査事例で判明しており、支路である東海道甲斐路は半分の6mであると推定される。土石流が被覆しており、道路面と路肩の判別が困難な状況であったことから、道路遺構に直交するサブトレンチを3基設定し、硬化した版築土を含め断面を観察した結果、南に設定した第1号サブトレンチ及び中央に設定した第2号サブトレンチにおいて、黒色のシルト質の基盤層を皿状の断面に掘り込み粘土や砂を版築によって互層に積み重ねた状況が確認された。北に設定した第3号サブトレンチからは版築は確認されず、土石流の痕跡も認められなかった。第3号サブトレンチ付近では、道路遺構の東側の路肩が現在の町道の下に存在する可能性が考えられる。第1号及び第2号サブトレンチの断面観察により道路の主軸方向が把握され、ほぼ真北を向いており、第1号道路遺構とは主軸方向が異なるものの、概ね並行して遺跡の南北の地下に埋蔵されていると予想される。線形を推定すると鯉ノ水遺跡の南方の追坂（老坂）の登り口から河口集落に向かって直線的に道路が敷設されたと考えられる。

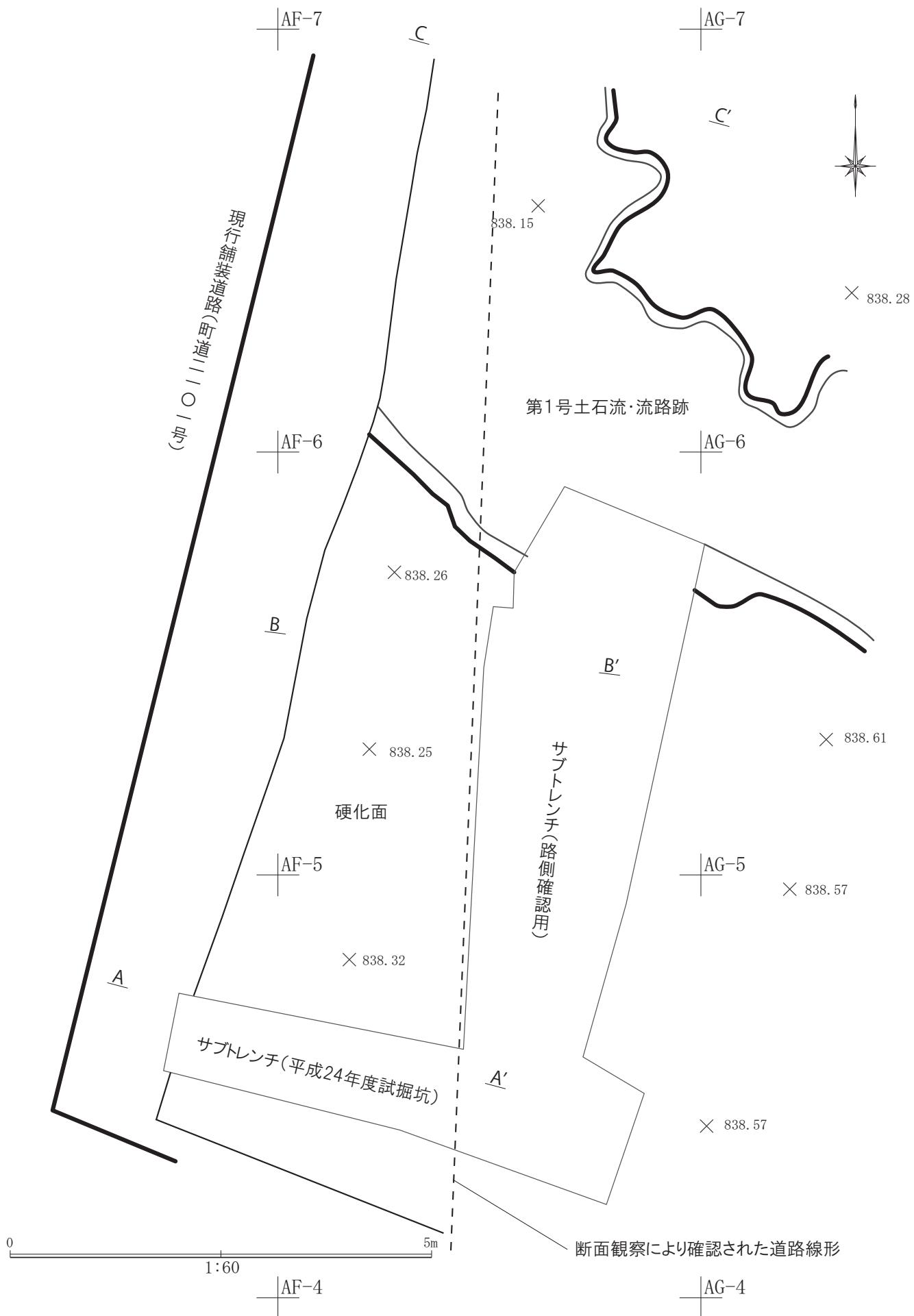
基盤となる層は黒色のシルト質で脆弱なものであり、この層を皿形に掘り込んで砂や粘土を交互に搗き固めた版築工法で道路面を構築していることがサブトレンチの断面観察により確認された。

道路遺構に伴う明確な側溝は確認し得なかったが、本遺構の第1号サブトレンチの断面観察の結果、東の路側にあたる部分に壅み状の痕跡が認められ、小規模な側溝が存在した可能性が示唆される。

出土遺物は、土石流の覆土に含まれるものと除くと図示し得るものは少なく3点のみである。第16図-1

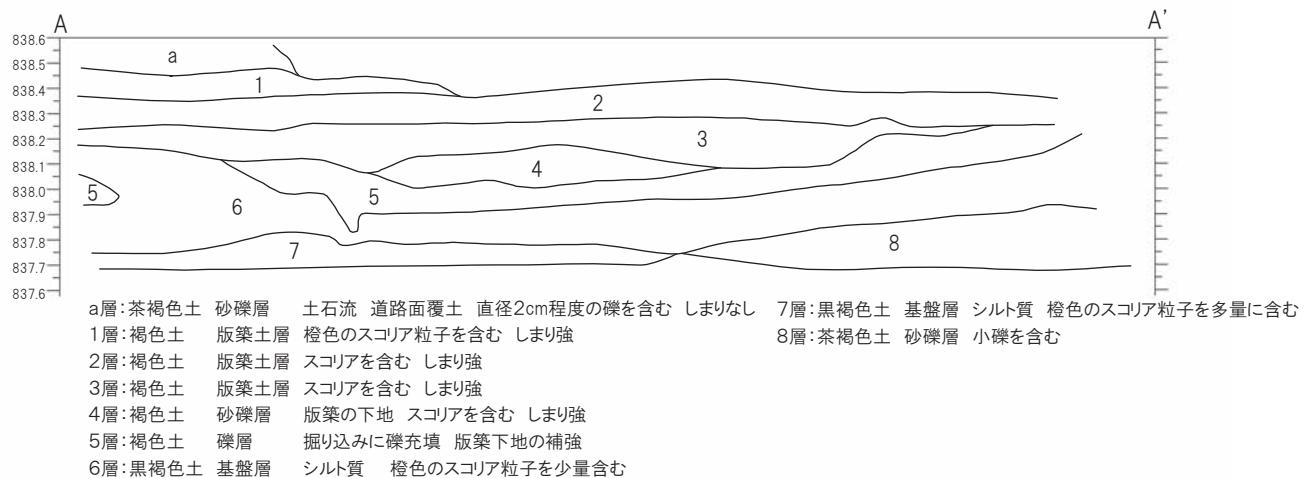


第10図 I区全体図（下層・古代面）

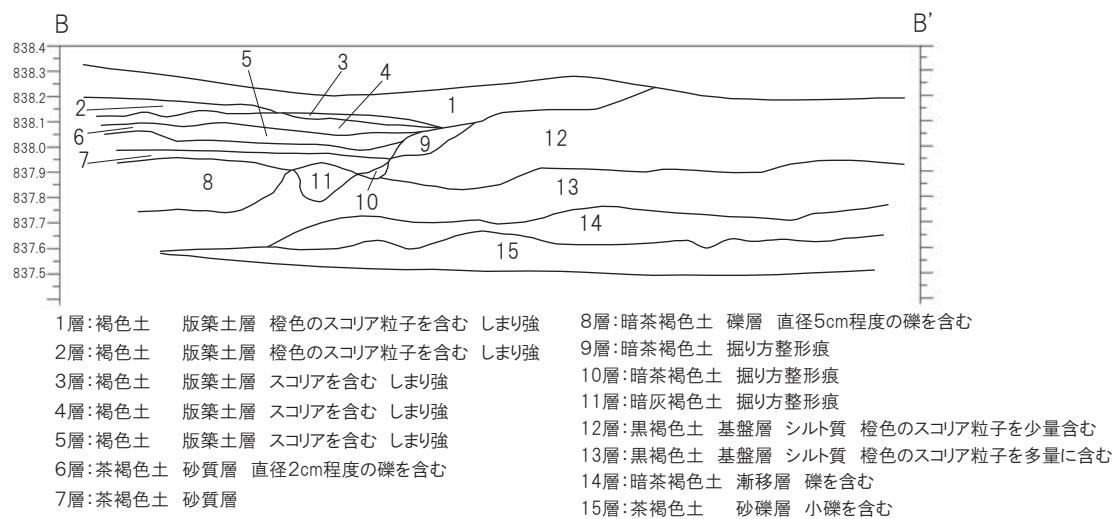


第11図 - 1 I区 第2号道路遺構・東海道甲斐路跡 平面図

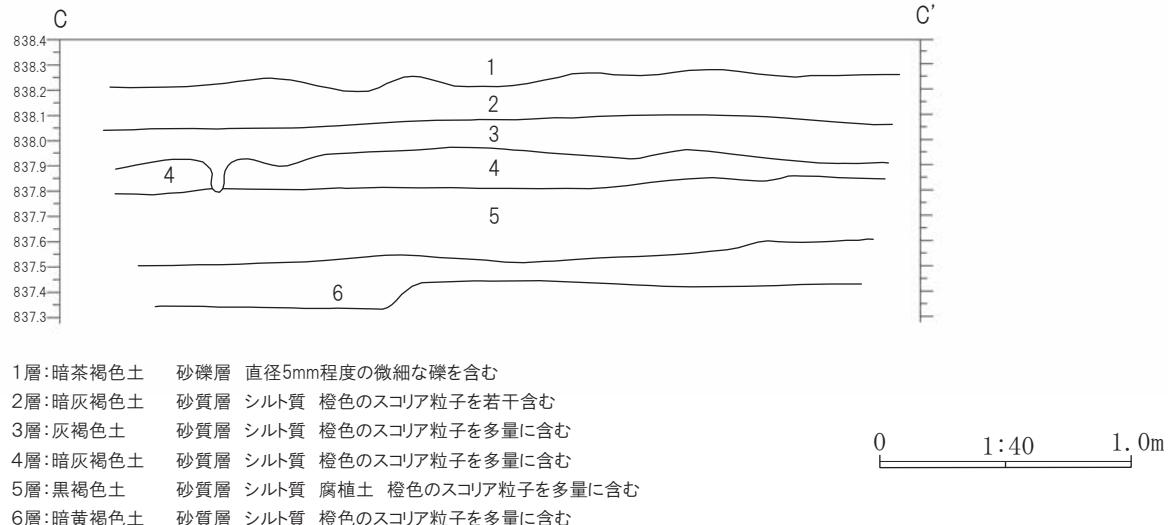
サブレンチ1



サブレンチ2



サブレンチ3



第11図 - 2 I区 第2号道路遺構・東海道甲斐路跡 断面図

(下段) 1は、道路遺構の路肩に南北設定したサブトレンチ内から出土した土師器の壺の底部片で、回転糸切痕が明瞭に認められる。甲斐型土器の胎土と色調が異なり、駿東型土器の胎土に類似する。8世紀末～9世紀の段階と推定される。2は、道路遺構の断面観察のために設定した第2号サブトレンチの掘削時に版築層の下層から出土した。土師器の壺の底部及び体部の破片で外面には細かい磨きが確認され、体部内面、見込み部には暗文が施されている。層位から道路遺構の構築期あるいは構築直後の段階のものと判断される。土器の胎土は甲斐型土器の胎土とは異なり、1と同様に駿東型の胎土と類似している。土器の特徴から8世紀の前半～中葉にかけての所産と思われ、道路の構築期あるいは構築後の間もない早い段階に行われた修築の時期を考えるうえで重要な資料である。3は、土師器の壺の体部の破片で細片ではあるものの、道路遺構の版築層から出土しており、道路遺構の修築期を想定するうえで重要な資料であると判断し資料化を図った。甲斐型壺の9世紀前半までにみられる暗文がみられ、概ね9世紀前半までに道路の修築が行われた可能性が示唆される。道路遺構に被覆した土石流の覆土に含まれる土器の大半は9世紀後半から10世紀初頭にかけてのものであり、版築層に9世紀前半の土器が混入し、版築層の下層から8世紀前半から中葉の土器が出土したことから、道路の構築、修築、廃絶の時期が土器の年代によって確認し得る。

第3項 第1号硬化面（第12図）

遺構確認のための精査を行った際にI区を南北に縦断する帯状のプランが確認され、現在の町道及び第1号道路遺構と平行することから当初は道路遺構の可能性を想定して調査を進めた。掘り方は浅い溝状を呈しており、その窪みに黒色のスコリアが充填され硬化していた。人為的な構築か自然地形における火山噴出物が堆積したのか判断が困難であり、遺構の性格は不明である。第2号道路遺構・東海道甲斐路跡にみられる丹念な版築による互層構造はみられず、硬化面の両側に側溝が認められないことから、古代以降の官道等の道路遺構である可能性は低いと考えられる。土石流路跡に接しないことから、第2号道路遺構・古代東海道甲斐路が土石流により破壊された後の応急的な代替路、第2号道路遺構に先行する古代以前の道路の痕跡など、いくつか可能性が想定されるが、確定的な要素が存在しないことから想定の域を脱しない。硬化面を構成する黒色のスコリアは富士山の側火山の大室山から縄文時代晚期に噴出したものと推定される（大室スコリア）。土器などの遺物の出土はなく、考古学的な年代の位置付けは不可能である。

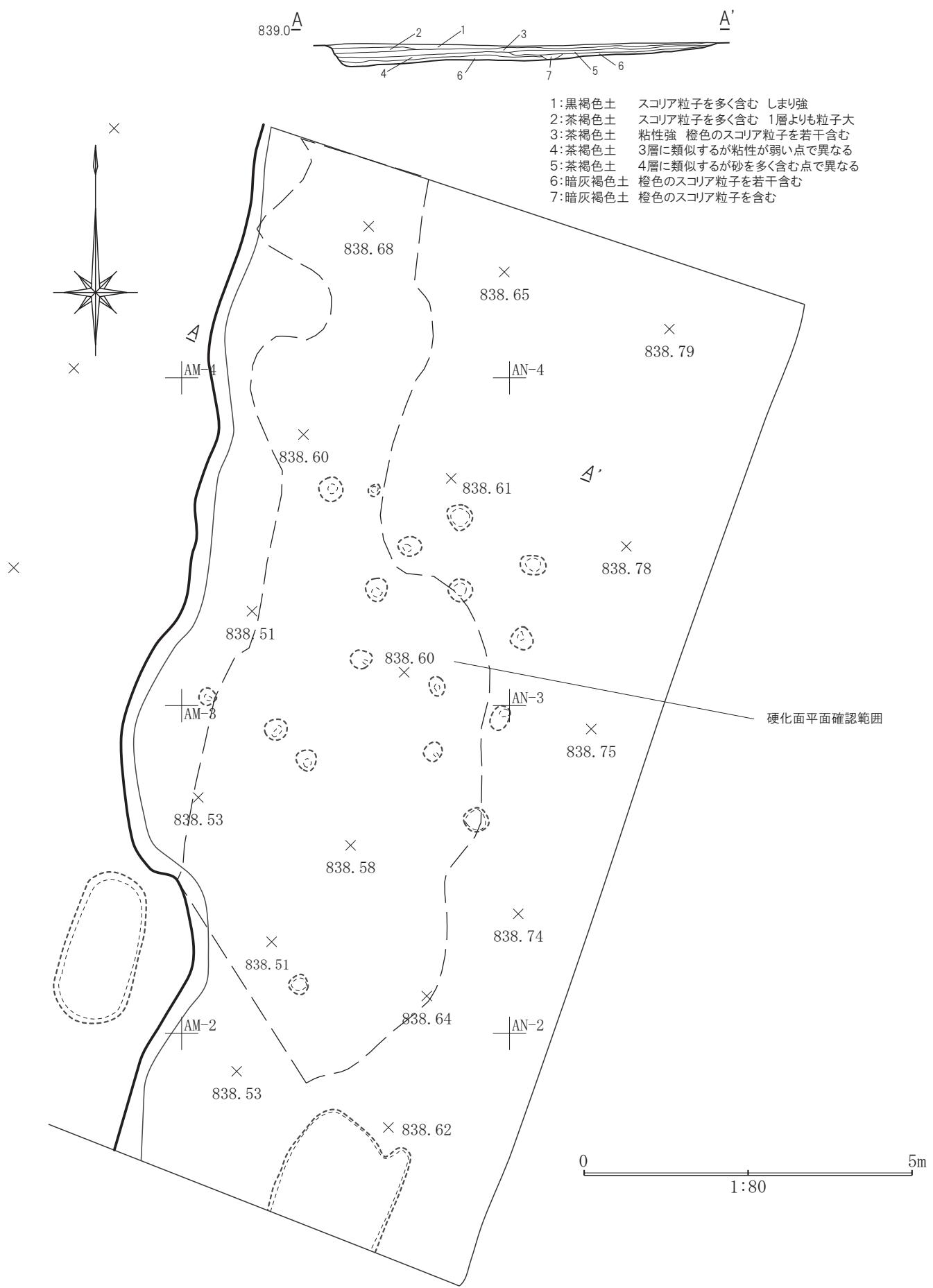
第4項 土坑・ピット（第13図）

第1号土坑

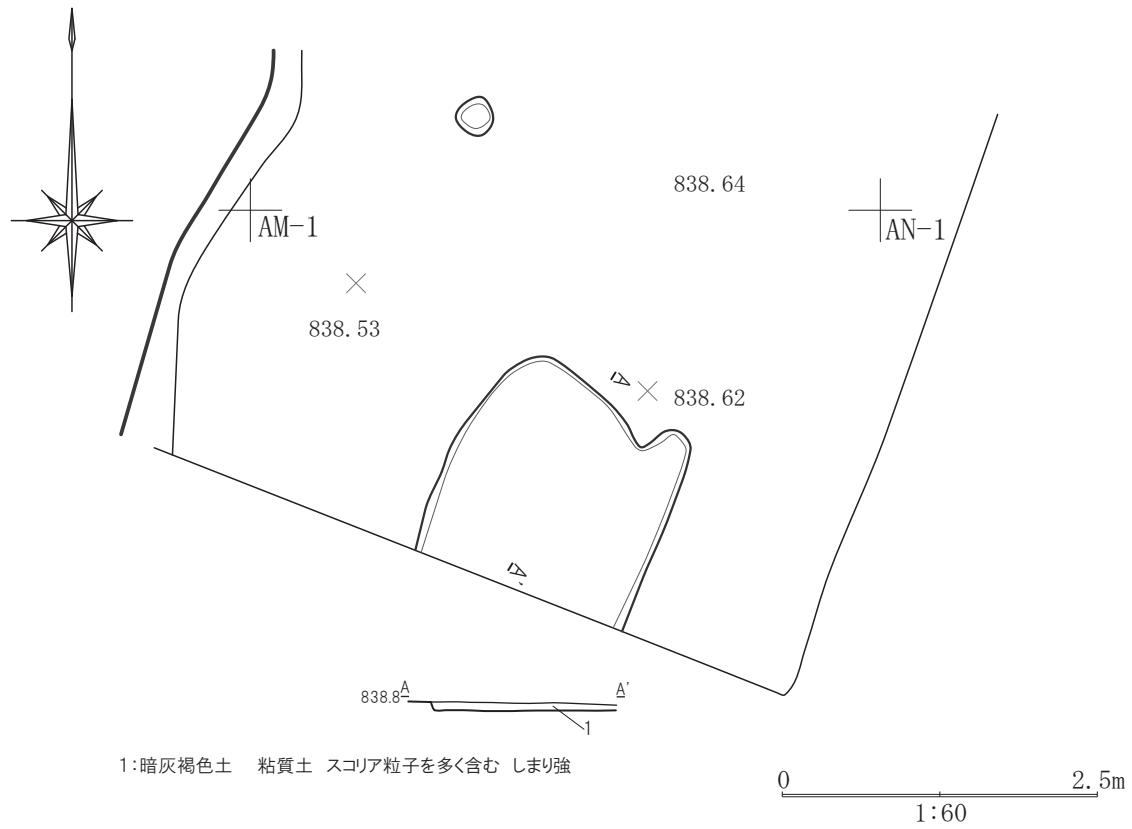
I区の東端に近い、AM-1グリッドから検出された不整形の土坑で、東西幅約1.8m、南北長が検出した範囲で1.5m、南端は調査区外となり全容は不明である。遺構確認面からの深さは約5cmである。楕円形の土坑と細長い溝状遺構が重複している可能性があるが、土層観察の結果切り合い関係は確認できなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。

第2号土坑

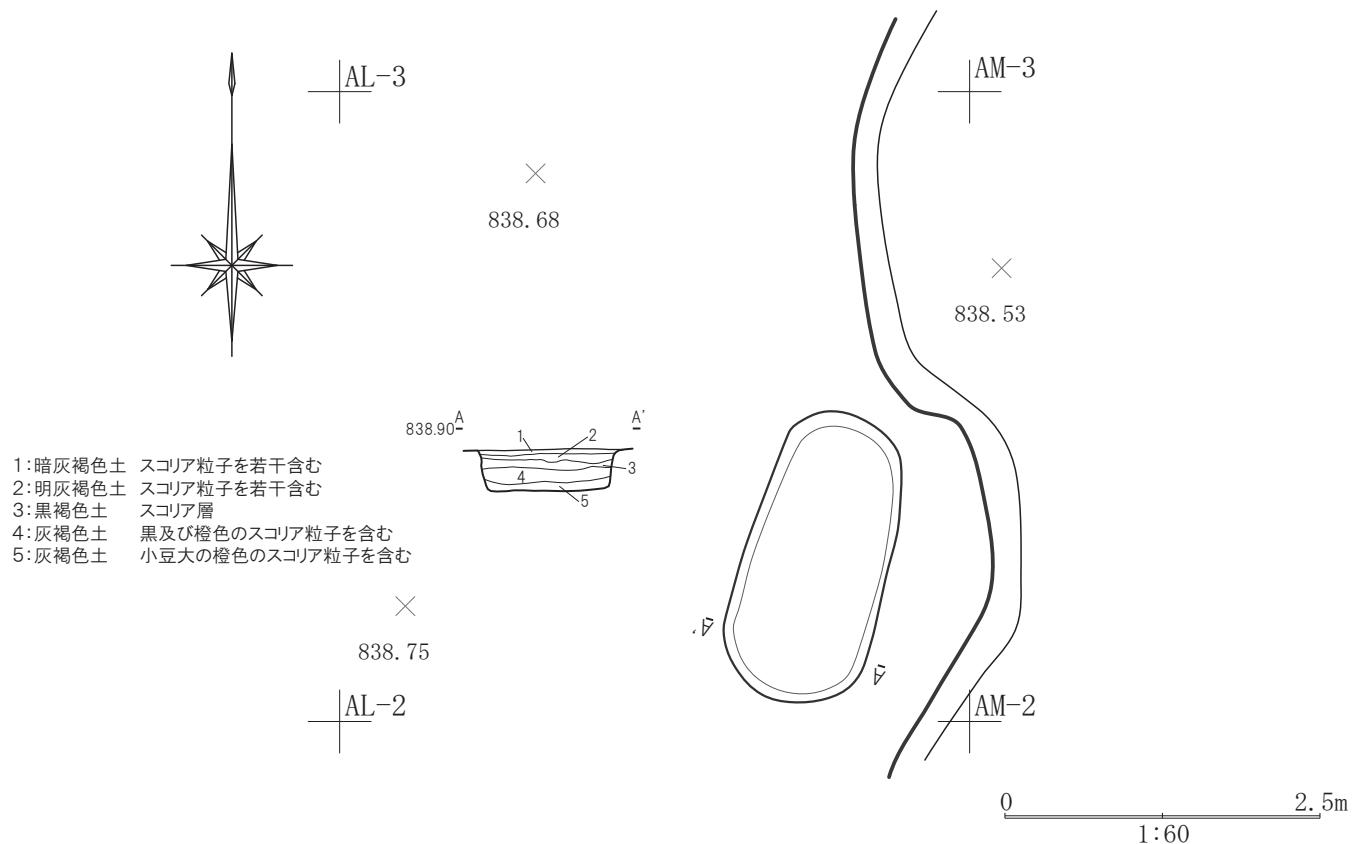
第1号土坑の北西、AL-2グリッドから検出された楕円形の土坑で、東西幅は最大で1.15m、南北長は2.35mを測る。遺構確認面からの深さは35cmで、覆土は水平に5層堆積していることが断面観察により確認された。出土遺物を伴わないと時期、用途等は不明である。



第12図 I区 第1号硬化面 平面図

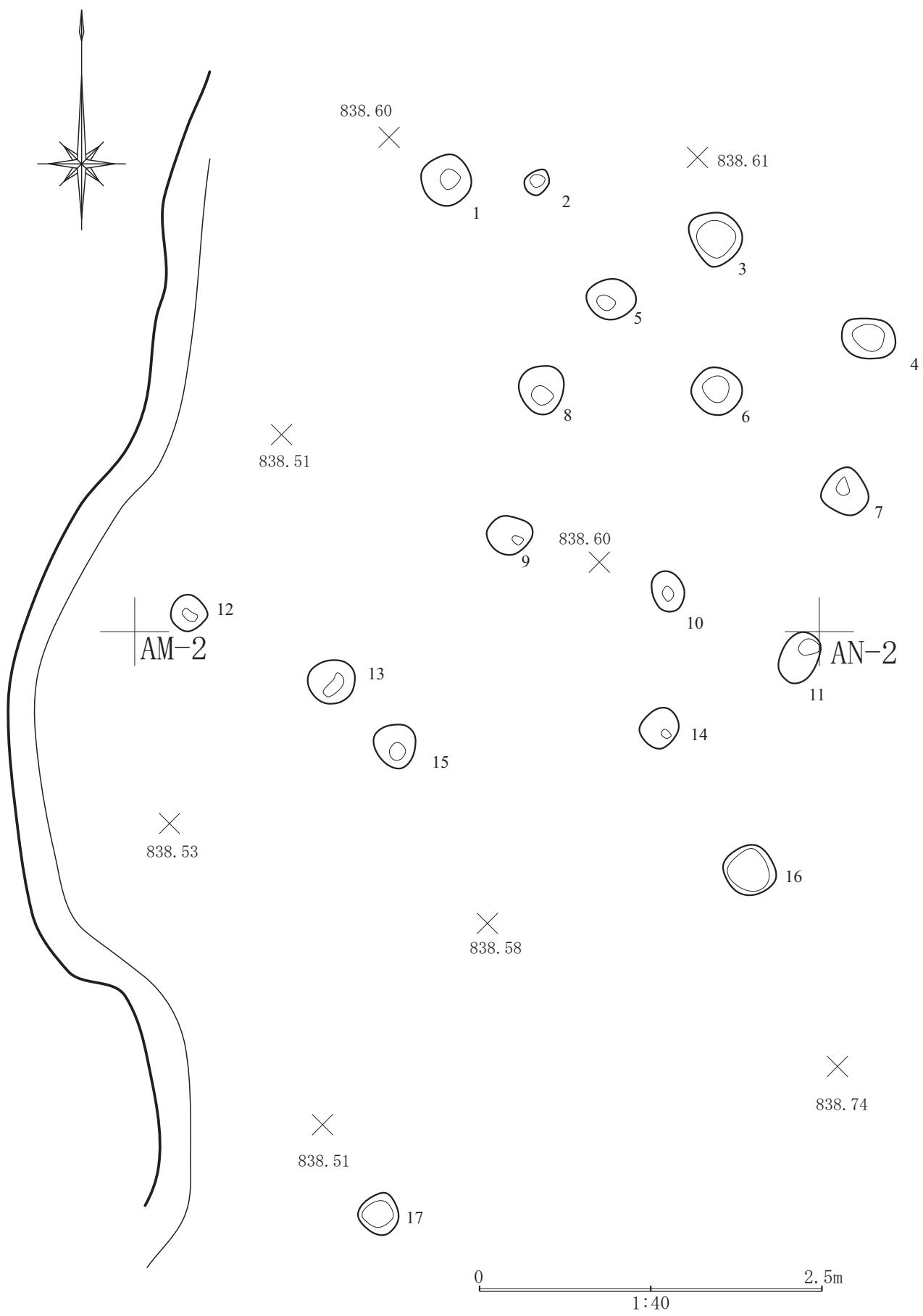


I 区 第1号土坑 平面図・断面図



I 区 第2号土坑 平面図・断面図

第13図-1 I区 土坑・ピット(1)



I 区 第1号ピット群 平面図

第13図-2 I区 土坑・ピット(2)

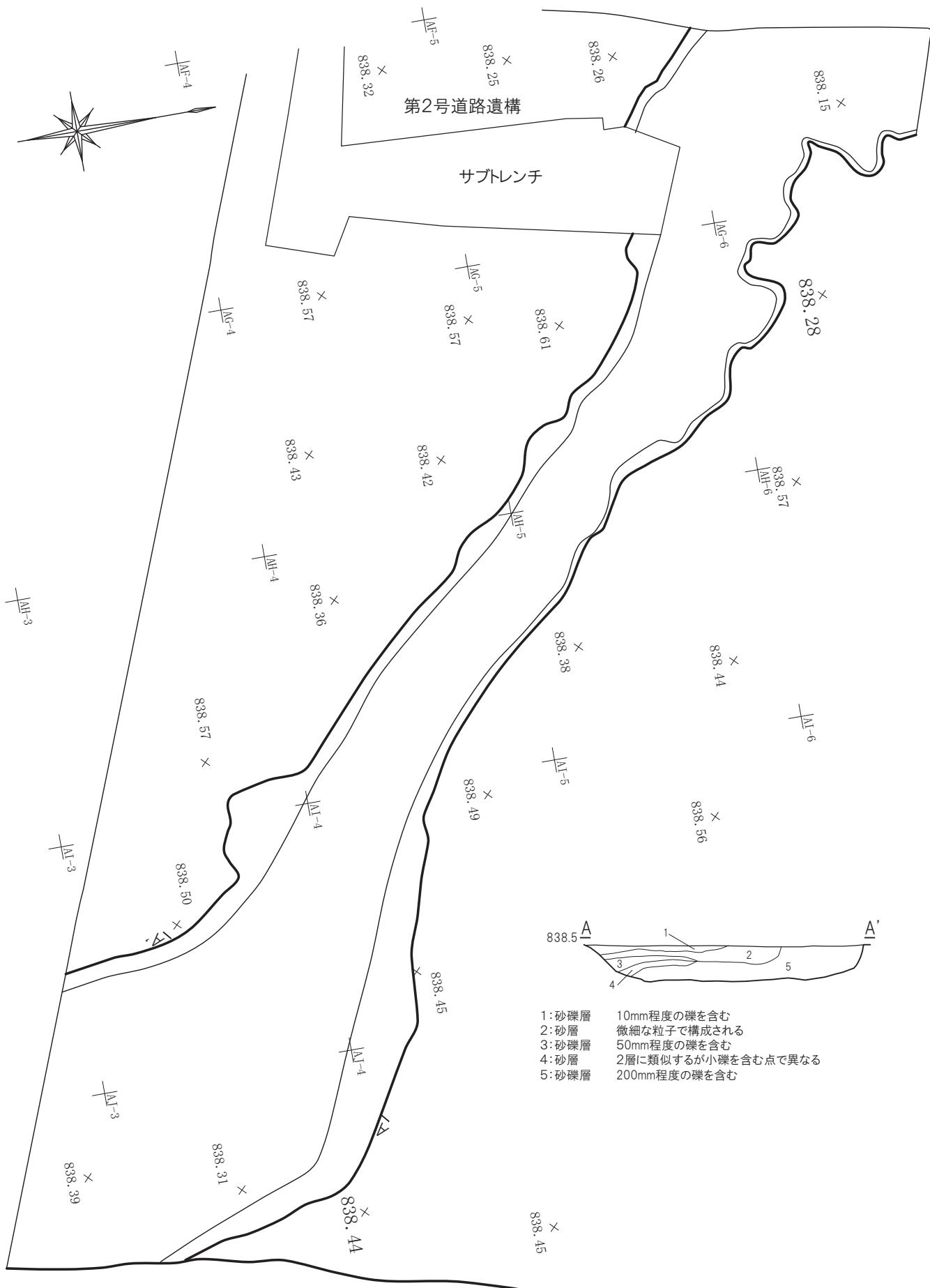
第1号ピット群

I区の東端のAM-2・3、AN-2・3グリッドから検出された17基の小ピットから構成される。第1号硬化面の掘り方を検出した際に確認された。各ピットの覆土は、第1号硬化面よりも上層の黒色土であることから、硬化面の形成よりも後世に掘られた可能性が示唆される。規則的な配置としては捉えられず、各ピットが小型であることから、建築物の跡である可能性は低いと思われ、ピット群の性格は不明である。出土遺物は伴わず、構築時期も不明である。

第5項 土石流・流路跡（第14図）

I区の南東から北西にかけて蛇行する形状で検出された土石流の流路の痕跡である。A I-3・A J-3グリッドからAF-7グリッドにかけて北西方向に伸びる。AF-6・AF-7グリッドでは、第2号道路遺構・古代東海道甲斐路跡を破壊している。覆土（砂礫）中には大量の土器片が混入しており、この土石流は集落遺跡を破壊しながら流下してきたことが推測される。出土した土器の多くは割れ口が摩耗していない状態であり、版築により強固に築造された第2号道路遺構・東海道甲斐路跡を破壊していることからも土石流が猛烈な勢いで流下したことがうかがえる。

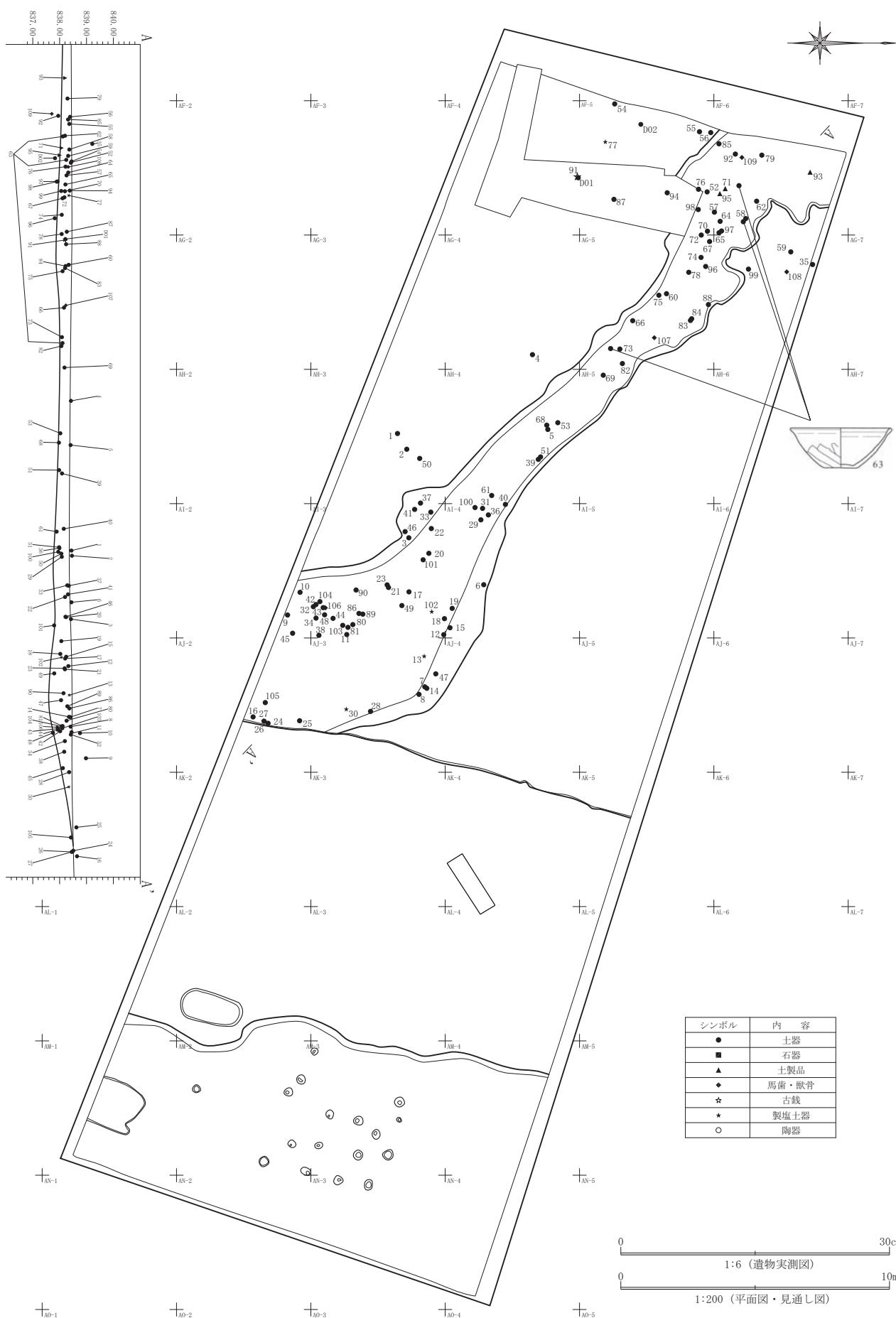
出土遺物は図示し得たものが105点に及ぶ（第16図1~5）。大半は平安時代の9世紀～10世紀にかけての土師器の破片である。1～5は古代の甲斐型壺の破片である。1は、体部の破片で外面に墨書が認められる。内面に暗文が認められないことから9世紀後半から10世紀の初頭のものと思われる。2は口縁部の破片で、外面に判読不明ながら墨書の記銘がある。内面に暗文が施されており、9世紀前半ごろの所産と考えられる。3は口縁から体部にかけての破片で、内面に暗文が認められることから9世紀前半に位置付けられる。4・5は体部の破片で、4の外面には刻書があり、5は外面に墨書があり、いずれも内面に暗文があることから9世紀前半以前のものと推測される。6は古代の甲斐型甕の口縁の破片である。7は甲斐型壺の底部片で、見込み部は剥離して失われているが、底径が大きく回転糸切痕をヘラケズリで調整していることから8世紀末から9世紀初頭にかけての時期に位置付けられる。8は古代の甲斐型甕の口縁の破片で、口唇部は失われている。9～12は古代の甲斐型壺の破片である。9・11は底部、10・12は口縁から体部にかけての破片である。9は見込み部に暗文がなく、体部の立ち上がりの内面に暗文が認められる。10は黒色土器で内面に縦方向に暗文が施されている。11は底部から体部にかけて、12は体部の外面に刻書が記銘されているが、記銘文字の判読は不可能である。13は古代の製塩土器の体部の破片で断面は、いわゆる「サンドイッチ構造」の色調を呈している。14・15は甲斐型甕の破片で、14は体部、15は頸部である。16・17は甲斐型壺の破片で、16は体部内面に暗文が放射状に緻密に施され、底部には回転糸切痕が明瞭に残っており、9世紀前半から半ばにかけての時期に位置付けられよう。17は口縁から体部にかけての破片で、内面に暗文がなく口縁が外反していることから9世紀後半に位置付けられる。18は甲斐型皿の口縁部の破片であり、内面に横方向の暗文が認められる。19・20は古代の甲斐型甕の破片で、19が体部、20が体部及び底部である。21は甲斐型壺の体部及び底部の破片で外面はヘラ削り、内面には暗文が施され9世紀前半のものと推測される。22・23は甲斐型甕の破片で、22は体部で23は口縁部である。いずれも外面は縦ハケ、内面は横ハケという甲斐型甕の典型的な整形方法が認められる。23は口唇が肥厚していることから10世紀前半の所産と位置付けられる。24は古墳時代中期の甕の口縁部の破片である。25・26は古代の甲斐型甕の体部の細片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。27は古代の製塩土器の口縁の破片で、内面の一部は剥離し失われている。外面はナデで整形されており、胎土には白色粒子等が認められる。28は古墳時代中期の甕の体部の細片である。29は古代の甲斐型甕の体部の



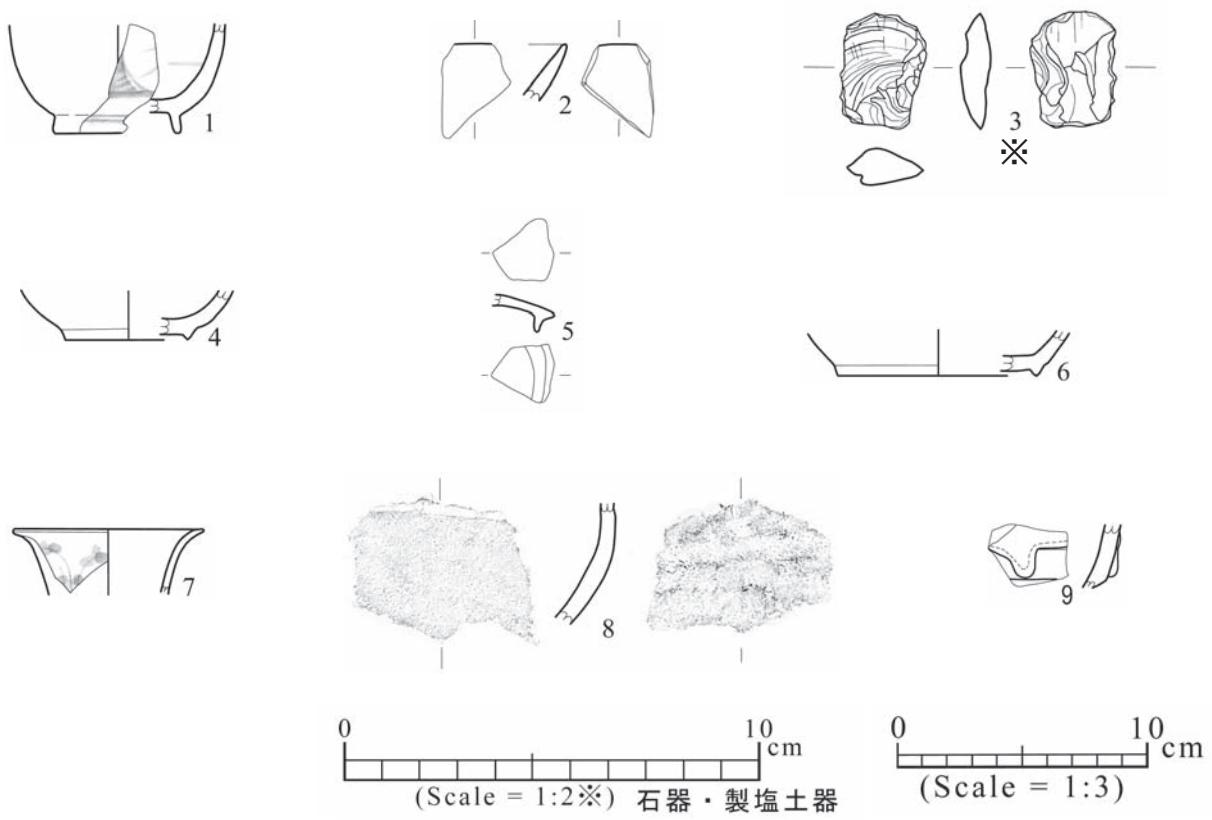
0 5m
1:100

細片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。30 は古代の製塙土器の口縁の破片で、断面の状況等は13 に類似する。同一グリッドの出土であり、同一個体の可能性も示唆される。31 は古代の甲斐型甕の細片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。32 は9世紀後半の甲斐型壺（黒色土器）の口縁から体部下部にかけての破片で、体部の外面下部にヘラケズリ、内面には枝状に不規則に配された暗文が認められる。33 は甲斐型壺の底部の破片で、内面の体部立ち上がりに放射状の暗文があり、外面の体部立ち上がりにはヘラケズリが施されている。底部には刻書の記銘の一部が認められる。34 は古墳時代の甕の底部の破片で、底部には木葉痕が明瞭に残る。35 は古墳時代前期の甕の口縁の破片で、外面には斜め方向、内面には横方向にハケ目が確認できる。東海系に由来し在地化した土器の系統と考えられる。36 は9世紀前半の甲斐型壺の口縁から体部にかけての破片で、内面に暗文が認められることから9世紀前半の所産と推測される。37 は古墳時代前期の甕の口縁の破片である。38 は古代の甲斐型甕の体部の細片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。39 は10世紀初頭の甲斐型壺の口縁の細片で、外面に墨書の記銘の一部が認められる。40 は古代の甲斐型壺の底部の破片で、底面に回転糸切痕が残り、さらに刻書の記銘の一部がある。「#」字状の記号の一部と推定される。41 は古墳時代前期の甕の口縁の破片で、口縁には刺突痕が並ぶ。内外面ともに条痕が認められる。42 は古代の甲斐型甕の体部の細片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。43 は古代の須恵器壺の体部の破片で助宗窯産のものと考えられる。44 は甲斐型甕の口縁から体部上部にかけての破片で体部の外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。口縁の形状から9世紀の前半の所産と推定される。45 は弥生時代中期初頭の長頸受口壺の口縁の破片で、外面には波状に沈線が施され、内面には赤彩された痕跡が確認される。46 は古墳時代前期の甕または壺の体部の細片である。47 は9世紀前半の甲斐型壺の口縁から体部にかけての破片で、体部外面にはヘラケズリ、内面には暗文が認められる。48 は古代の甲斐型甕の体部の細片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。49 は古墳時代中期の甕の口縁の破片である。胎土や色調は24 と類似する。50 は古墳時代前期の壺または甕の体部の破片で、伊勢湾系に分類されるものである。51 は古代の甲斐型甕の体部の破片で外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。52 は古代の甲斐型壺の底部から体部下部にかけての細片で、体部外面に墨書の記銘が認められる。9世紀後半から10世紀初頭のものであると思われる。53 は古代の甲斐型壺の体部下部の破片で、外面にヘラケズリ、内面に放射状暗文がみられる。9世紀前半の所産と考えられる。54・55 は古代の甲斐型甕の体部の細片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。56 は古代の甲斐型蓋の破片で9世紀半ばから後半のものと考えられる。この資料は当該遺構で出土した破片とII区の第1号土石流・流路跡に伴う一括取り上げの小破片とが接合しており、I区とII区のそれぞれの土石流跡は同一の土石流であることをうかがわせる事例である。57 は9世紀前半の甲斐型壺の口縁から体部にかけての破片で、体部外面にはヘラケズリ、内面には暗文が認められる。58 は古代の須恵器の甕の体部の破片で内外面にタタキの痕跡がある。助宗窯で生産されたと考えられる。59 は古代の土師器甕の細片である。60・61 は9世紀前半の甲斐型壺の口縁から体部にかけての破片で、ともに内面に花弁状ないし鋸歯状の暗文が施されている。61 の体部外面にはヘラケズリの痕跡が見られる。62 は9世紀前半の甲斐型皿の口縁の破片で、内面に横方向の暗文があり、渦巻き状暗文の一部と推測される。63 は10世紀初頭の甲斐型壺の破片で、土石流の覆土の砂礫から出土した3点の破片が接合した資料である。遠いものでは約7m離れた地点の破片が接合し、破片の割れ口が摩耗しておらず、フレッシュな状態を維持していることから、土石流の流下の威力と、流下の時期を捉えられる重要な資料として位置付けられる。64 は甲斐型壺の底部片で、体部内面や見込み部に暗文が認められないことから9世紀後半から10世紀初頭のものと推定される。65 は古代の甲斐型甕の底部から体部の立ち上がり部の破片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。66 は

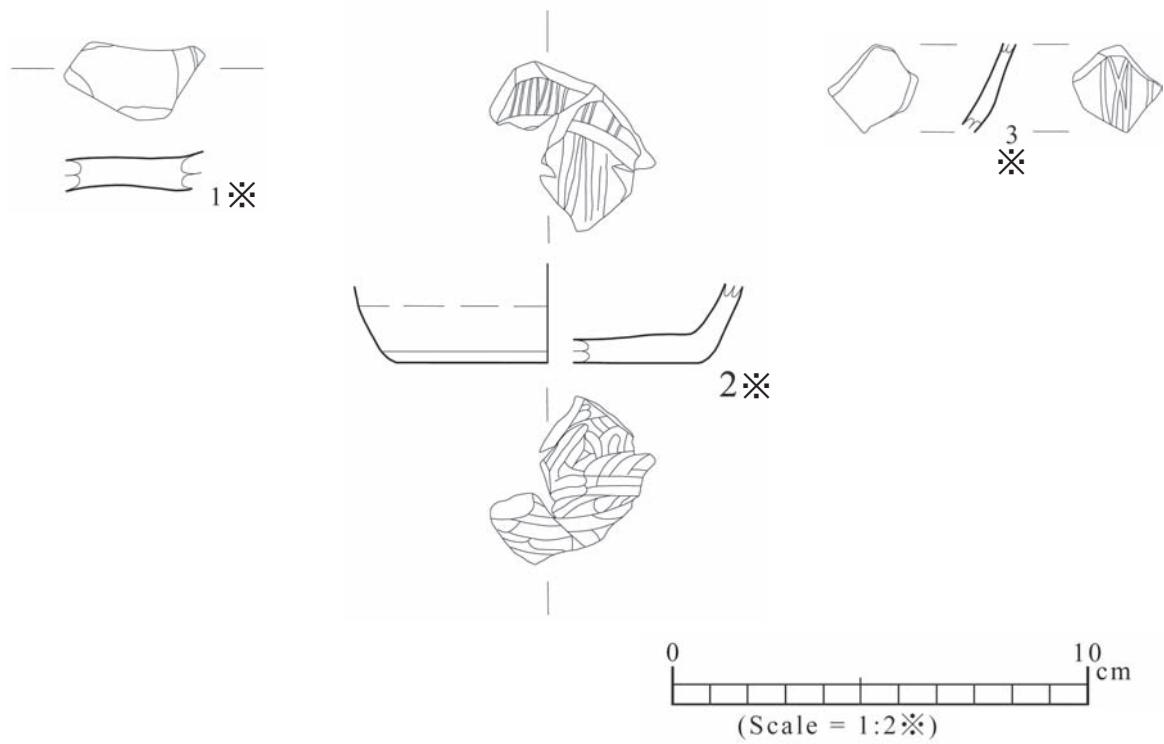
古墳時代の甕または壺の体部の細片で沈線が付けられている。67 は古代の甲斐型壺の底部片で、底面には回転糸切の痕跡が認められるとともに、判読は不可能であるが刻書で文字もしくは記号が書かれている。68~70 は古代の甲斐型壺の口縁から体部下部にかけての破片で、69 は底部の一部も含む。68・69 が 10 世紀の初頭、70 が 9 世紀後半に位置付けられる。いずれも内面に暗文は認められず、体部の外面下半部にヘラケズリが施されている。71 は古墳時代の羽釜の突起部の破片である。72 は古墳時代前期の土師器の壺又は甕の破片で、外面に縦方向、内面に横方向のハケ目が認められる。73 は 10 世紀前半の甲斐型甕の口縁の細片である。74 は古墳時代中期の土師器皿の底部の破片で、見込み部にミガキ、底部外面にケズリが施されている。75 は古墳時代前期の S 字口縁台付甕の体部の細片である。76 は古代の甲斐型甕の体部の細片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。77 は古代の製塩土器の体部の細片である。78 は 9 世紀後半の甲斐型壺の口縁から体部下部にかけての破片で体部外面下部にはヘラケズリが認められる。79 は古代の須恵器の壺の体部の細片で、内外面にタタキの痕跡がある。助宗窯で生産されたと推定される。80 は古墳時代の壺又は甕の体部の破片である。81 は 9 世紀前半の甲斐型皿の底部の破片で、見込み部に渦巻き状の暗文が認められる。82 は古代の甲斐型甕の体部の細片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。83 は 9 世紀前半の甲斐型壺の体部下部から底部にかけての破片である。外面はヘラケズリ、内面には暗文が認められる。84 は古代の甲斐型甕の体部の破片で、外面に縦方向のハケ目が認められるが、内面は不明瞭である。85 は須恵器の皿の口縁の破片で、8 世紀末から 9 世紀初頭に助宗窯で生産されたものと推定される。86・88 は 10 世紀前半の甲斐型皿の破片である。87 は、古墳時代前期の壺又は甕の口縁の破片である。89 は古墳時代前期の甕の口縁の破片で、口縁に刺突痕が連続する。東海系に由来するものが在地化した土器として捉えられる。I 区の第 1 号土石流・流路跡の出土遺物であるが、平成 24 年度に実施した試掘確認調査における 24 号トレンチ、本調査における II 区第 1 号土石流・流路跡に該当する地点から出土した破片と接合したものであり、両者の土石流が同一のものである可能性を示唆させる。90 は古墳時代前期の壺または甕の体部の破片である。91 は近代の 1 錢の青銅貨幣で大正 5 年（1916）から昭和 13 年（1938）に発行されたもので、平成 24 年度に実施した試掘確認調査による掘削の影響で上層から紛れたものと推測される。本遺構とは関係ないが、第 1 号道路遺構・旧鎌倉往還跡に伴う遺物である可能性が高いことから、ここで資料化を図った。92 は古代の甲斐型甕の体部の破片で、外面に縦方向、内面に横方向のハケ目が認められる。93・95 は土錘で、93 については半分欠損しているが、95 は完形である。他の出土遺物の年代観から古墳時代から古代にかけての所産と推定される。94 は須恵器の壺または甕の体部の破片で、内外面にタタキによる整形が認められる。詳細な産地は不明であるが伊豆周辺で生産された可能性が指摘されている。96 は縄文土器の深鉢の破片で、土石流の流路の最深部から出土した。器厚が大きく、把手の剥離した痕跡が観察により確認され、中期後葉の曾利 IV 式または併行する加曾利 E IV 式期に該当するものと考えられる。97 は甲斐型皿の底部の破片で、外面に回転ヘラケズリの痕跡が認められ、9 世紀後半の所産と推定される。98 は古墳時代の甕の口縁の細片である。99 は古墳時代中期の甕または壺の体部の細片である。100 は古代の甲斐型甕の体部の破片で、外面に縦方向のハケ目が認められるが、内面は不明瞭である。101 は古墳時代前期の S 字口縁台付甕の体部の細片で、内外面ともに精細なハケ目が認められる。102 は古代の製塩土器の口縁の細片である。内外面ともにナデによる整形が認められる。103 は古墳時代前期の S 字口縁台付甕の口縁の破片である。伊勢湾系の土器に分類される資料である。104 は古代の甲斐型甕の体部の破片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が見られる。105 は 9 世紀前半の甲斐型壺の体部の破片で、わずかながら外面に刻書の記銘が認められる。内面には縦方向に平行した暗文がみられることから当該期と推定される。



第15図 I区 出土遺物分布図（下層・古代面）

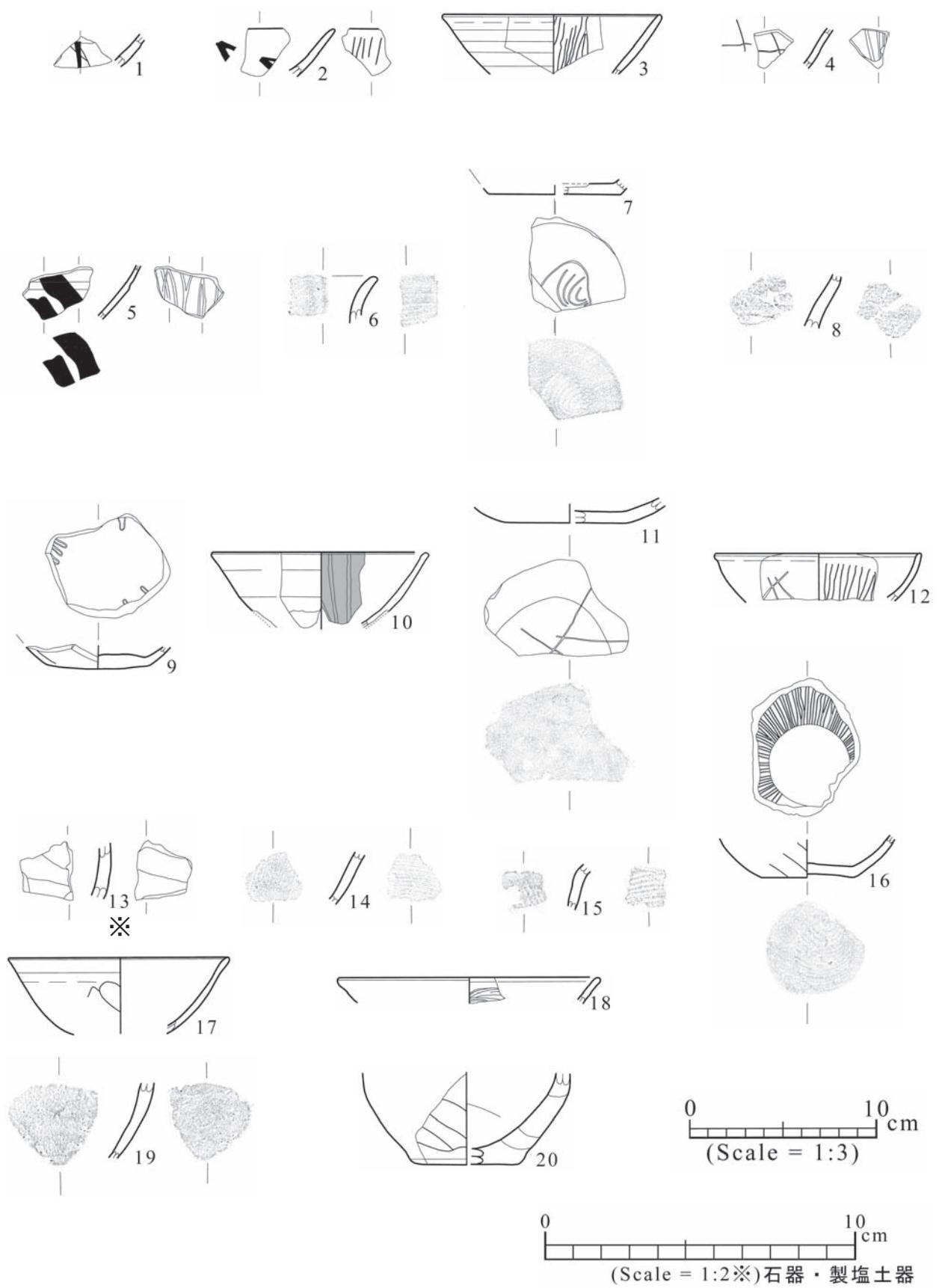


I区 第1号道路遺構・旧鎌倉往還跡 出土遺物

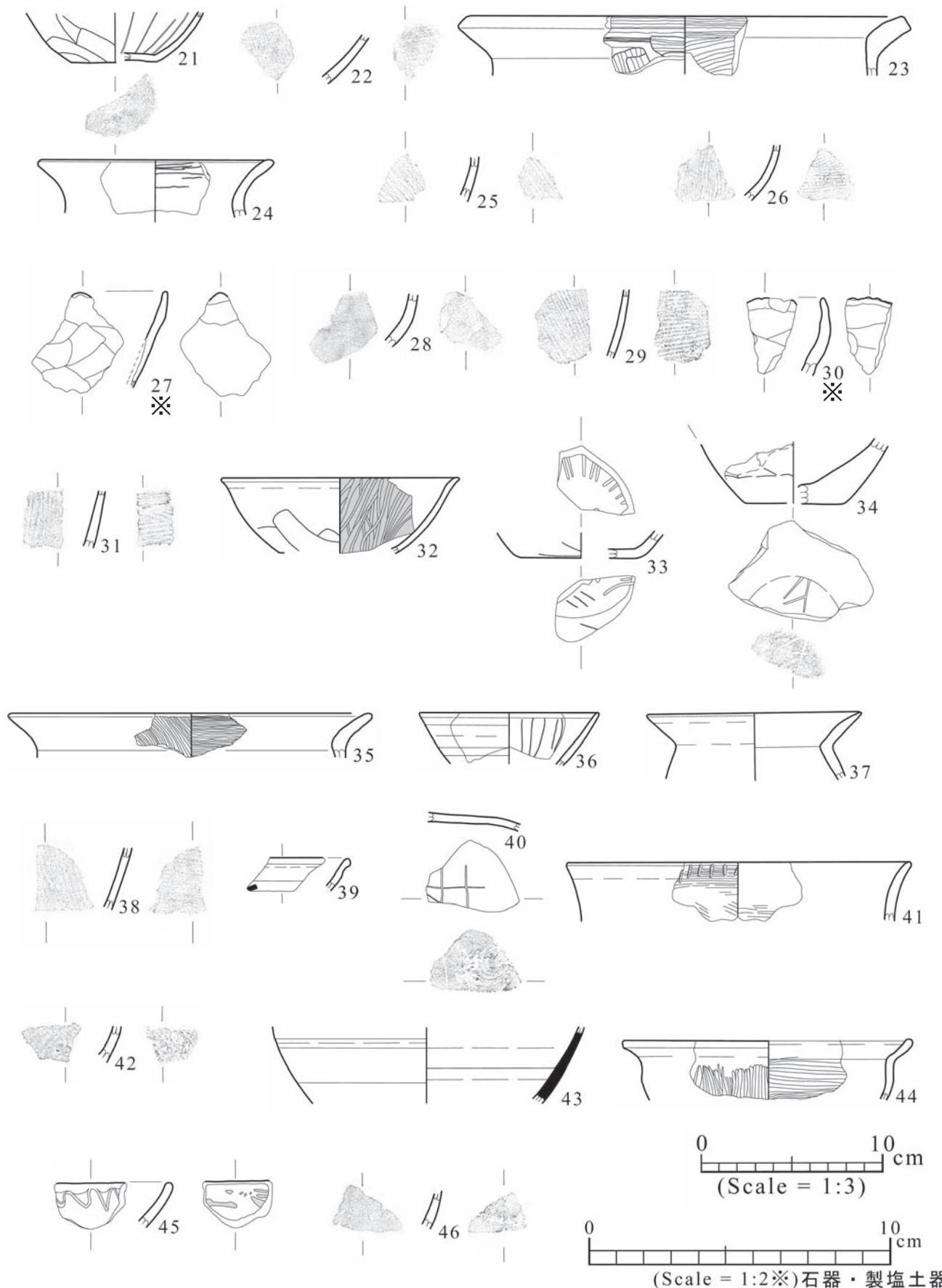


I区 第2号道路遺構・東海道甲斐路跡 出土遺物

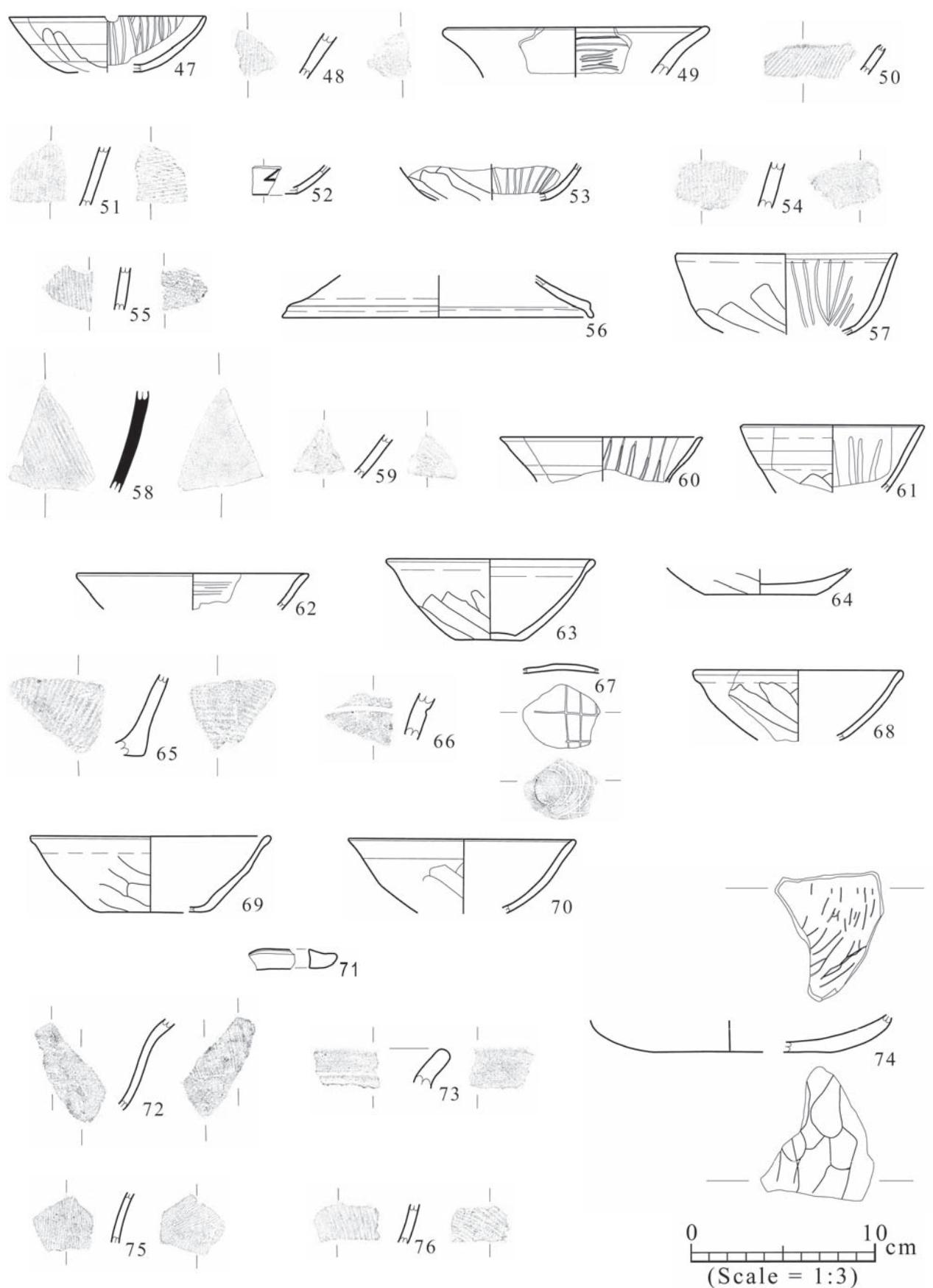
第16図-1 I区出土遺物(1) 第1号道路遺構・第2号道路遺構 出土遺物



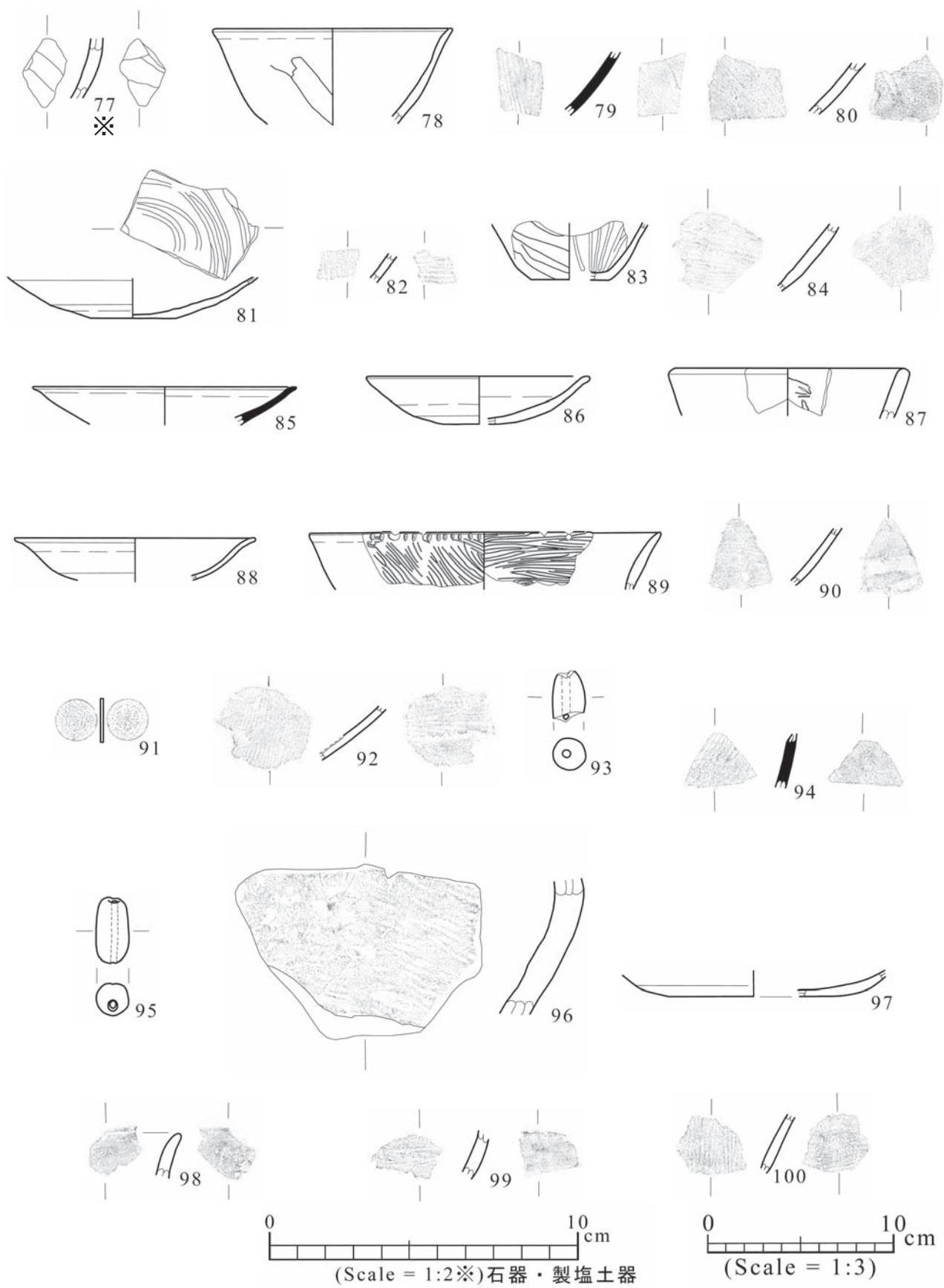
第16図-2 I区 出土遺物(2) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



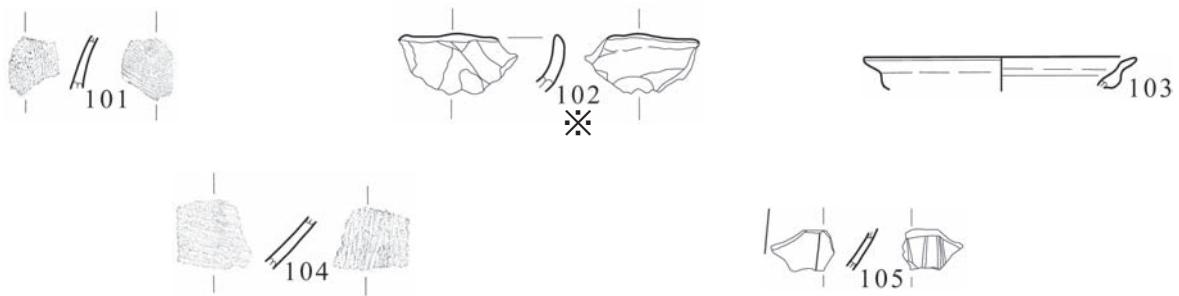
第16図-3 I 区出土遺物(3) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



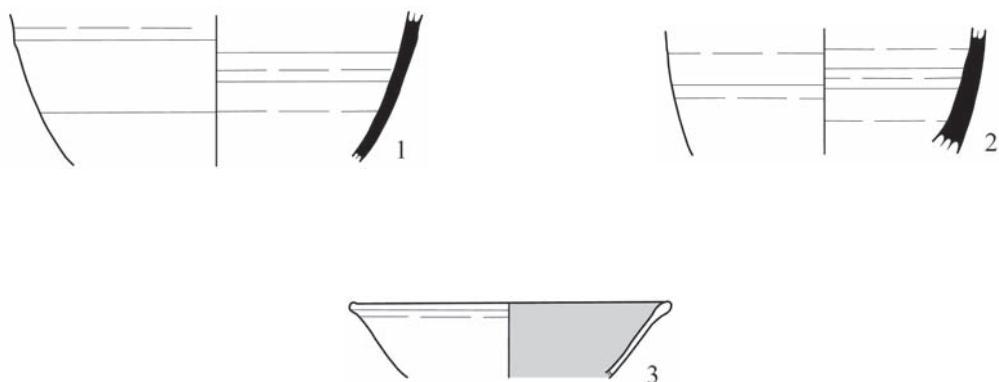
第16図-4 I区出土遺物(4)第1号土石流・流路跡 出土遺物



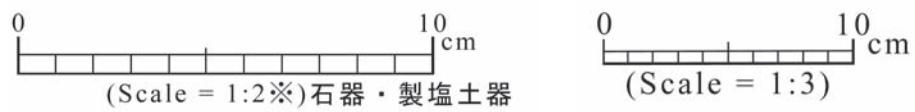
第16図-5 I 区出土遺物(5)第1号土石流・流路跡 出土遺物



I 区 第1号土石流・流路跡 出土遺物



I 区 一括資料（第1号土石流・流路跡 出土遺物）



第16図-6 I区出土遺物(6) 第1号土石流・流路跡 出土遺物・一括資料

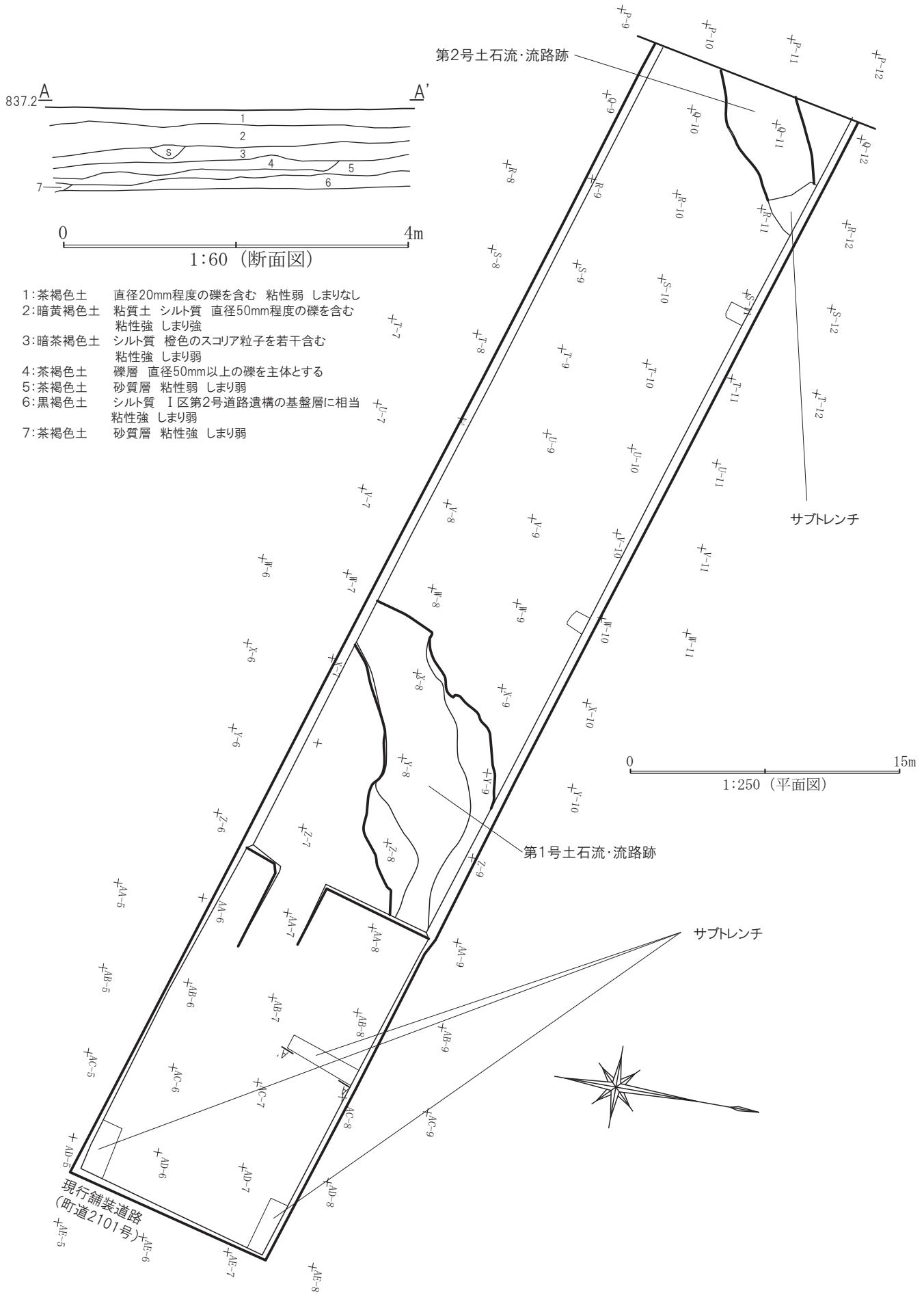
I区の一括資料として取り上げた遺物のうち図示し得たものは3点であるが、いずれも第1号土石流・流路跡に関係する資料と捉えられる。第16図-6の1・2は古代の須恵器甕の体部の破片で、1は産地不明であるが、2は湖西窯で生産されたものと指摘される。3は10世紀前半の甲斐型壺（黒色）土器の口縁から体部にかけての破片である。

第4節 II区の遺構と遺物

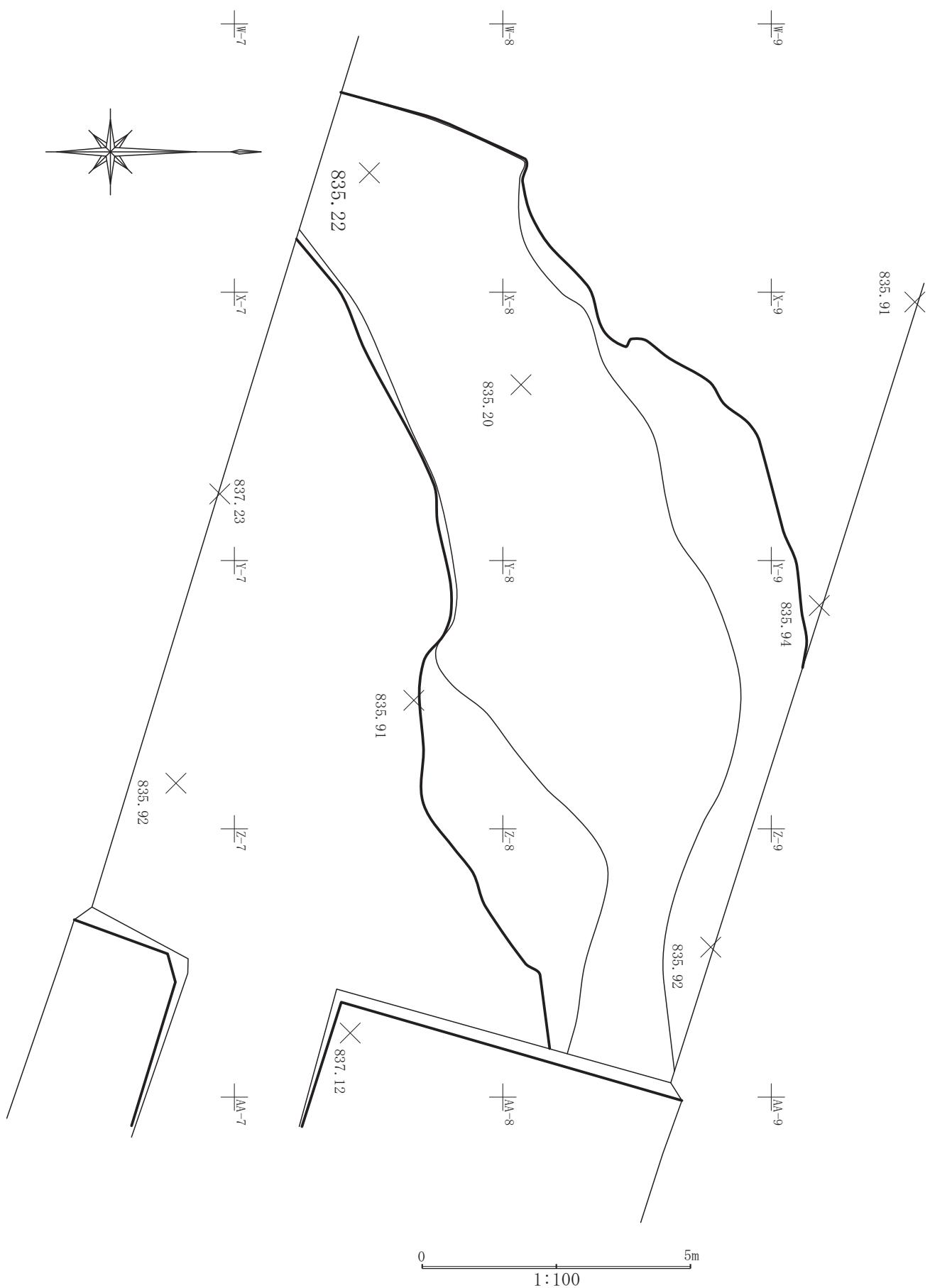
第1項 第1号土石流・流路跡（第18図）

II区の主要な遺構としては、I区の第2号道路遺構・東海道甲斐路跡を破壊したI区第1号土石流・流路跡に連続し、蛇行してII区の北東から南西に通過する土石流・流路跡が検出された。属するグリッドは、W-8・9、X-8～10、Y-8～10、Z-8～10である。最大幅約7.5m、遺構確認面からの深さは最深部で約90cmを測る。土石流の覆土は砂礫を主体とし、拳大の礫が多量に含まれていた。覆土の砂礫には土器が混在しており、I区の第1号土石流・流路跡と同様に鯉ノ水遺跡の東方の集落遺跡を巻き込みながら流下してきたものと推測される。平成24年度の試掘確認調査の段階で砂礫中から古墳時代～平安時代の土器片が多数出土しており、本調査においても多数の土器片が確認された。

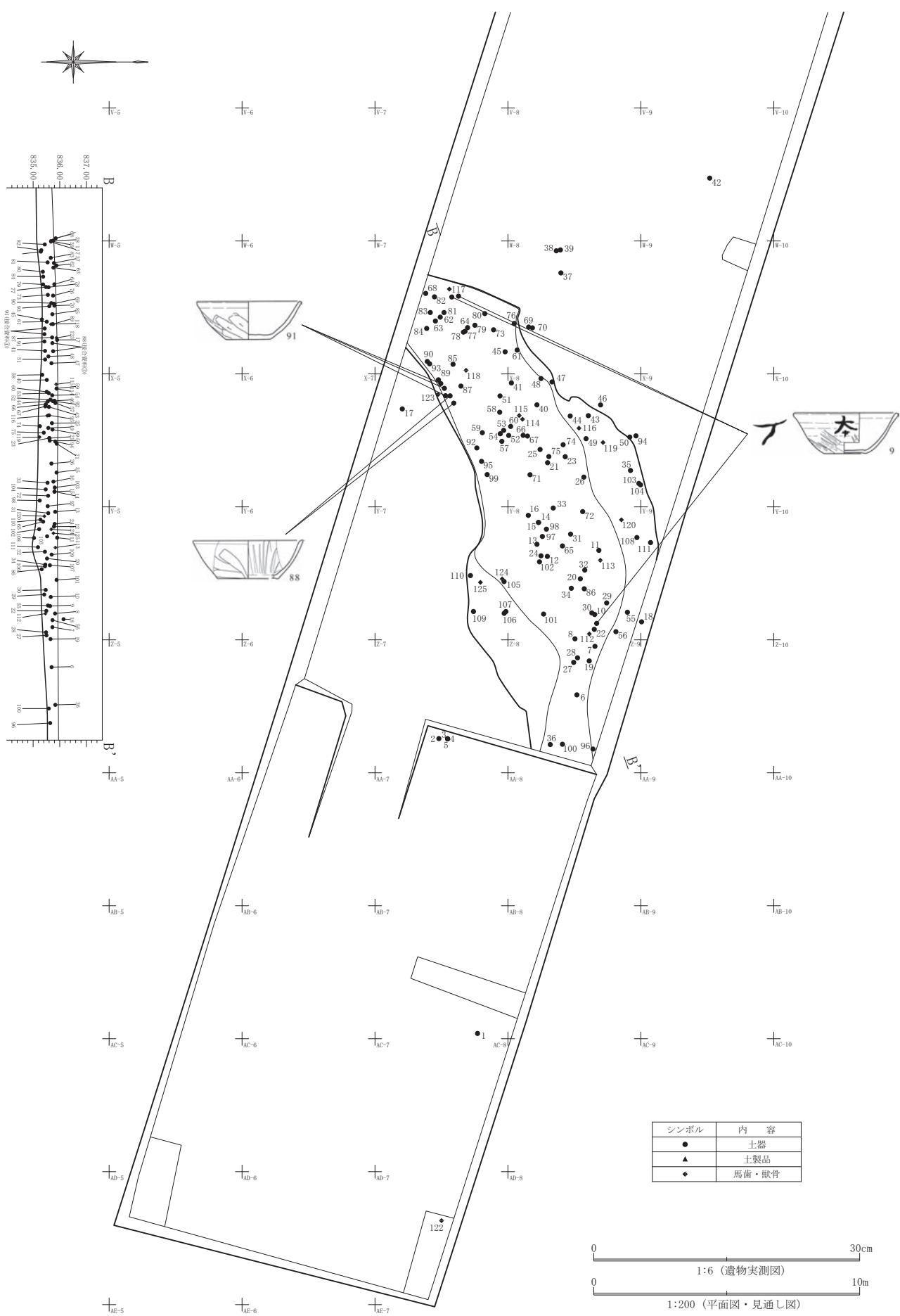
出土遺物のうち土器片は図示し得たものだけで111点を数える（第20図1～5）。1は須恵器の甕または壺の体部の破片である。内外面にタタキの痕跡が確認できる。奈良～平安時代の所産と考えられる。2は古墳時代の土師器の甕の体部の破片で、外面にハケ目、内面にナデがみられる。3は土師器の壺の細片であるが外面に墨書の記銘が確認できる。部分的なものであり判読は不可能である。平安時代の所産と推測される。4・5は古代の甲斐型甕の体部の破片で外面が縦、内面は横方向にハケ目がみられる。6は平安時代の甲斐型壺の底部の破片で、回転台から切り離した際の回転糸切痕が明瞭に残る。7は甲斐型壺の口縁の破片で、外面に墨書の記銘があり、「奉」の略字である「奉」の一部であると推測される。口縁が丸い形状を呈することから10世紀初頭のものと考えられる。8は甲斐型壺の口縁から体部にかけての破片で体部下部にヘラ削りによる調整の痕跡がある。9世紀末の所産と考えられる。9はほぼ完形にし得る資料で、W-7グリッドから2点、Y-8グリッドから1点の合計3点の破片が接合した。土石流・流路跡内で約13m離れた地点どうしの破片が接合し、破断面が摩耗していない状況から、土石流の威力がうかがい知れるとともに、完形の個体が土石流で押し流されて運ばれたと推測される。体部の外面に墨書の記銘があり、7と同様に「奉」の略字である「奉」が正位で記銘され、体部の反対側に「人」が横位で記銘されており、両者を合わせると「奉人」となる。この2文字の記銘は、鯉ノ水遺跡の東方に所在する滝沢遺跡の発掘調査で出土した墨書土器と共通するものであり、記銘文字からも土石流が滝沢遺跡周辺の集落遺跡を破壊しながら流下したことを想定させる。時期は9世紀末の所産と考えられる。10は甲斐型皿の底部の破片で、回転ヘラケズリの痕跡が体部外面の下部にみられる。9世紀中頃に位置付けられる。11は古代の土師器甕の底部の破片で外面に縦方向、内面に横方向のハケ目が確認できる。12は甲斐型壺の口縁の破片で9世紀末のものと考えられる。13は甲斐型皿の口縁の破片で、体部外面にヘラケズリがみられ、9世紀後半のものと思われる。14は甲斐型壺の口縁から体部にかけての破片で外面下部にヘラケズリの痕跡が確認でき、口縁の形状から9世紀後半のものと推測される。15は古墳時代前期の甕または壺の体部の細片で、東海系に由来し在地化したものと推測される。16は甲斐型壺の口縁から体部にかけての体部外面にヘラケズリが施されている。口縁の形状から9世紀末～10世紀初頭の所産と推測される。17は甲斐型皿の口縁の破片で、9世紀中頃のものと考えられる。18は甲斐型壺の口縁から体部下部



第17図 II区 全体図



第18図 II区 第1号土石流・流路跡



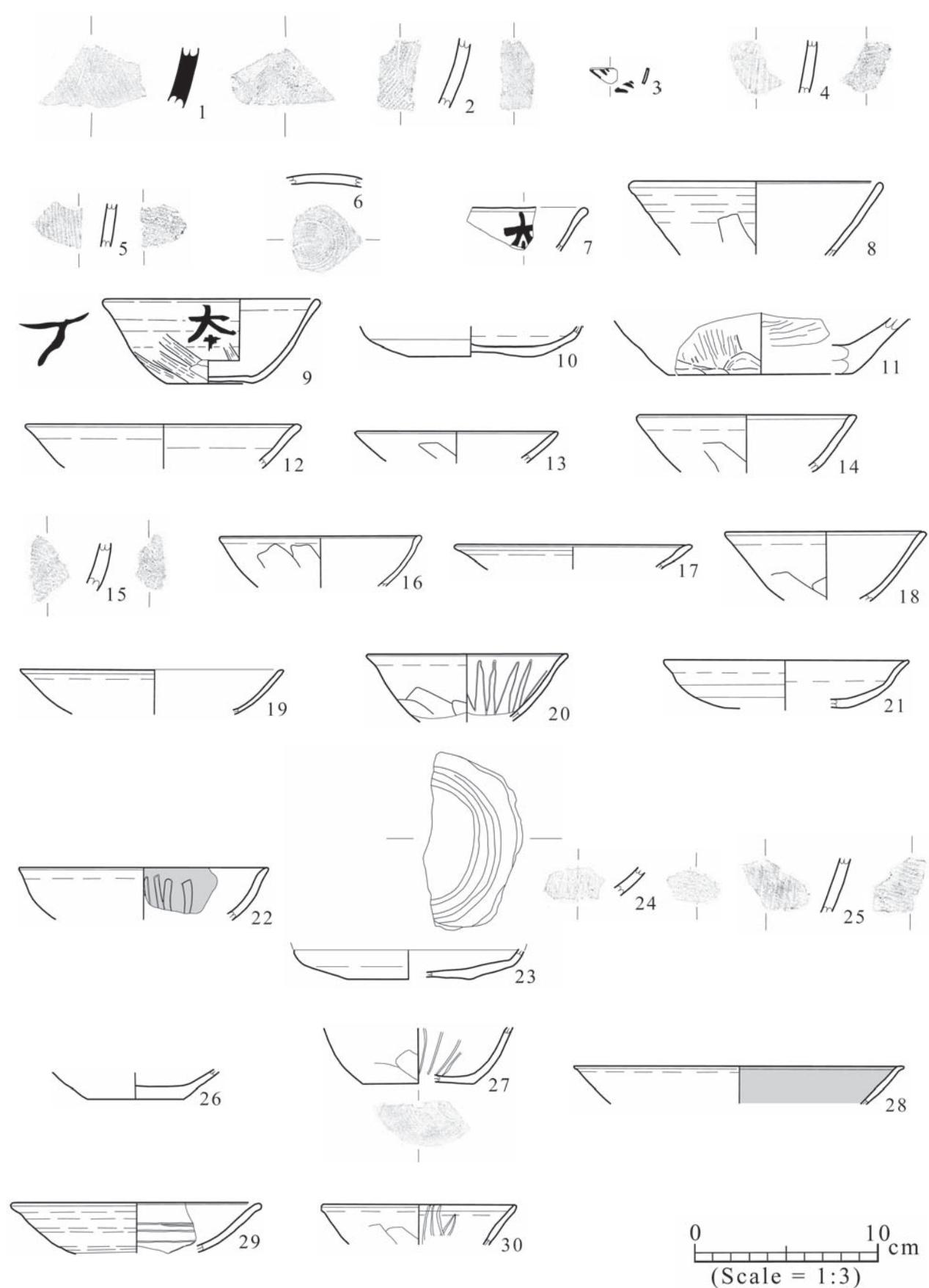
第19図 Ⅱ区 出土遺物分布図

にかけての破片で外面にヘラケズリがあり、口縁が丸形を呈さないことから9世紀後半の所産と推測される。19は甲斐型皿の口縁から体部の破片で9世紀後半のものと推定される。20は甲斐型壺の口縁から体部下部にかけての破片で、体部内面に花弁状の暗文が認められ、口縁の形態から9世紀前半のものと考えられる。21は甲斐型皿の口縁から底部にかけての破片で、体部外面の下部に回転ヘラケズリの痕跡が確認される。9世紀中頃の所産とみられる。22は甲斐型壺の口縁の破片で、内面が炭化物で黒色処理されており花弁状の暗文が認められ、口演の形狀から9世紀後半の所産と思われる。23は甲斐型皿の底部の破片で、外面に回転ヘラケズリの痕跡があり、見込み部に渦巻き状の暗文が施されていることから9世紀前半のものと捉えられる。24・25は古代の甲斐型甕の体部の細片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が認められる。26は甲斐型皿の底部の破片であるが、表面が摩耗しており、ケズリやミガキが鮮明に観察し得なかったが、9世紀のものと考えられる。27は甲斐型壺の底部及び体部下部の破片で外面にヘラケズリ、内面に放射状の暗文、底部に回転糸切痕が確認し得ることから9世紀前半以前のものと推定される。28は甲斐型壺の口縁の破片で、内面が黒色処理されたもので、10世紀の初頭に位置付けられる。29は甲斐型皿の破片で、見込み部に渦巻き状の暗文があり口縁が丸形を呈していることから9世紀後半のものと推測される。30は甲斐型壺の口縁から体部にかけての破片で内面に花弁状の暗文が確認できることから9世紀前半のものと考えられる。31は甲斐型皿の口縁の細片で、内面に横方向の暗文（渦巻き状の一部）が認められ、外面に墨書の記銘の一部がある。記銘はごく一部であり判読は不可能である。32は古代の甲斐型甕の体部の細片である。外面に縦方向、内面に横方向のハケ目が確認できる。33は甲斐型皿の口縁から底部にかけての破片で、体部の内面に横方向の暗文が認められ渦巻き状の暗文の一部と思われる。9世紀中ごろと位置付けられる。34は甲斐型壺の底部片で体部の内面に放射状の暗文があり、9世紀前半の所産と推測される。35、38～40は古代の甲斐型甕の体部の細片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が認められる。36・37は古墳時代の土師器の壺または甕の体部の破片である。41は甲斐型壺の破片で、内面に花弁状の暗文が認められることから9世紀前半に位置付けられる。42は古墳時代中期の甕の頸部の破片である。43～45は甲斐型壺の底部片でいずれも体部の内面に放射状の暗文がみられる。45の底部には回転糸切痕が確認できる。いずれも9世紀前半のものと考えられる。46は古墳時代前期の壺または甕の体部の破片で、粗い刷毛目が内外面に認められる。47は古墳時代前期末のS字口縁台付甕の口縁直下の破片で、口縁は剥離して失われている。46・47ともに伊勢湾系の系統に位置付けられる。48は9世紀の前半の甲斐型壺の口縁から体部の破片で、体部内面に放射状の暗文が認められる。体部外面には逆位で「奉」の字が記銘されている。49は甲斐型壺の底部の破片で、底部には回転糸切痕、体部の立ち上がり部には花弁状の暗文が認められ9世紀前半のものと考えられる。底部には「十」の字の墨書が記銘されている。50・52・53は古代の甲斐型甕の体部の細片で外面に縦、内面に横方向のハケ目が認められる。51・54～56は甲斐型壺の口縁から体部にかけての破片である。51を除くそれぞれの内面には花弁状の暗文が認められる。56の外面には墨書の記銘の一部がみられるが判読は不可能である。51が9世紀後半、54～56は9世紀の前半の時期に位置付けられる。57は古代の甲斐型甕の体部の細片で外面に縦、内面に横方向のハケ目が認められる。58は9世紀前半の甲斐型皿の破片で、体部内面に横方向の暗文があり渦巻き状の暗文の一部と推定される。59は甲斐型壺の底部の破片で9世紀のものと思われ、底部には回転糸切痕が明瞭に残っている。60は古墳時代前期の甕または壺の体部の破片で、外面はハケ状の工具で整形した痕跡が認められ、伊勢湾系の系統に属する者である。61は甲斐型壺の底部の破片で、底部には回転糸切痕がみられ、体部外面の立ち上がり部にはヘラケズリが施されている。62は古墳時代前期の甕または壺の体部の破片で、東海系に由来して在地化したものである。63は甲斐型壺の破片で9世紀後半の所産である。64は甲斐型甕の口縁の細片で、器厚が肥厚化す

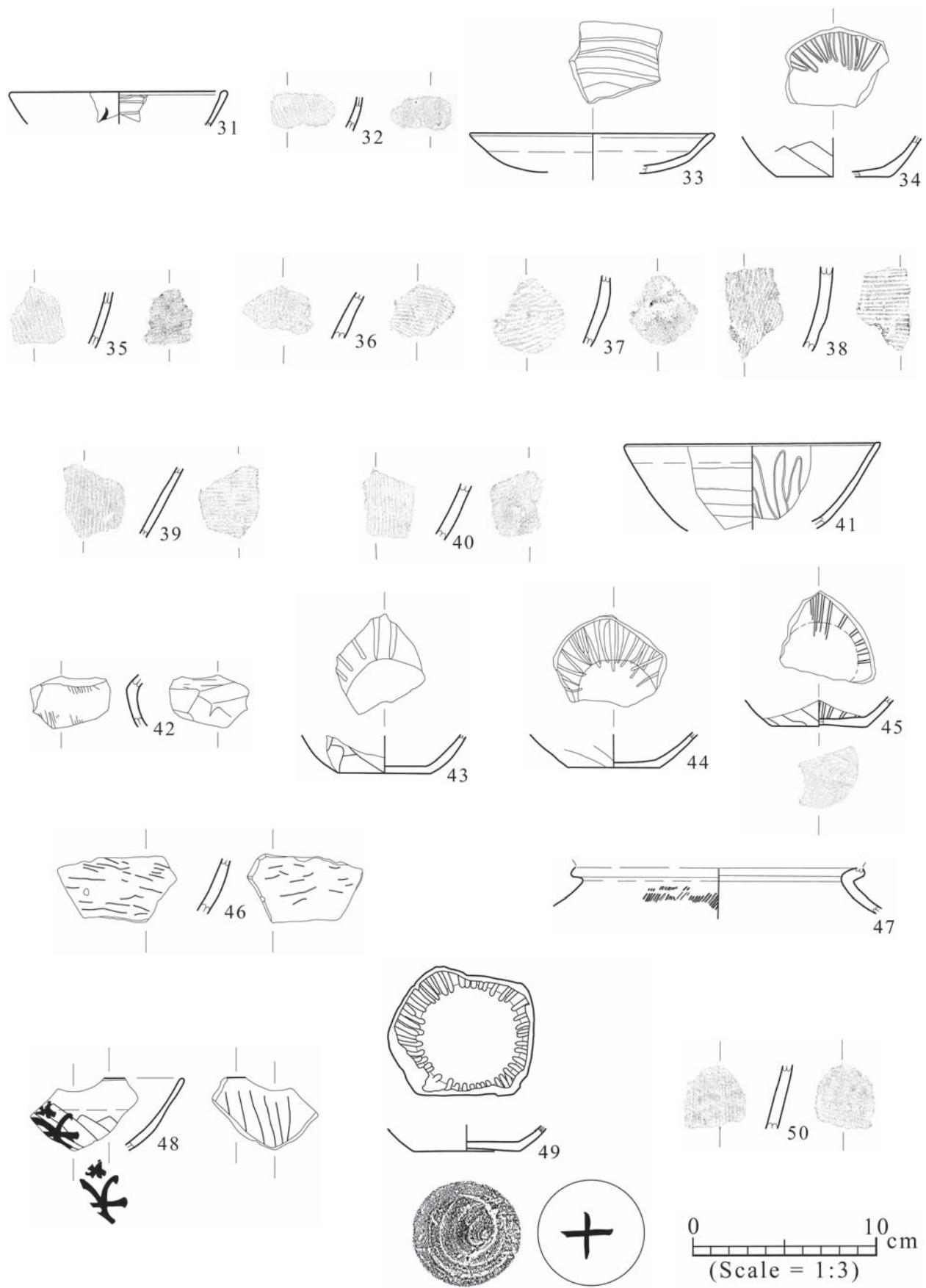
る前の段階の9世紀の所産と推定される。65は甲斐型壺の底部の破片で底部には静止糸切痕が認められる。内面は黒色処理され、横方向に細かな暗文が施されている。9世紀の後半から10世紀初頭のものと推測される。66は古墳時代の甕または壺の体部の細片である。67は古墳時代の甕または壺の体部の細片である。68は古墳時代中期の壺の口縁の破片で体部から口縁が大きく外反し、内外面の横方向に緻密な磨きが施されている。69は9世紀前半の甲斐型壺の底部の破片で、内面の体部の立ち上がり部に花弁状の暗文がみられる。70は甲斐型甕の口縁の細片で、9世紀の所産と推定される。71は甲斐型壺の体部の細片で、外面に墨書の記銘の一部があるが判読不能である。内面に暗文がみられることから9世紀前半のものと推測される。72・73は古代の甲斐型甕の細片で外面に縦、内面に横方向のハケ目が認められ、72が体部、73が底部である。74は古墳時代の甕または壺の体部の破片である。75・76は古代の甲斐型甕の破片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が認められる。75は底部片で底面に木葉痕が明瞭に残っている。76は体部の細片である。77は甲斐型皿（黒色土器）の口縁の破片で9世紀後半に位置付けられる。78は甲斐型皿の底部の破片で、回転ヘラケズリが施されている。9世紀前半の所産と考えられる。79・80は古墳時代の甕または壺の体部の細片である。81は9世紀初頭に位置付けられる須恵器の皿の底部片で今回の調査で須恵器の中で最も遺存状態のよい資料で、高台をもつ。82は土錐であるが、焼成が悪く脆弱な状態である。時期は不明であるが、他の遺物の年代観から古墳時代から古代にかけてのものと推測される。83は、9世紀前半の甲斐型壺の底部片で体部の内面に放射状の暗文がみられる。84は古代の甲斐型甕の体部の細片である。外面に縦、内面に横方向のハケ目が認められる。85は須恵器の壺の体部の破片で、古代における詳細な時期の位置付けは不明であるが助宗窯産のものである。86は甲斐型壺の口縁から体部にかけての破片で、体部外面にヘラケズリ、内面に放射状の暗文がみられる。9世紀前半の所産と考えられる。87は古墳時代の土師器の甕または壺の体部の細片である。88は9世紀前半の甲斐型壺の口縁から底部にかけての破片で、体部外面下部にヘラケズリ、体部内面に鋸歯状暗文が確認できる。89は甲斐型壺の口縁から体部上部にかけての破片で、内面に暗文が認められず口縁の形状から9世紀後半のものと考えられる。90は古代の甲斐型甕の体部の細片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が認められる。91は完形に近く復元し得た甲斐型壺である。ただし本資料は出土時に粉碎された破片の状態で出土しており、土石流の影響をうかがい知ることができる。内面に暗文が施されておらず、口縁が肥厚しないことから9世紀後半として捉えられる。92は9世紀前半の甲斐型壺の底部片で体部の内面に放射状の暗文がみられる。93は古代の甲斐型甕の口縁の細片である。断面形態が肥厚していないことから9世紀の前半から半ばのものと考えられる。94は古墳時代前期のS字口縁台付甕の体部の破片と思われる資料で、伊勢湾系の系統に位置付けられる。95は古墳時代の土師器の甕の体部の細片である。96は甲斐型皿の口唇部の破片で内面に渦巻き状の暗文の一部が確認し得る。9世紀前半に位置付けられよう。97は9世紀前半の甲斐型壺の底部片で体部の内面に放射状の暗文がみられ、一部が見込み部にはみ出している。98・99、101・102は古代の甲斐型甕の破片で、102が底部直上の立ち上がり部であり、他の3点は体部である。いずれも外面に縦、内面に横方向のハケ目が認められる。100、103・104は9世紀前半の甲斐型壺の口縁から体部にかけての破片である。いずれも内面に花弁状もしくは鋸歯状の暗文が認められる。104の体部外面には正位で「奉」の略字である「奉」の字の一部と思われる墨書が記銘されている。105は古墳時代前期の土師器甕または壺の破片で外面に条痕が認められ、東海系に由来し在地化した系統と推定される。106は9世紀前半の甲斐型高台壺の底部片で、わずかながら高台が付されている状況が認められる。体部の立ち上がり部に暗文の一部が確認できる。107は古代の甲斐型甕の体部の破片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目が認められる。108・109は9世紀前半の甲斐型壺の破片で108は口縁から底部にかけて、109は口縁から体部下部にかけての破片で、いずれも体部外面下

部にヘラケズリ、体部内面に鋸歯状暗文が確認できる。110は甲斐型の壺系の鉢に位置付けられるもので、口縁に段を有する。体部内面に花弁状の暗文が認められ、9世紀前半のものと考えられる。111は、古墳時代の土師器壺の体部の破片で内外面ともミガキが認められる。以上がII区第1号土石流路跡から出土し、出土地点を計測して取り上げた資料である。

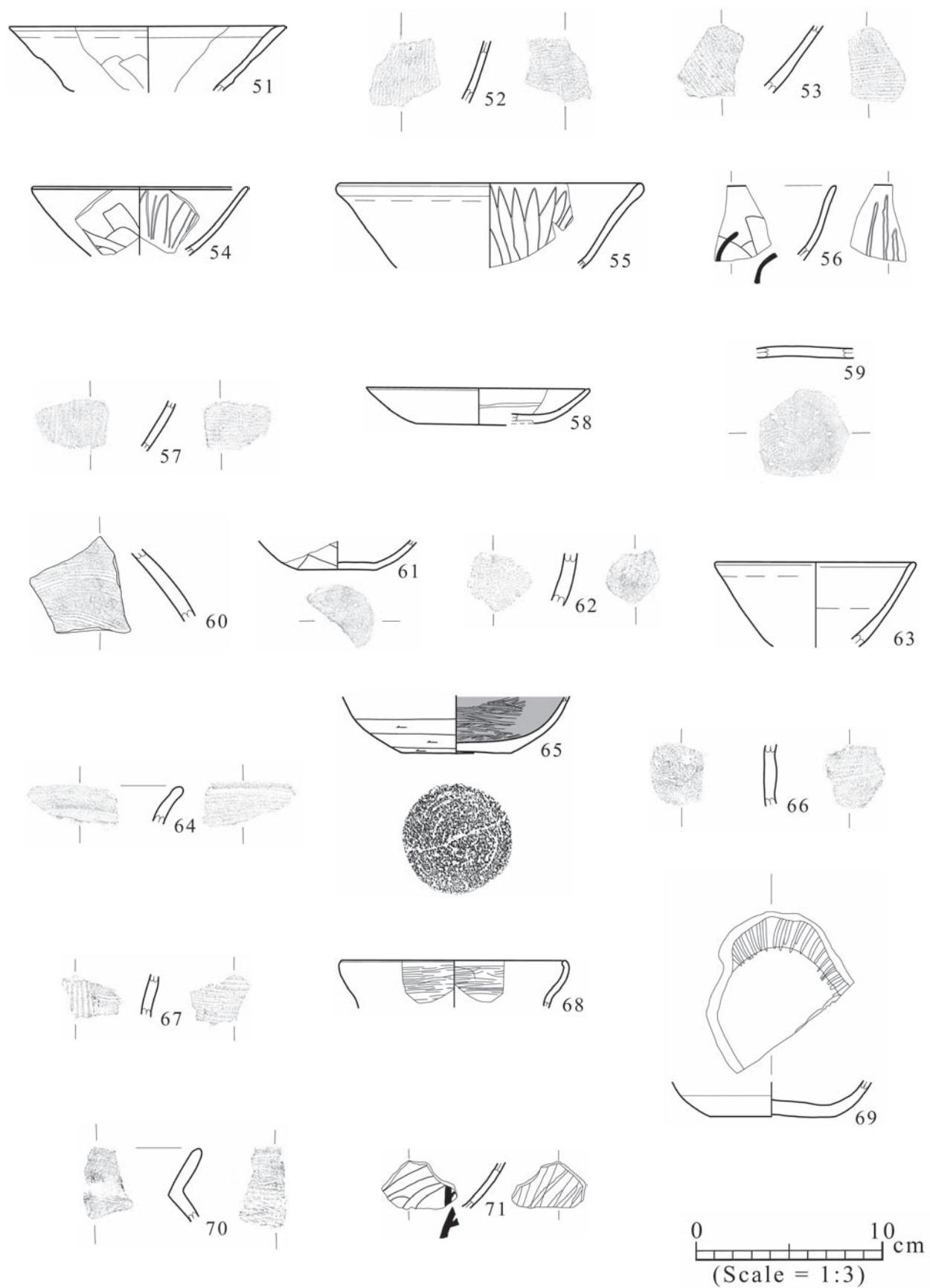
II区の一括として扱っている資料も第1号土石流・流路跡に伴う可能性が高いため併せて叙述する。第20図-6・1~19は第1号土石流・流路跡の調査における一括取り上げ、20~26は平成24年度の試掘確認調査における出土遺物、27~30は本調査の表土剥ぎ作業時に出土した遺物である。1は9世紀前半に位置付けられる甲斐型皿の口縁から底部にかけての破片である。内面の遺存状況は良好ではないが暗文が認められる。2は古代の甲斐型甕の口縁の立ち上がり部（頸部）の破片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目がみられる。3は10世紀前半の甲斐型壺の細片であるが、外面に墨書の記銘が認められる。記銘内容は不明である。4は9世紀後半の甲斐型皿の破片である。5は古代の土師器甕の口縁から体部上端にかけての破片である。通常の甲斐型甕にみられるハケ目は認められない。6は古代の黒色土器の壺の体部の破片で、外面に墨書の記銘があるが文字の一部のみである判読は不可能である。7は、土錘の破片で推定される全長のほぼ半分に折れ、さらに断面形態の半分が欠損している。その他の出土遺物の年代観から古墳時代から古代にかけての所産と考えられる。8・9は古代の甲斐型壺の体部の破片で外面に墨書の記銘の一部が確認される。部分的なものであり記銘内容は不明である。10は9世紀後半の甲斐型皿の口縁の細片で外面に墨書の記銘が認められる。文字ではなく、描画の可能性も考えられる。11は、甲斐型壺の体部の破片で、内面に縦方向の暗文が認められることから9世紀前半頃のものと推測される。外面には判読不明であるが墨書の記銘が残る。12は10世紀前半の甲斐型壺の口縁の細片で、外面に墨書の記銘の一部が認められる。文字の一部と思われるが判読は不可能である。13は甲斐型壺の体部の細片で、外面に文字の一部と思われる墨書の記銘がある。内面に暗文が認められることから9世紀代の所産と推定される。14は古代の甲斐型甕の口縁の立ち上がり部（頸部）の破片で、外面に縦、内面に横方向のハケ目がみられ、2の資料と比較すると口縁が肥厚していることから9世紀後半から10世紀初頭にかけての時期に位置付けられると思われる。15・16は9世紀後半の甲斐型壺の口縁の細片で、外面に墨書の記銘の一部が認められる。17・18は甲斐型壺の体部の細片で、17が9世紀前半、18が9世紀後半から10世紀初頭にかけての所産と推定され。17の外面には墨書の記銘、18の外面には刻書の記銘が認められる。ともに判読は不可能である。19は10世紀前半の甲斐型皿（黒色土器）で、内面に渦巻き状の暗文があり、外面には判読不明であるが、刻書の記銘が認められる。20は古墳時代前期のS字口縁台付甕の脚部の破片で甕の底部内面にあたる当該資料の上部には指先で整形した痕跡があり、脚部の内面はナデの痕跡がある。東海系を起源とし在地化した系統の土器と考えられる。21は9世紀前半の甲斐型壺の口縁から体部にかけての破片で、体部下部の外面にヘラケズリ、内面に鋸歯状暗文が認められる。22は9世紀前半の甲斐型甕の口縁から体部上半にかけての破片で、今回の調査で出土した甲斐型甕の中で最も大きな破片である。体部外面に縦、内面に横方向のハケ目が認められる。23は9世紀前半の甲斐型壺の底部の破片で、体部外面の立ち上がりにヘラケズリ、内面の体部の立ち上がりから放射状に暗文が認められる。24は甲斐型皿の底部の破片で、内面に渦巻き状暗文の一部と思われる弧状の暗文が確認できる。9世紀の前半から半ばにかけての所産と推測される。25は9世紀後半から10世紀初頭にかけての甲斐型壺の体部の破片で、外面に逆位で「本」の字が墨書で記銘されている。26は甲斐型壺の底部の破片で体部の立ち上がり部の外面にはヘラケズリ、内面には放射状の暗文、底部には回転糸切痕が明瞭に残る。9世紀前半の所産と推定される。27は甲斐型皿、28は甲斐型壺の口縁から体部にかけての破片で、いずれも9世紀後半から10世紀初頭の所産と考えられる。



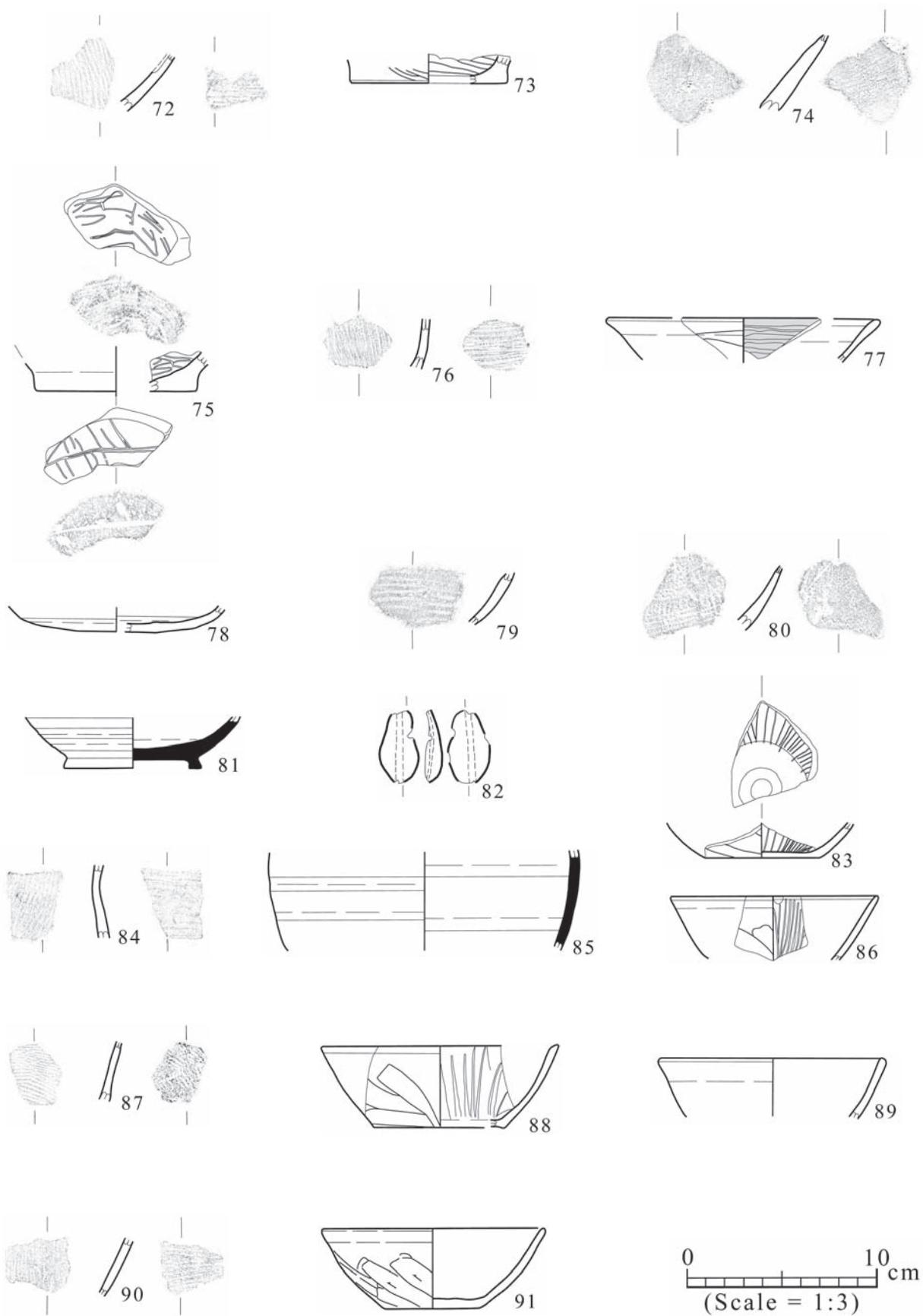
第20図-1 II区出土遺物(1)第1号土石流・流路跡 出土遺物



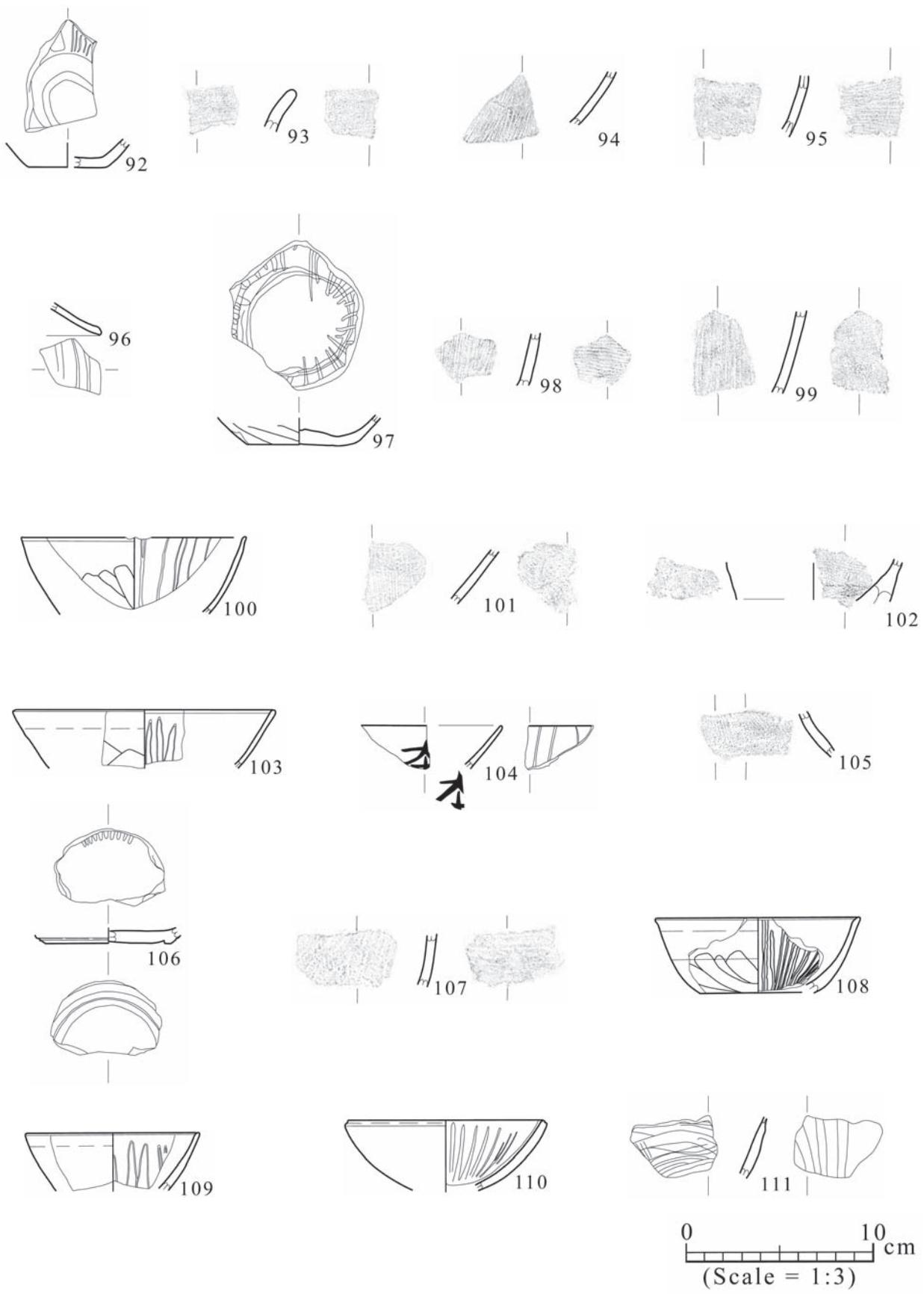
第20図-2 II区出土遺物(2)第1号土石流・流路跡 出土遺物



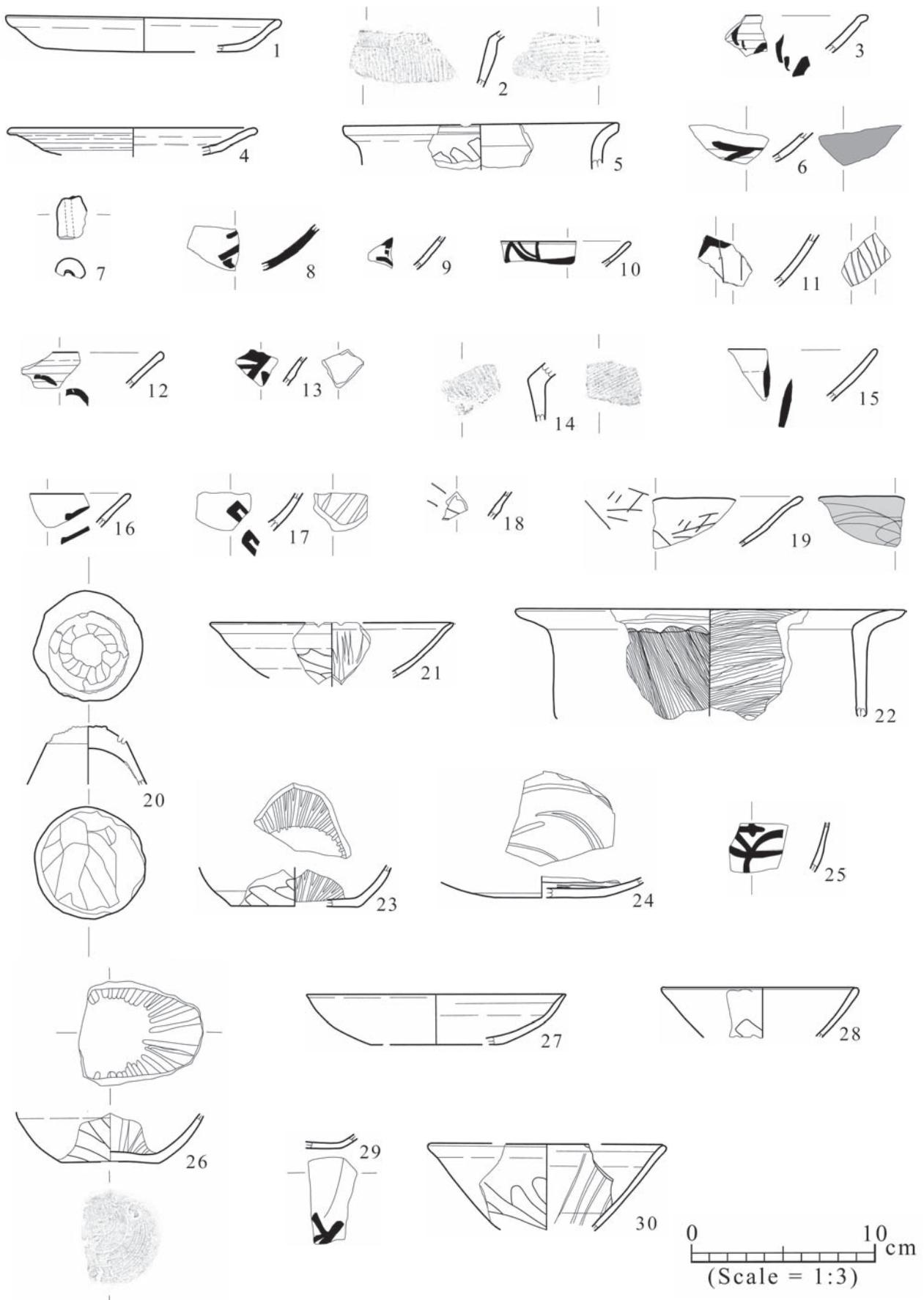
第20図-3 II区出土遺物(3)第1号土石流・流路跡 出土遺物



第20図-4 II区出土遺物(4)第1号土石流・流路跡 出土遺物



第20図-5 II区出土遺物(5)第1号土石流・流路跡 出土遺物



第20図-6 II区出土遺物(6) 一括資料(第1号土石流・流路跡 出土遺物)

29 は甲斐型皿の底部の破片で、外面の底部から体部にまたがって墨書の記銘の一部が認められる。9世紀後半から10世紀初頭の所産と思われる。30 は9世紀前半の甲斐型壺の口縁から体部下部にかけての破片で、外面の体部下部にはヘラケズリ、内面には放射状の暗文がみられる。

II区第1号土石流・流路跡の出土遺物は、大半が9世紀前半から10世紀初頭にかけての甲斐型土器が占め、古墳時代前期から中期にかけての遺物が若干混在する様相をみせる。古墳時代の遺物が破片の摩耗が激しく、平安時代の9世紀後半から10世紀初頭の遺物は破片の割れ口がきれいな状態のものが多く、接合し得る資料も認められる。土石流の発生時期が10世紀初頭頃と推定する判断材料となる遺物の状況であると言えよう。また、鯉ノ水遺跡の東方に所在する滝沢遺跡の出土遺物とも年代観が類似することから、滝沢遺跡周辺の集落遺跡を破壊して流下し、鯉ノ水遺跡I区の第1号道路遺構・東海道甲斐路跡を破壊し、II区にまで達した土石流の痕跡として捉えられる。

第2項 第2号土石流・流路跡（III区第1号土石流・流路跡に連続）

II区とIII区にまたがって検出された遺構であり、III区第1号土石流・流路跡と同一の遺構である。II区ではP - 10・11、Q - 10・11、R - 11 グリッドに属する。第1号土石流・流路跡の場合、検出された流路の痕跡の表面から多量の遺物が確認されてが、当該遺構の場合は全く認められなかった。Q - 11・R - 11 グリッドにかかる調査区の壁面にサブトレーナーを設定して掘削したところ、古墳時代の所産と思われる甕または壺の体部の破片が1点のみ出土したが細片のため図示し得えなかった。I区及びII区の第1号土石流・流路跡とは状況が異なることから、別の土石流の痕跡と推定される。調査期間の制約もあり、本遺構の覆土の砂礫は掘削せずに範囲確認に留めた。

第5節 III区の遺構と遺物

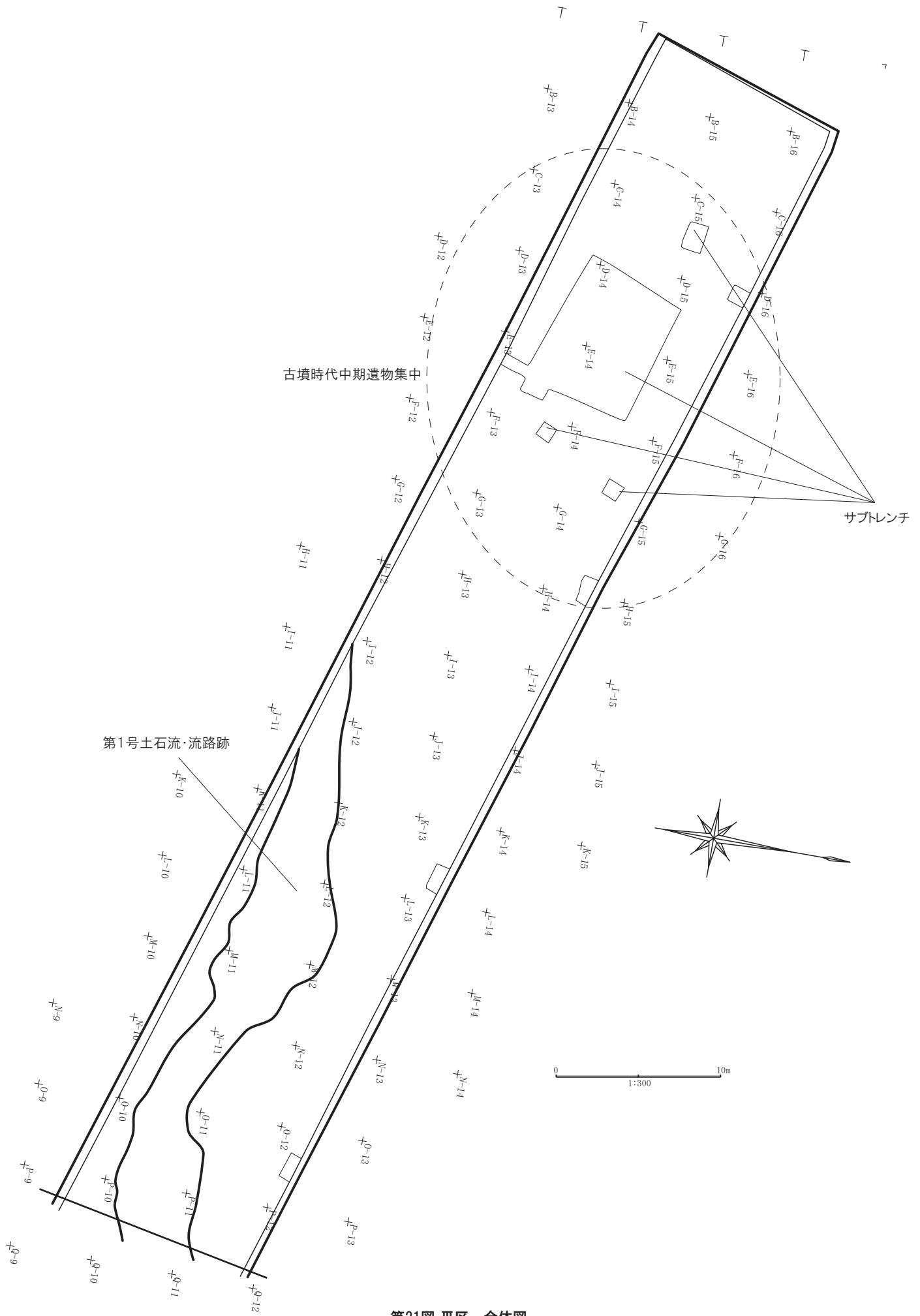
第1項 第1号土石流・流路跡（II区第2号土石流・流路跡から連続）（第22図）

第4節で触れたとおり、II区とIII区にまたがって検出された遺構で、II区第2号土石流・流路跡と同一の遺構である。III区ではI - 11、J - 11、K - 11・12、L - 11・12、M - 10~12、N - 10・11、O - 10・11 グリッドに属する。III区の範囲では平面的な形状確認に留めており、出土遺物はなかった。本遺構から西の範囲には土石流の痕跡が確認されていない。本遺構は鯉ノ水遺跡で土石流の影響を受け、流路の痕跡が遺構として確認できる西端として捉えられる。

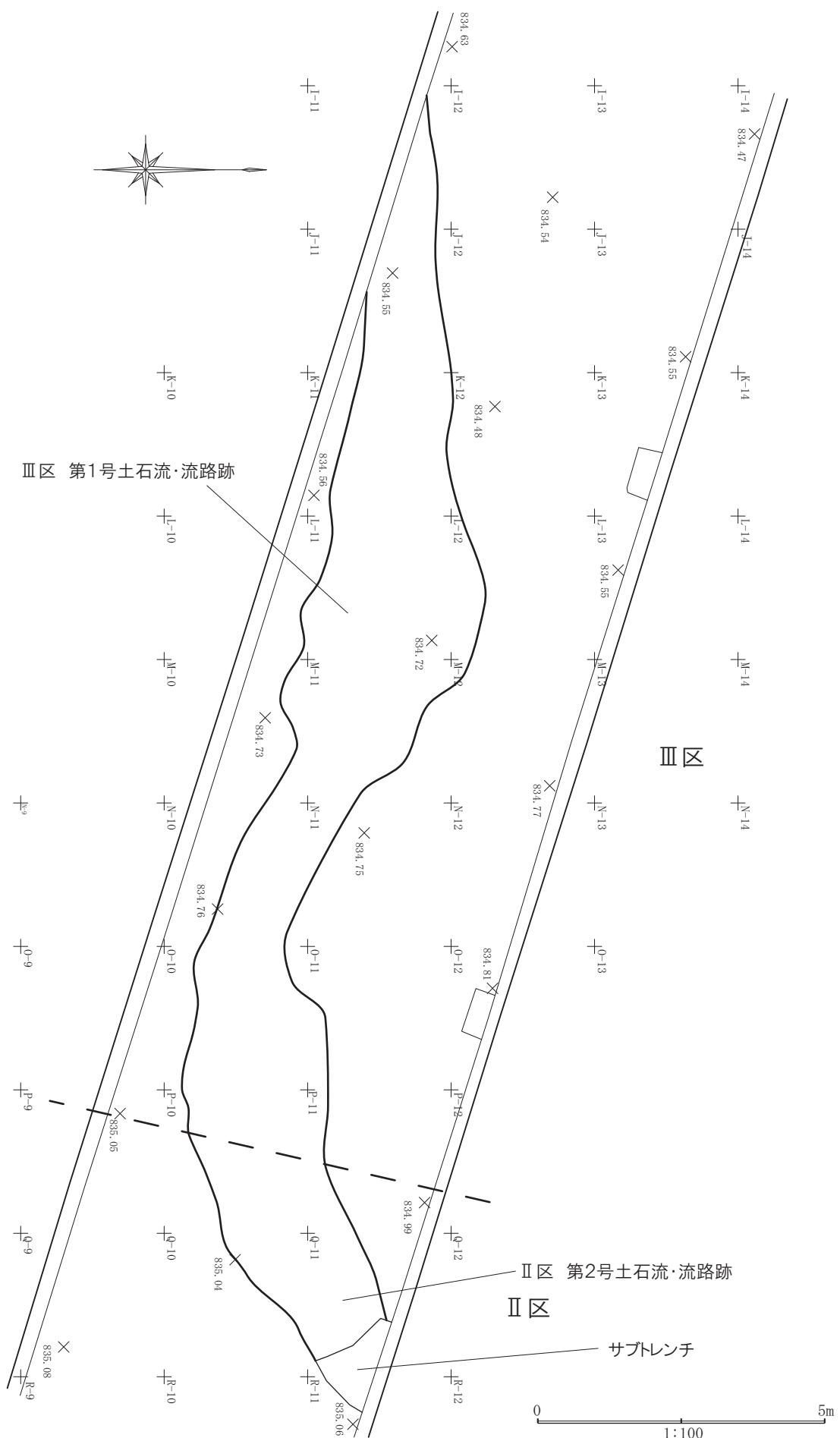
第2項 古墳時代の遺物包含層

平成24年度の試掘確認調査によって古墳時代中期の壺及び甕の破片が出土したことにより存在が明らかになったもので、本調査において当該期の遺構の存在の有無を確認すること課題として進めた。結果として、遺構は検出されず、古墳時代中期の遺物がまとまって出土し、完形に近い状態に復元し得る資料が多く得られた。いずれも砂礫層の直上の粘土質の覆土から検出されており、歴史のなかで河口湖の水位が増減を繰り返し、減水した時期に持ち込まれた土器である可能性が示唆される。遺構に伴わないことから、湖畔における水辺の祭祀の際に土器が用いられたとも推測し得る。

図示し、資料化し得た遺物は26点あり、このうち23点が出土位置を記録して取り上げた資料（第24図1～2）である。第24図1～3は古墳時代中期の土師器壺の破片である。1は底部、2・3は口縁から体部にかけての破片で、いずれも内外面に丹念なミガキが施されている。4・6は古墳時代中期の甕または壺の体部



第21図 III区 全体図

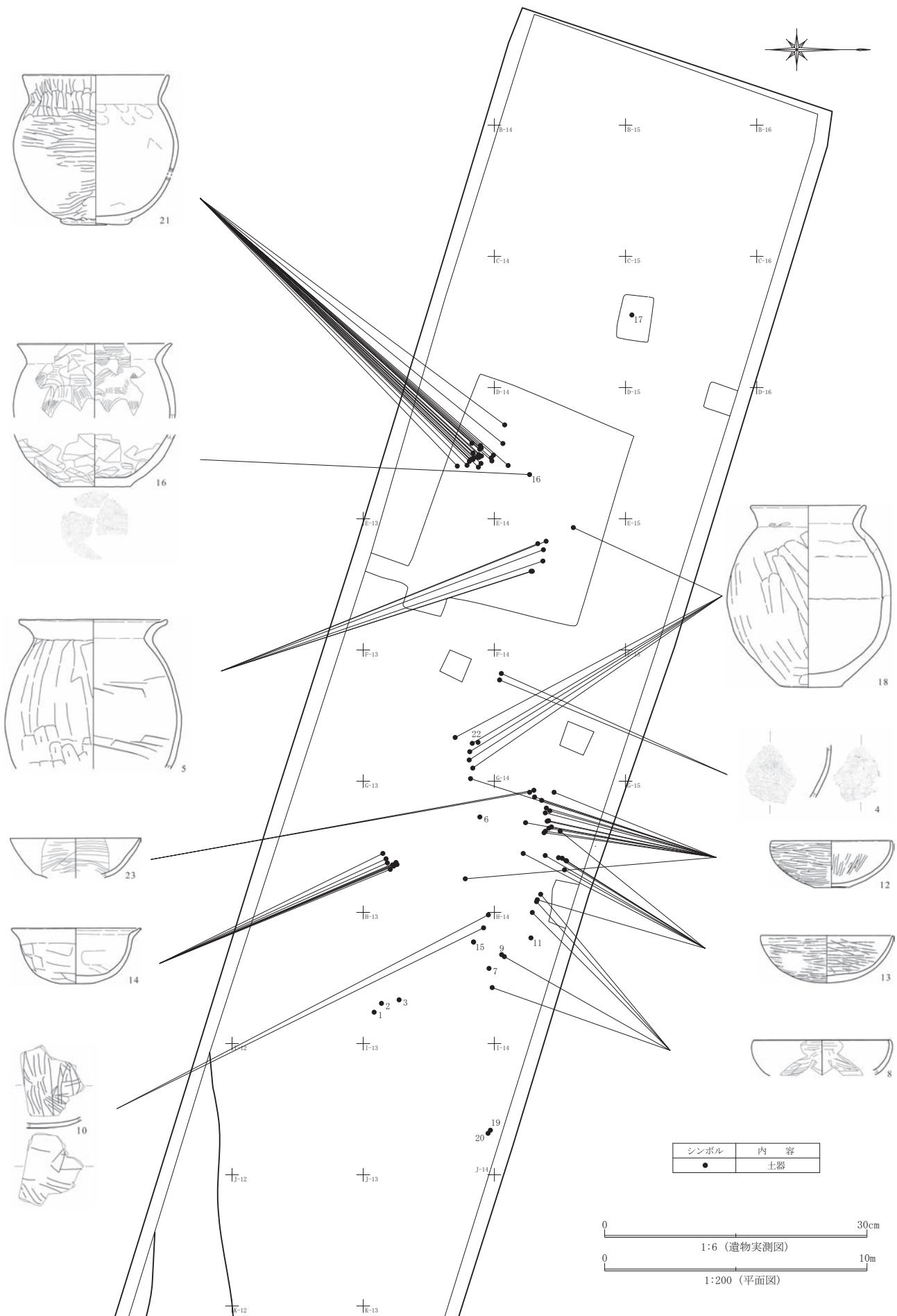


第22図 III区 第1号土石流・流路跡

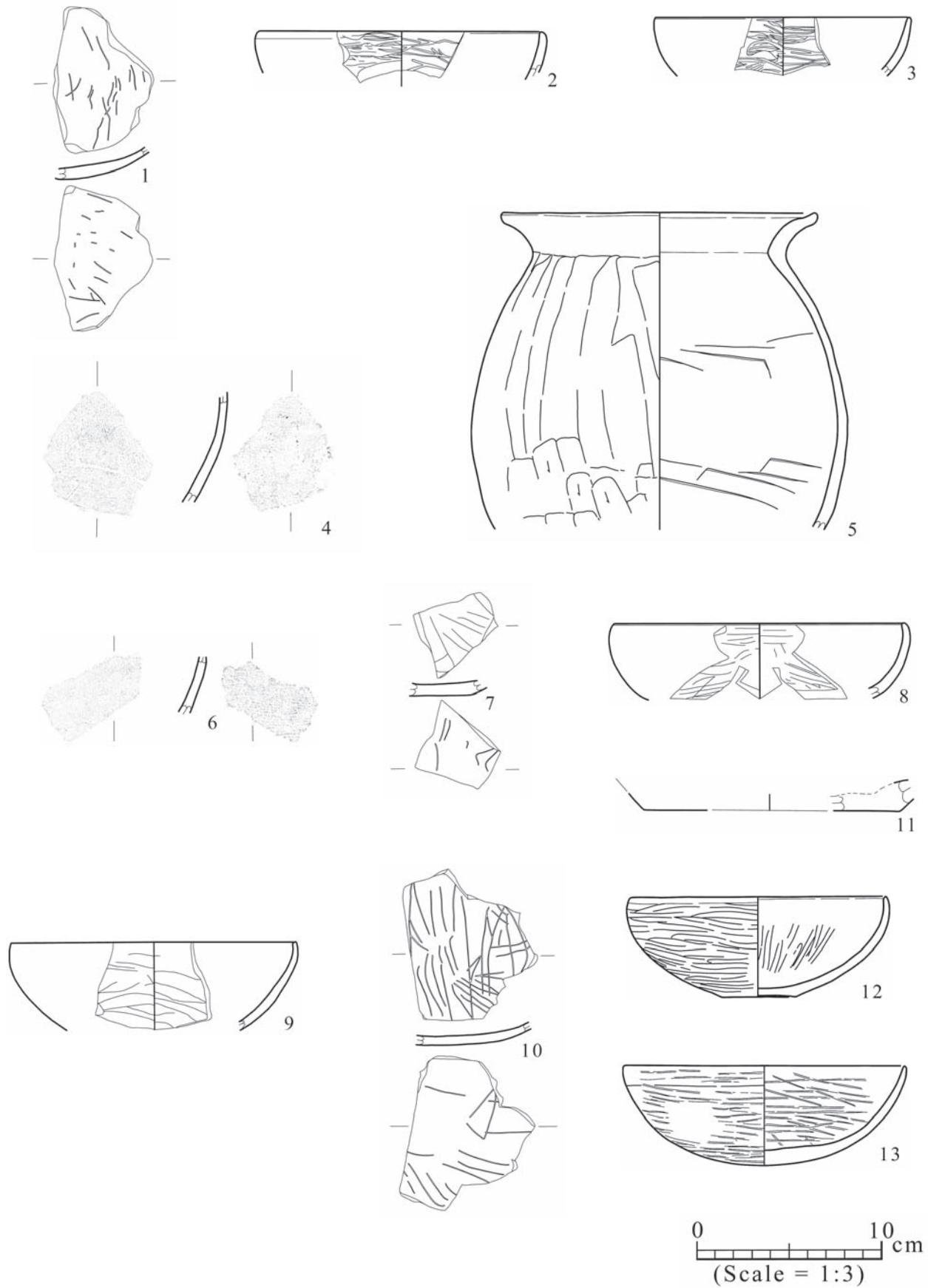
の破片で、外面には縦方向、内面には横方向に纖細なハケ目が認められる。5は底部を除き完形の姿を想定し得る甕で、胴部が丸く張り出す形状で、口縁は緩やかに外反し、わずかな段を有する。外面は縦方向、内面は横方向にナデの整形が認められ、全体的に黒色に近い色調をもつが胎土は赤褐色である。7は古墳時代中期の土師器の高坏の破片である。坏体部の底面の一部で内外面ともにミガキが認められる。8～15は古墳時代中期の土師器坏である。8・9・15は口縁から体部にかけて、10・11は底部の破片で、12・13・14はほぼ完形の状態に復することできた資料である。内面が剥離している11を除く坏の資料はいずれも内外面にミガキが認められる。12は胎土に砂や長石を多く含み、他の資料とは質感が異なることから山梨県の在地の所産ではなく、駿東地域などの他地域で生産されたものが搬入された可能性が示唆される。その他の坏の資料は、概ね古代以降の甲斐型土器の胎土に類似しており、在地のものと推定される。口縁の形状が確認できる8・9・12・13・14・15の資料のうち、14のみが外反して緩い段を有するタイプであり、その他はすべてやや内湾する形状を呈する。16は古墳時代中期の甕で、細片を丹念に接合して復元した資料である。赤褐色の胎土をもち、内外面ともに不鮮明であるがハケ目が認められる。17は古墳時代中期の坏で大半が平成24年度の試掘確認調査で出土した破片から復元され、本調査で出土した破片は一部にとどまる。内外面ともに精細なミガキが認められ、8～15の坏と共に共通する特徴をもつ。18は古墳時代中期の土師器甕である。口縁から底部かけて破片が連続して出土した数少ない個体である。口縁の残存部分はごくわずかであるが、外反の少ない小ぶりの形状である。器高は19.5cm、底径は7.0cmを測り、胎土は暗赤褐色の色調をもつ。輪積み痕を明瞭に観察し得た。19はⅢ区で出土した遺物の中で唯一縄文時代のものである。縄文時代中期後葉の曾利IV～V式頃の所産の深鉢の胴部の破片と考えられる。20は古墳時代中期の土師器坏の底部片で、内外面ともにミガキがみられる。21は古墳時代中期の土師器甕で、胎土が12の坏と類似しており、12と同様に駿東地域等で生産されたものが搬入されてきた可能性が示唆される。胴体部の一部に欠損する箇所があり、形状から完形の状態を想定して復元した資料であるが、器高17.0cmと推定される。外面には細かいミガキが認められる。22は古墳時代中期の土師器甕の頸部の破片で内外面ともにミガキが確認される。23は古墳時代中期の土師器の高坏の坏体部の破片で、脚部は失われている。内外面ともに丹念にミガキが施されている。

Ⅲ区の出土遺物のうち、一括扱いで取り上げた遺物、平成24年度の試掘確認調査で出土した遺物は全部で3点ある（第24図-3）。1は本調査における一括取り上げ、2・3は平成24年度の試掘確認調査の際に出土した遺物である。1は古墳時代中期の土師器坏の口縁から体部にかけての破片である。内外面ともに丁寧なミガキがみられる。2・3は同時期の土師器甕で、2は底部の破片、3は完形に復元し得た資料である。2は内外面ともに縦方向に纖細な条痕が付けられている。底面は木葉痕ではないが器を制作する際に台として使用した敷物の痕跡と思われる模様が認められる。3は口縁の深さが大きく、胴が丸く張り出した甕で、内外面ともにナデにより丹精な仕上げであることが観察により確かめられる。ほぼ完形に復元し得た甕の資料4点のうち、当該資料のみが5世紀半ばに位置付けられ、その他の3点は5世紀後半の所産と考えられる。

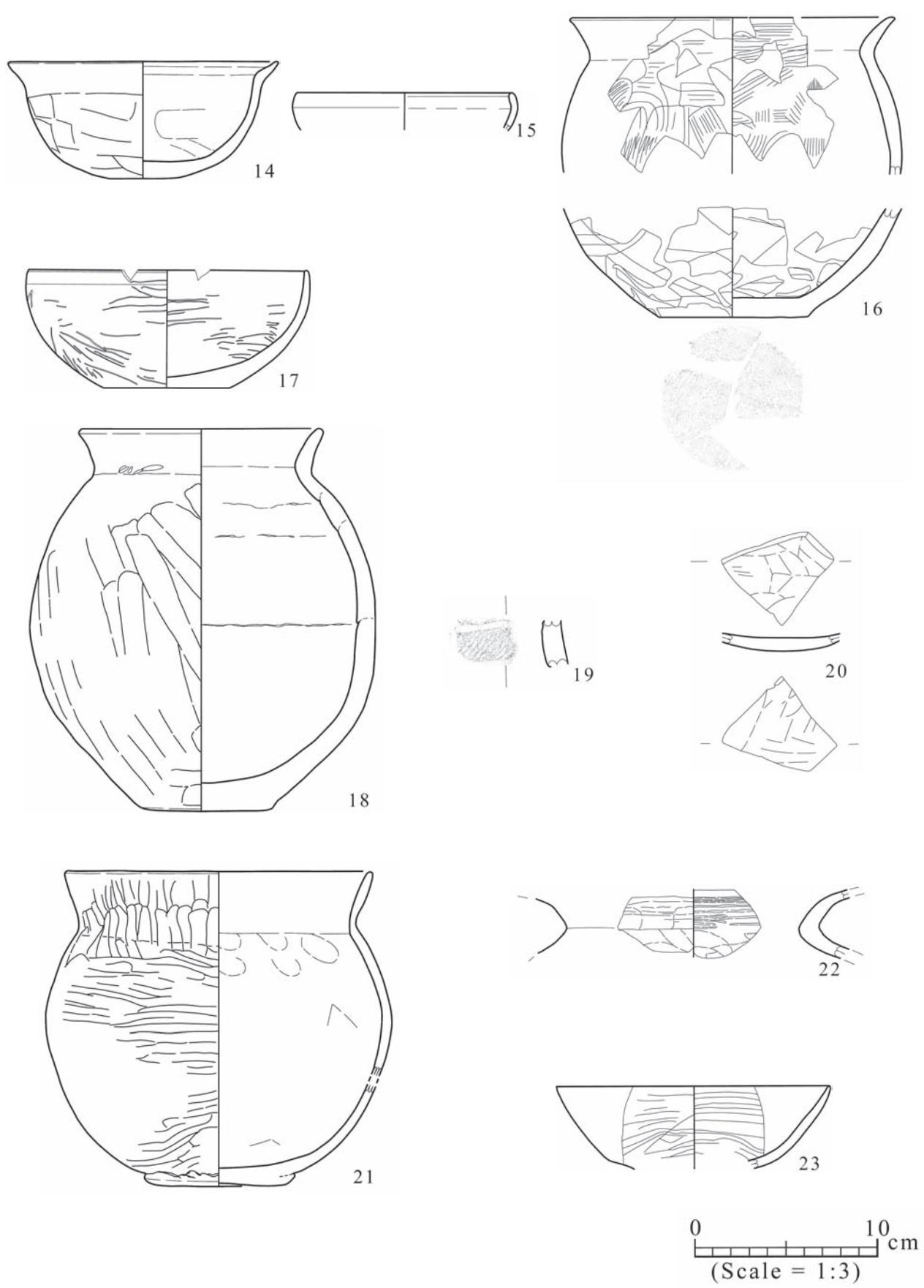
Ⅲ区の古墳時代包含層の出土遺物は、5世紀半ばから後半にかけての古墳時代中期の土師器坏、高坏、甕が主体であり、須恵器を伴わないのが特徴である。山梨県内では当該期の資料は事例が少なく、また良好な状態で出土した資料が多いことから、今後当該期の土器様相を研究するうえで重要な役割を果たすものと考えられる。当該期の山梨県内の土器と静岡県周辺の土器を比較した場合、鯉ノ水遺跡の土器は静岡県周辺の土器と形状等の類似性が強いことから、これまで未解明であった甲府盆地と太平洋岸に挟まれた富士山麓地域の古墳時代中期の土器様相を知る手がかりとなる一連の資料と言えよう。



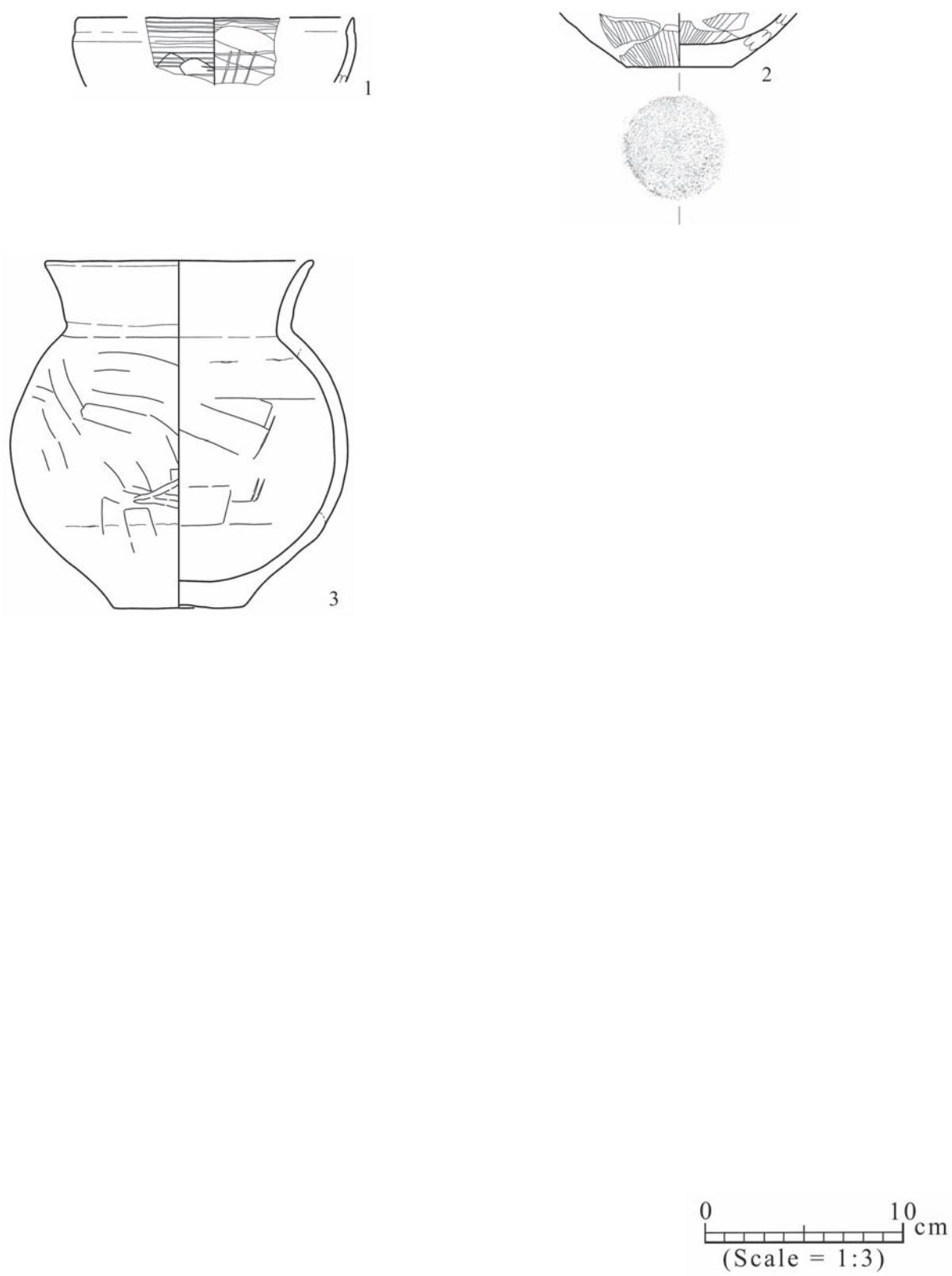
第23図 Ⅲ区 出土遺物分布図



第24図-1 III区出土遺物(1) 古墳時代遺物包含層



第24図-2 III区出土遺物(2) 古墳時代遺物包含層



第24図-3 III区出土遺物(3) 一括資料 (古墳時代遺物包含層)

第4章 自然科学分析

第1節 鯉ノ水遺跡出土の動物遺体

山梨県立博物館 植月 学

本稿では鯉ノ水遺跡の流路から出土した動物遺体（ウマ、ニホンジカ）について報告する。いずれも9世紀前半～10世紀初頭の土器を主体的に含む流路から出土している。

1. 資料と方法

出土遺体は歯を中心とする。歯のエナメル質は比較的保存良好だが、象牙質は劣化が進む。骨は破片が少量出土したのみで、有機物の保存には不適な堆積環境であったと考えられる。歯は破片になっていた資料も多かったが、接合することで同定可能な程度に復元することができた。

同定 現生標本との比較によりおこなった。馬歯のP3とP4、M1とM2は同一個体でない限り区別は困難で、残存状況によっては両者の区別も難しかった。

計測 ウマ臼歯のエナメル質の長さと高さを計測した。破損のために中心高が計測可能な標本はなかったため、上顎では頬側、下顎では頬側と舌側の高さを計測した。歯冠高をもとに西中川・松元（1991）の推定式を用いて年齢推定をおこなった。本来用いるべき中心高ではないので、計測点の違いにより多少の誤差が生じている可能性はある。

2. 結果

ウマとニホンジカが同定された。いずれも歯である。馬歯は21点、シカ臼歯は2点であった。他に哺乳類の歯／骨の小片が3点出土した。

ウマは推定年齢により最小個体数の検討をおこなった。年齢推定の誤差も考慮し、ある程度の幅をみたが、少なくとも以下の異なる年齢グループが確認できた（記号は年齢群を示し、同一個体を意味しない）。最小でも4個体分の歯が含まれていたことになる。

A：15歳以上、B：13歳前後、C：7歳前後、D：4歳前後

次に馬歯の大きさについて検討する。馬歯は加齢とともに大きさを減じる（植月2011）。ここでは加齢の影響も考慮し、歯冠長と歯冠高のグラフにプロットした。計測できたのは上顎のCとD、下顎のA'である。CはM1もしくはM2のため、両方のグラフにプロットした。筆者が計測した中ではもっとも大形の部類に属する山梨市三ヶ所遺跡（中世）と比較すると、上顎のCとDは同等かやや小、下顎のA'はP3とP4が同等でM1とM2がやや小さい。同一個体でも歯種によって大きさが異なるため判断が難しいが、3個体は少なくともこれら東日本の古墳時代～中世馬の平均以上の大きさの歯を持っていたとみなすことができる。

3. 考察

まず最低4個体分が出土した馬歯がこの地点に埋没した経過を検討する。流れの激しい土石流状堆積物という調査者の所見に従えば、馬歯はこの地点で廃棄（あるいは埋納）された現地性堆積物ではなく、他所から流れてきた二次堆積物である可能性が高い。

第1表 出土動物遺体一覧

種	上下	左右	個体分類	推定年齢	歯種	残存状況	歯冠長	歯冠高			備考	区	No.	枝番	日付	整理番号	出土位置			
								頬側	中心	舌側							ページ	図	No.	
ウマ	上	右	A	15.6~18.5	P3~M2のいすれか		x	19	x	-	老	II	1015	-	8月26日	01	40	19	123	
			B?	11.5~12.3?	P3/4?	破片	x	33	±	x		II	982	1	8月23日	02	40	19	120	
			C	6.8~7.5	M1/2		25.3	52	x	-		II	1011	-	8月26日	03	40	19	121	
		右	D?	5	M3		x	65	x	-	M3右(D)類似	I	857	-	8月19日	04	30	15	109	
			D?	3.4~4.0	P3/4?		x	72	x	-		II	723	-	8月9日	05	40	19	112	
			D?	3.3~4.3	P3/4?		x	72	x	-		II	726	-	8月9日	06	40	19	114	
	下	左	4	M1			25	67	x	-		II	775-2	-	8月12日	07	40	19	115	
			3.7	M2			26.2	75	x	-		II	775	1	8月13日	08	40	19	115	
			4.8	M3			x	66	x	-		II	775	2	8月13日	09	40	19	115	
		B'	?	P2	破片	x	x	x	x	x		II	790	1	8月14日	10	40	19	116	
			17.4	P3	頬側、舌側分離	26.9	±	15	x	14		II	790	2	8月14日	11	40	19	116	
			14.6	P4	頬側後葉欠け	26.7	±	25	x	23		II	790	3	8月14日	12	40	19	116	
	右	A'	18.7	M1	頬側前葉欠け	22.1	±	16	x	18		II	790	4	8月14日	13	40	19	116	
			16	M2			24	25	x	25		II	790	5	8月14日	14	40	19	116	
		C'	13.1	M3			x	25	x	25		II	790	6	8月14日	15	40	19	116	
			13.6	P2	頬側、舌側分離	x	21	x	17	±	Aと別個体	II	952	-	8月23日	16	40	19	119	
ウマ?	?	?	7.0~8.3	P3~M2のいすれか	頬側、舌側分離	x	45	±	x	47	±	Aと別個体	II	844	-	8月15日	17	40	19	117
シカ	上?	?	8.8	M3	頬側、舌側分離	x	42	x	x			II	724	-	8月9日	18	40	19	113	
哺乳類	?	?	8.3~13.1	P/M			33					II	982	2	8月23日	19	40	19	120	
	?	?	P/M	舌側破片	x	x	x	x	x			I	307	-	7月30日	20	30	15	106	
?	?			切歯	完存							I	一括	-	7月31日	21	-	-	-	
?	?			切歯?	破片							II	932	-	8月21日	22	40	19	118	
?	?			M	破片							II	1012	-	8月26日	23	40	19	122	
?	?			M	破片							I	800	-	8月14日	24	30	15	108	
?	?			歯/骨	破片							I	548	-	8月6日	25	30	15	107	
?	?			骨	破片							II	1088	-	8月28日	26	40	19	124	
?	?			骨	破片							II	1108	-	8月29日	27	40	19	125	

P:前臼歯 M:後臼歯

推定年齢は頬側、舌側高の平均による。歯種が特定できない場合は各歯種による推定値の最大幅を示す。

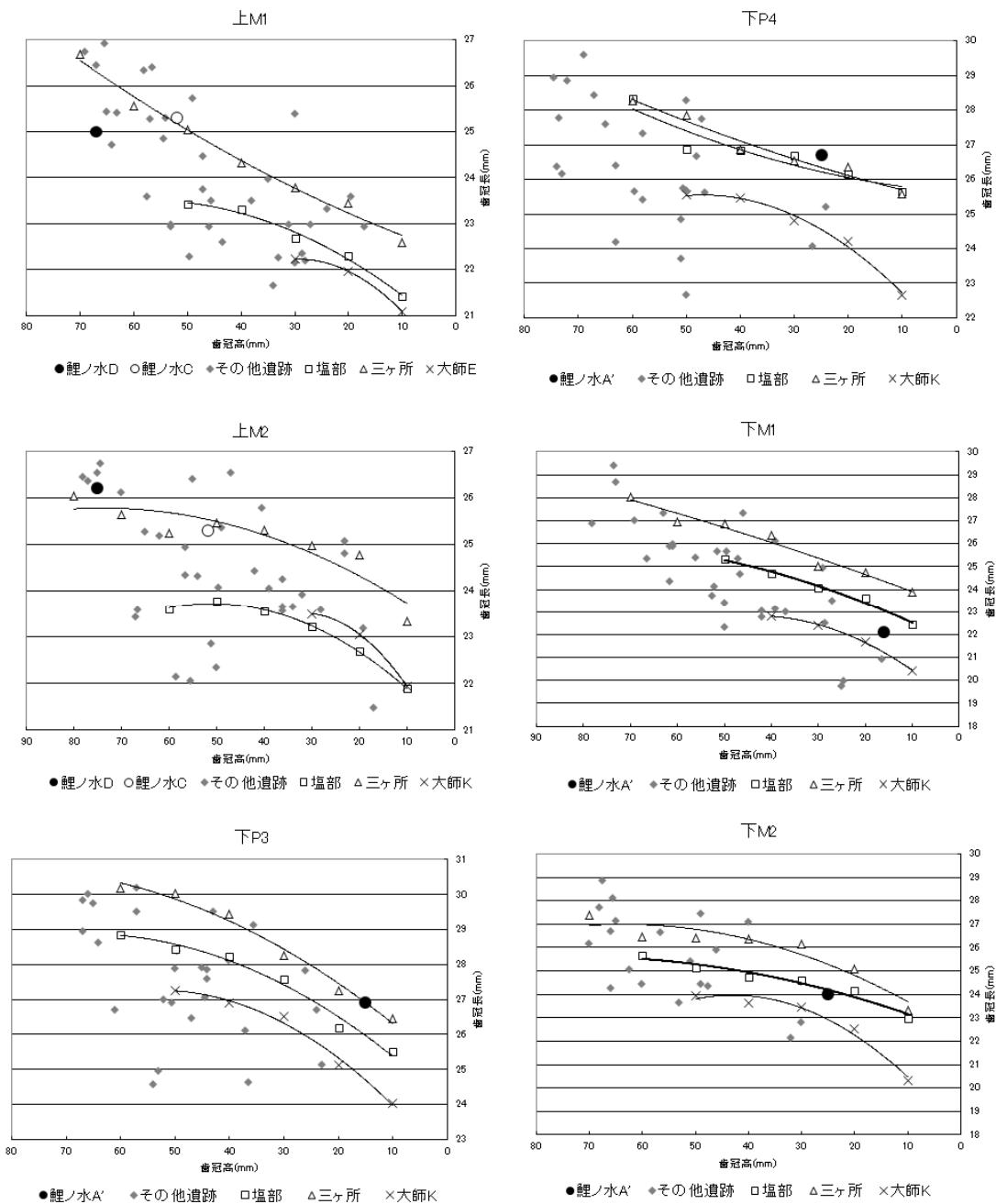
標本は骨がほとんど遺存せず、保存環境不良と推測された。それでも、No.790の下顎の左臼歯列や、No.775の上顎右後臼歯列のようにまとまって出土した例があった。埋没時点では顎骨に植立しており、その後土中で骨質部のみが腐食し失われたと推測される。先述の堆積状況からは埋没後さほど時間を経ずして、顎骨植立状態のまま流下してきたと判断できる。骨の分解に至らない時間幅を具体的に論じることは難しいが、古代の時間幅には収まると考えて差支えないだろう。堆積物中の土器は古代の9世紀前半～10世紀初頭にかけてのものが主体とのことであり、馬歯の年代も近い時期とみなすことができる。

土石流の堆積物は上流の滝沢遺跡の一部を巻き込んで流下したと推測されている。滝沢遺跡からも本遺跡に近い10世紀後半のウマが出土している。住居跡内床面から頭蓋骨のみが出土しており、推定14～15歳の個体である（パリノ・サーヴェイ2007）。今回の例でも4個体中2個体は約13歳と15歳以上の比較的高齢の個体であった。年齢構成を論じるには時期尚早だが、平安時代の生産地に近い処理・加工場と推定される南アルプス市百々遺跡の若獣主体の構成（植月2013）と比較すると高齢が多く、生産地というより使役主体の場の年齢構成を示している可能性がある。馬歯が比較的大形の個体のものであったことは、その用途を考える上で示唆的である。なお、シカの歯も同様に古代集落の食料残滓の一部が流下してきたと推測される。

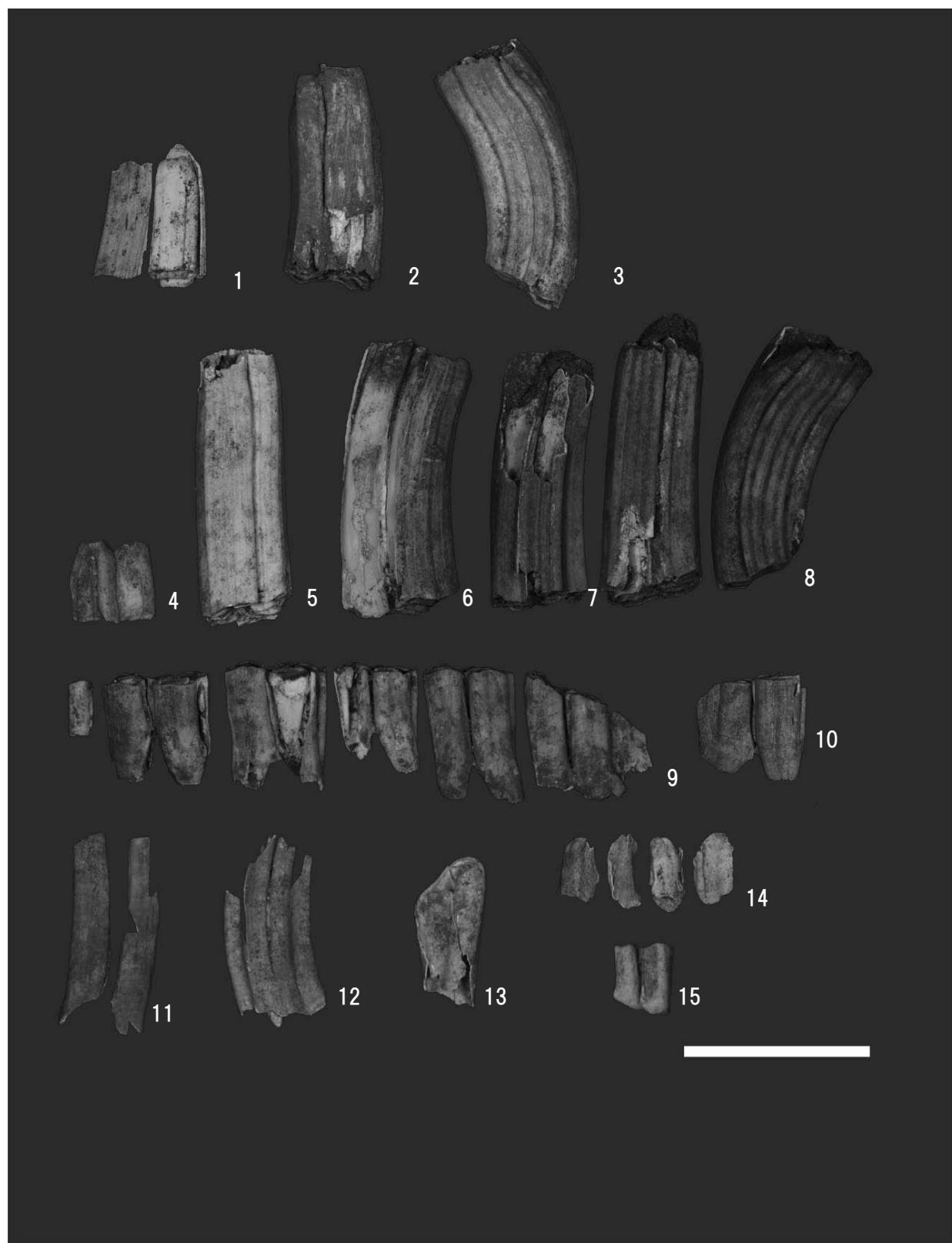
出土した馬歯は郡内地域では数少ない古代の事例である。調査では古代の官道跡も検出されている。馬は滝沢遺跡のような官道沿いの集落で飼育されていた可能性が高く、古代の官道における馬の利用を窺わせる事例として貴重である。今後出土事例が蓄積されていけば、年齢構成や大きさなどの解明が進み、官道において駅馬として利用された馬の実態がより具体的に明らかになることが期待される。

引用文献

- 植月 学 2011 「出土馬歯計測値の比較のための基礎的研究」『動物考古学』28:1-22
- 植月 学 2013 「甲斐周辺における馬埋葬と頭骨埋納」『山梨県考古学協会誌』22:170-182
- 西中川 駿・松元光春 1991 「遺跡出土骨同定のための基礎的研究ーとくに在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』科学技術費成果報告書 pp.164-188
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2007 「滝沢遺跡の自然科学分析」『滝沢遺跡・疱橋遺跡・谷抜遺跡』山梨県埋蔵文化財センター pp.167-170



第25図 ウマの歯冠長・歯冠高の比較



ウマ[1. $P^{3/4}$?左・頬(02) 2. $M^{1/2}$ 左・舌(03) 3. M^3 左・舌(04) 4. 上顎 P/M 右・頬(01) 5. $P^{3/4}$?右・舌(05) 6. $P^{3/4}$?右・舌(06) 7. M^1 右・舌(07) 8. M^2 、 M^3 右・舌(08) 9. $P_{234}M_{123}$ 左・頬(10~15) 10. P_2 左・頬(16) 11. 下顎 P/M 右・頬(17) 12. M_3 右・舌(18) 13. 切歯(21)] ニホンジカ[14. 上顎 M (23) 15. 下顎 M ?左?(24)] P=前臼歯、M=後臼歯、頬=頬側、舌=舌側 スケールは5cm ()内は整理番号

第5章 総括

第1節 奈良・平安時代の遺構・遺物について

第1項 東海道甲斐路の道路遺構

鯉ノ水遺跡の発掘調査による最大の成果は、これまで山梨県内で未発見であった古代東海道甲斐路の道路遺構の検出である。版築工法により強固に構築された道路面（硬化面）を土石流による砂礫が被覆し、現地表面から約2mの深さに埋蔵されていたため残存していた。また、土石流の砂礫に土器片が多量に含まれていたことにより、土器片の年代が10世紀初頭を下限とすることから、被覆された道路遺構が10世紀以前のものであることが判明した。断面観察のために設定したサブトレーンチの調査により、道路遺構の版築層の下層から8世紀前半、版築層の間から9世紀前半の土器片が出土し、道路の構築及び修築時期が概ね捉えられる。道路遺構の西端は現在の町道2101号の下にあるため調査し得なかったが、検出された道路面（硬化面）の最大幅が3.7mに及ぶことから推定で6mの道路幅を有していると考えられ、静岡県や神奈川県内で検出されている東海道の本道の幅が12mであるのに対し、支路の甲斐路は半分の規模の6m（小路）であったと読み取れる。『延喜式』に記載された甲斐の三駅の馬の常駐数は五疋とあり、これは小路の規定と合致する。東海道の本道に接していない内陸への支路の状況を検証する事例となり得よう。後述する10世紀初頭の土石流で道路の一部が破壊され道路面を砂礫が被覆するが、当該期には承平7年（937）に富士山が噴火し、北斜面の噴火口から剣丸尾溶岩が流下し、富士吉田市新倉と富士河口湖町船津の境目を通り、富士吉田市上暮地付近にまで達している。この溶岩流により古代東海道甲斐路も大きな被害を受けたことが想像に難くない。河口湖畔における土石流による破損・埋没、富士北麓における溶岩流による埋没が重なり、甲斐から駿河に至る経路としては致命的な被害が重なったと考えられる。鎌倉期に日蓮が武藏に向かう経路として、河口から呉地（暮地）に向かう行程が記録されており、鯉ノ水遺跡付近の土石流災害、富士山の噴火災害により、河口から山を越えて呉地（暮地・現在の富士吉田市上暮地）に至る迂回ルートが一時的に使用された可能性も示唆される。

第2項 土石流・流路跡

災害の痕跡としてI～III区で土石流・流路跡が確認され、調査区を蛇行しながら東西に断面がV字状ないしはU字状に抉られている。このうちI・II区の第1号土石流路跡は、大量の遺物を覆土の砂礫に含むことから土石流が鯉ノ水遺跡の東方の山裾に存在した集落遺跡を破壊し、さらに西の河口湖に向かって流下してきたことを裏付けるものである。鯉ノ水遺跡の東方には集落遺跡として知られる滝沢遺跡があり、これまでの調査では土石流に被災した痕跡は確認されていないが、今後同遺跡あるいは周辺地域において土石流で削り取られた地形等が検出される可能性は高いと推測される。覆土の砂礫に含まれる土器の年代は平安時代の10世紀初頭のものが下限であり、この時期に土石流が発生したと考えられる。出土した土器の大半は9世紀前半から10世紀初頭にかけてのもので、破片の割れ口の摩耗が少なく、接合するものも複数例確認されることから、土石流が猛烈な勢いで流下したことをうかがい知ることができる。

第3項 墨書土器・刻書土器

鯉ノ水遺跡で出土した古代の土器の多くはI区及びII区の第1号土石流・流路跡として認識されている土石流により東方から押し流されたもので破片資料が多く、墨書土器や刻書土器などの文字資料も断片的なものが

目立つ。しかしながら、判読可能な資料も散見され、「奉」を略して記銘した「奉」の字が多くみられる。この文字は、鯉ノ水遺跡の東方の滝沢遺跡の発掘調査において多く認められている文字であり、記銘文字の内容からもⅠ区及びⅡ区の第1号土石流が滝沢遺跡もしくは周辺の集落遺跡を巻き込んで流下したことが推測される。滝沢遺跡は文字資料の出土点数が多く識字層が関与していた集落である可能性が指摘されている。結果として、押し流された遺物の中にも墨書き土器・刻書き土器が見出されたと推測される。

第4項 古代製塩土器

鯉ノ水遺跡の発掘調査においてⅠ区第1号土石流・流路跡の覆土から5点の古代製塩土器が出土した。覆土に含まれる土器の多くを占める9世紀前半の土器と同時期のものと推測される。土石流・流路跡の覆土に含まれていた他の土器と同様に東方から流されてきたものと考えられ、これを証するように東に所在する集落遺跡である滝沢遺跡においても古代製塩土器が見出されている。固形の塩を運搬するための容器としての製塩土器は、日常的な塩の流通とは異なり、儀礼や祭祀などに使われる特別な塩で可能性が指摘されており、滝沢遺跡もしくは周辺で重要な儀礼等が行われていたことが示唆される。滝沢遺跡は鯉ノ水遺跡で検出された東海道甲斐路の沿道に発達した集落であり、文字資料が多量に出土している点などから、道や道を往来する官人との関わりの強い集落であった可能性が浮かび上がる。

第5項 動物遺体

I・II区の土石流・流路跡の覆土の砂礫から、土器とともに馬の歯が27点出土している。第4章第1項で部位等の詳細は触れられているので重複は避け、ここでは馬の存在を示す当該資料の意義を考える。土器と同様に土石流により押し流されてきたものであり、元来は鯉ノ水遺跡の東方の滝沢遺跡周辺に存在したものと考えられる。歯のみの出土であり、個体数などの検証は困難であるが、一定量の馬が存在した可能性が示唆される。滝沢遺跡では、竪穴建物の覆土から馬の頭蓋骨が出土した事例がある。鯉ノ水遺跡の馬の歯については、馬がどのような状態にあったのか、①飼養されていた馬が土石流に巻き込まれた、②死後に埋葬された馬の遺体が土石流で流された、③儀式などの何らかの祭祀に用いられた馬の遺体が土石流で流されてきた、といったいくつかのパターンが想定できる。いずれにしても、鯉ノ水遺跡の東方地域において馬が存在したことは確かであり、集落遺跡と馬が密接に関わっていたことは明白である。東海道甲斐路の沿道、河口駅の所在比定地であり、当該地で古代において馬は重要な位置付けであったことは想像に難くない。滝沢遺跡の集落が馬の飼養に何らかの関与をしていたとも推測される。河口駅には5疋の馬が常駐していたことが『延喜式』から読み取れるが、駅に配備する馬の飼養施設、牧の存在が想定され、今後の周辺地域の発掘調査の進展に期待される。

第2節 古墳時代の遺物について

鯉ノ水遺跡における古墳時代の土器の出土状況は大きく二分される。一つはⅠ区及びⅡ区の土石流・流路跡の覆土の砂礫に含まれて出土したもの、もう一つはⅢ区の遺物包含層から集中して出土した一群である。

第1項 I・II区の古墳時代の遺物

土石流・流路跡の覆土の砂礫から出土した古墳時代の土器は前期から中期にかけての時期に位置付けられ、すべてが破片資料である。古墳時代前期から中期にかけての土器は、滝沢遺跡のこれまでの調査で確認されている土器の時代と共通しており、これらは古代の遺物と同様に鯉ノ水遺跡の東方に所在する滝沢遺跡もしくは周辺の遺跡から流されてきたものであると推測される。使用中もしくは使用後間もなく土石流により流された

古代の土器と比較すると摩耗している資料が多い。

第2項 III区の古墳時代の遺物

III区の遺物包含層から出土した古墳時代の土器は中期の5世紀半ばから後半にかけての時期に限られ、破片がまとまって分布し、接合し復元し得る資料が多く認められた。これらはI・II区の土石流で運ばれた土器とは異なり、III区の地点で遺棄されたものと考えられる。堅穴建物等の遺構は検出されなかったが、古墳時代中期の5世紀の段階で人々の生活域が古代よりも西に存在した、湖の水位が古代よりも低かったことを示す。山梨県内における5世紀代の古墳時代中期の土器の出土事例、甲府盆地以外での調査事例は少なく、今回の調査は当該期の土器の様相を示すまとまった資料を得る機会となった。

第3節 中世～近世の遺構・遺物について

第1項 旧鎌倉往還の道路遺構

I区第1号道路遺構は、旧鎌倉往還の道路遺構で、近世には「追坂道」と称される河口湖の湖畔を迂回する経路であると考えられる。旧鎌倉往還が発掘調査により遺構として確認されたのは町内の事例では庖橋遺跡に次いで2例目となる。10世紀初頭を下限とする土石流の砂礫上に道路が再び構築されており、16世紀後半以降の陶磁器等の遺物が路面や路肩から出土している点から、10世紀半ば～16世紀前半の間が空白期になる。しかし、遺物の年代観だけではこの空白期に道路が存在しなかったとは断定し得ない。道路遺構の性格上、遺物が確認されることはむしろ希であり、出土遺物の年代が道路の構築及び使用年代を明らかにするのは不可能と考えられる。16世紀後半以降の陶磁器片が認められるが、これらが道路遺構に投棄された理由を検討する必要がある。明治13年(1880)5月に描かれた「河口村絵図」(河口浅間神社蔵)に添えられた奥書きに河口村を通過する旧鎌倉往還に架設された橋の幅が記載されており、多くの橋の幅が7尺(約2.12m)または、9尺(約2.72m)である。鯉ノ水遺跡で検出された第1号道路遺構・旧鎌倉往還跡も同等の7尺ないし9尺の幅を有していたことが推測される。

昭和初期に鯉ノ水遺跡周辺は土地改良事業により圃場整備が実施されるが、その段階まで第1号道路遺構は使用され、現在のアスファルト舗装の町道2101号の前身の道路として機能していたと考えられる。古代東海道甲斐路の道路遺構に重複して旧鎌倉往還の道路遺構が確認されたことから、鎌倉往還が甲斐路(御坂路)の経路を継承していることを証明する事例と考えられる。

鎌倉往還は呼称のとおり甲斐と鎌倉を結ぶ軍事路としての機能をもち、中世を通じて構築された御坂城跡、天上山烽火台、船津鐘突堂、赤坂塁跡(信玄築石)、吉田の城山など多くの城館跡が沿道に分布する。また、小田原や沼津などの海岸地域と甲斐を結ぶ道でもあり、塩や海産物の流通にも重要な役割を果たしてきた。そして、中世の後半以降には、大衆化した富士登拝のため、甲府盆地の以西・以北の道者たちが往来した信仰の道としての要素も強くなる。特に河口は鎌倉往還の御坂峠の南に位置し、峠との標高差は約700mを測り、疲弊した道者たちに宿と食事を提供し、加持祈祷を行い、富士登拝を支える御師の集住する集落であった。御師集落を発った道者は、富士山を目指し鎌倉往還を南下して行った。鯉ノ水遺跡で検出された鎌倉往還の道路遺構は、中世から近世にかけて様々な用途に使用され、歴史を刻んできた道路跡である。

第2項 中世～近世の遺物

I区第1号道路遺構・旧鎌倉往還跡から出土した陶磁器は、16世紀から19世紀にかけての時期のものである。前項で触れた通り、道路遺構に遺物が伴う理由を検討する余地はあるが、戦国時代のおわり頃から江戸時代後期にかけての遺物であり、この遺構が道路として使用されていた頻度が高かった時期を示す資料として捉えることもできる。戦国時代の末期は富士登拝が大衆化する時期にあたり、河口に御師集落が形成され始め、江

戸時代に入ると御師の分家等により御師住宅の件数が増え、江戸時代後期には120軒もの御師住宅が営まれていた。

第4節 鯉ノ水遺跡の古環境の検討

今回の発掘調査の地点は、御坂山地・三ッ峠山から伸びる霜山の裾部から河口湖の湖畔にかけて傾斜地にあたり、古環境を検討する好条件の立地であった。地層の観察・検証により旧来の河口湖の湖岸、霜山の山腹から沢を通じて押し寄せた土石流の影響を鮮明に把握することができた。

古墳時代中期の5世紀の段階では、調査区の西端であるⅢ区において土器が集中して分布する状況が確認されたことから、古代よりも寒冷であった古墳時代中期の段階で、河口湖の湖水が少なく湖岸の汀線が下がっていたことが推測される。このため、古墳時代中期には現在の標高837mの等高線の範囲まで湖岸が利用できたと考えられる。

古代東海道甲斐路が構築され使用されていた奈良・平安時代の段階では、道路遺構が検出されたⅠ区以東が陸地であり、Ⅱ区の現在の標高838mの等高線を挟んで東側が湖岸、西側及びⅢ区が湖水という古環境であったと読み取ることができる。平安時代以降、地球規模で温暖な気候となり、北極・南極の氷が減少すると降水量が多くなり土石流が発生しやすい状況になる。9世紀代には歴史書に記録された大地震や土石流災害が多くみられる。河口湖東岸の霜山付近でも大規模な土石流が10世紀の初頭に発生し、集落遺跡を押し流しながら古代東海道甲斐路を破壊・被覆する。土石流による砂礫が堆積して嵩上げされた地面に中世の道路が再興される。近世後半に河口湖から新倉村（現在の富士吉田市新倉）に湖水を排出する新倉掘抜がつくられ、河口湖の湖水を人工的に減少させることができとなり、減水した河口湖の湖岸の利活用の範囲は徐々に広くなり、近代以降の放水路の建設、干拓、土地改良、圃場整備を経て現在の湖岸線まで湖が縮小する。鯉ノ水遺跡周辺は水田として耕作に利用され現在に至る。



鯉ノ水遺跡 垂直モザイク写真（古環境の想定）

第1表 I 区 土器観察表

第1号道路跡(鎌倉往還跡) 出土遺物															
No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
1	2ソウ 1	陶器・碗	江戸時代後期	1.5×5.0				灰白	N 8/	密	良好	破片	AF006	839.627	瀬戸美濃系
2	2ソウ 7	陶器・碗	江戸時代	3.6×2.5	ナデ	ナデ		(断面)灰黄	2.5Y 7/2	密	良好	破片	AF005	839.648	灰釉、鉄抽
3	2ソウ 14	石器・削器	绳文～弥生中期	1.6×2.2								完形	AF006	839.560	黒曜石
4	2ソウ 18	陶器・皿	戦国末～江戸初頭	3.3×3.7				灰白	2.5Y 8/1	密	良好	破片	AF006	839.539	長石柚、志野系
5	2ソウ 27	青磁・蓋	江戸時代	2.6×2.7				灰白	N 8/	密	良好	破片	AF006	839.474	
6	2ソウ 28	陶器・皿	戦国末～江戸初頭	2.5×4.2				灰白	5Y 8/1	密	良好	破片	AF006	839.578	長石柚、志野系
7	2ソウ 29	陶器・小碗	江戸時代後期	2.8×4.3				灰白	N 8/	密	良好	破片	AE005	839.534	瀬戸美濃
8	2ソウ253	土師器・壺又は甕	古墳前期	7.3×5.8	ナデ	ナデ		にぶい黄橙	10YR 6/4	密、雲母・長石	良好	破片	AG006	839.406	
9	2ソウ15	陶器・天目茶碗	戦国末～江戸初頭	2.8×3.3		回転ヘラ削り		浅黄	2.5Y 6/6	密、雲母	良好	破片	AF006	839.575	

第2号道路跡(東海道甲斐路跡) 出土遺物															
No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
1	1MF 607	土師器・壺	8C末～9C	3.7×1.9			回転糸切り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AF004	838.213	
2	1DR3 797	土師器・壺	8C前半～8C中	3.2×4.9	暗文	ミガキ	ミガキ	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AF005	837.828	
3	1一括	土師器・壺	9C前半	2.3×2.6	暗文			橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	—	—	版築土内から出土

第1号 土石流・流路 出土遺物															
No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
1	1F 34	土師器・壺	9C後半～10C初頭	3.0×1.9		ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AH003	838.439	墨書(体部)
2	1F 35	土師器・壺	9C前半	2.1×3.5	暗文			橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AH003	838.457	墨書(体部)
3	1F 39	土師器・壺	9C前半	3.8×3.9	暗文	ナデ		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AI003	838.422	
4	1F 40	土師器・壺	9C前半以前	1.9×2.3	暗文			橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AG004	838.421	刻書(体部)
5	1F 41	土師器・壺	9C前半以前	3.0×3.7	暗文			橙	2.5YR 6/8	密、雲母	良好	破片	AH004	838.408	墨書(体部)
6	1F 54	土師器・甕	古代	2.9×2.2	ハケ	ハケ		にぶい赤褐	2.5YR 4/4	密、雲母・長石	良好	破片	AI004	838.438	
7	1F 58	土師器・壺	8C末～9C初頭	5.0×4.9			回転糸切り	明赤褐	2.5YR 5/6	密、雲母	良好	1/8	AJ003	838.398	
8	1F 59	土師器・甕	古代	2.3×3.5	ハケ	ナデ		明赤褐	2.5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	AJ003	838.408	
9	1F 63	土師器・壺	古代	5.8×6.5	暗文	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/8	AI002	838.980	
10	1F 64	土師器・壺	古代	5.5×3.5	暗文			橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/9	AI002	838.759	黒色土器
11	1F 73	土師器・壺	古代	1.3×6.0		ヘラ削り	ヘラ削り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/6	AI003	838.444	刻書(底部)
12	1F 84	土師器・壺	古代	2.9×5.8	暗文			橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AI003	838.325	刻書(体部)
13	1F 90	製塩土器	古代	2.1×1.9	ナデ	ナデ		にぶい黄橙	10YR 7/4	密、雲母・長石	良好	破片	AJ003	838.368	
14	1F 95	土師器・甕	古代	2.7×3.2	ハケ	ハケ		赤褐	2.5YR 4/6	密、雲母・長石	良好	破片	AJ003	838.347	
15	1F 96	土師器・甕	古代	2.4×2.2	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI004	838.244	
16	1F 97	土師器・壺	9C前半～9C中	2.2×7.5	暗文	ヘラ削り	回転糸切り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/6	AJ002	838.647	
17	1F115	土師器・壺	9C後半	5.0×8.0		ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/5	AI003	838.207	
18	1F123	土師器・皿	9C後半	1.8×5.5	暗文			橙	5YR 6/8	密、雲母	良好	破片	AI003	838.025	
19	1F124	土師器・甕	古代	4.5×4.0	ナデ	ハケ		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI004	838.063	
20	1F132	土師器・甕	古代	5.0×6.0		ヘラ削り	ヘラ削り	明赤褐	2.5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	1/15	AI003	838.217	
21	1F142	土師器・壺	9C前半	5.6×7.9	暗文	ヘラ削り	回転糸切り	橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	1/5	AI003	838.197	
22	1F152	土師器・甕	古墳?	3.5×2.0	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	838.201	
23	1F166	土師器・甕	10C前半	3.5×5.0	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	838.185	
24	1F170	土師器・壺	古墳中期	3.8×4.3	ナデ	ナデ		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AJ002	838.508	
25	1F174	土師器・甕	古代	2.5×3.0	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石含む	良好	破片	AJ002	838.623	

No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
26	1F187	土師器・壺	古代	3.3×3.1	ハケ	ハケ		赤褐	2.5YR 4/6	密、雲母・長石	良好	破片	AJ002	838.455	
27	1F190	製塙土器	9C前半	3.7×3.4	ナデ	ナデ		にぶい黄橙	10YR 7/4	密、雲母・長石	良好	破片	AJ002	838.448	口縁部
28	1F195	土師器・壺	古墳中期	3.4×3.5	ナデ	ナデ		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AJ003	838.354	
29	1F201	土師器・壺	古代	4.3×3.0	ハケ	ハケ		にぶい赤褐	2.5YR 4/4	密、雲母・長石	良好	破片	AI004	838.081	
30	1F214	製塙土器	古代	2.8×1.8	ナデ	ナデ		にぶい黄橙	10YR 7/4	密、雲母・長石	良好	破片	AJ003	838.348	口縁部
31	1F227	土師器・壺	古代	3.1×2.1	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI004	837.979	
32	1F234	土師器・壺	9C後半	5.2×5.0	暗文	ヘラ削り		橙	2.5YR 6/8	密、雲母	良好	1/8	AI003	838.417	黒色土器
33	1F242	土師器・壺	9C前半	2.2×4.2	暗文	ヘラ削り	ヘラ削り	明赤褐	2.5YR 5/6	密、雲母	良好	1/10	AI003	838.284	刻書(底部)
34	1F249	土師器・壺	古墳時代	5.7×7.9	ナデ	ナデ		橙	2.5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	1/10	AI003	838.195	木葉痕(底部)
35	1F252	土師器・壺	古墳前期	3.0×3.3	ナデ	ハケ		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AG006	839.216	東海系在地
36	1F261	土師器・壺	9C前半	3.1×4.7	暗文			橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI004	837.991	
37	1F265	土師器・壺	古墳前期	4.2×3.5	ナデ	ナデ		橙	5YR 7/8	密、雲母・長石	良好	破片	AH003	838.341	
38	1F275	土師器・壺	古代	3.6×3.5	ハケ	ハケ		にぶい橙	7.5YR 6/4	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	838.170	
39	1F289	土師器・壺	10C初頭	2.1×3.0				橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AH004	838.088	墨書(体部)
40	1F290	土師器・壺	古代	3.6×5.2			回転糸切り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AI004	838.154	刻書(底部)
41	1F294	土師器・壺	古墳前期	3.2×4.4	条痕	刺突痕		橙	7.5YR 7/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	838.312	東海系在地
42	1F300	土師器・壺	古代	2.1×3.3	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	838.020	
43	1F301	須恵器・壺	古代	4.2×6.0				灰白	N 7/	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	837.947	助宗窯産
44	1F311	土師器・壺	9C前半	3.5×7.2	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	837.932	
45	1F312	土器・長頸受口壺	弥生時代中期初頭	2.7×3.7	赤彩	沈線		にぶい黄橙	10YR 7/4	密、雲母・長石	良好	破片	AI002	838.120	
46	1F333	土師器・壺又は壺	古墳前期	2.6×3.4	ナデ	ナデ		にぶい黄橙	10YR 7/4	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	838.240	
47	1F342	土師器・壺	9C前半	4.6×5.0	暗文	ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AJ003	838.053	
48	1F346	土師器・壺	古代	2.1×2.8	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	837.750	
49	1F355	土師器・壺	古墳中期初頭	4.3×4.1	ナデ	ナデ		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	837.799	
50	1F360	土師器・壺又は壺	古墳前期	4.7×2.0		ハケ		橙	7.5YR 7/6	密、雲母	良好	破片	AH003	838.064	伊勢湾系
51	1F361	土師器・壺	古代	3.3×3.1	ハケ	ハケ		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AH004	837.980	
52	1F369	土師器・壺	古代	3.0×1.8				橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AF005	838.417	墨書(体部)
53	1F373	土師器・壺	9C前半	3.1×6.2	暗文	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	5YR 7/6	密、雲母	良好	破片	AH004	838.026	
54	1F387	土師器・壺	古代	2.7×3.6	ハケ	ハケ		明赤褐	2.5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	AF005	838.445	
55	1F415	土師器・壺	古代	2.4×2.7	ハケ	ハケ		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AF005	838.360	
56	1F416/2-括130826	土師器・蓋	9C中~9C後半	2.3×	ナデ	ナデ		橙	7.5YR 7/6	密、雲母	良好	破片	AF005	838.389	II区の一括遺物と接合
57	1F417	土師器・壺	9C前半	5.0×6.7	暗文	ヘラ削り		橙	5YR 6/8	密、雲母	良好	1/6	AF006	838.321	
58	1F426	須恵器・壺	古代	5.7×4.7	タタキ	タタキ		灰白	N 7/	密、雲母	良好	破片	AF006	838.317	助宗窯産
59	1F427-2	土師器・壺	古代	2.5×3.0	ナデ	ナデ		橙	7.5YR 7/6	密、雲母・長石	良好	破片	AG006	838.360	
60	1F430	土師器・壺	9C前半	3.0×5.6	暗文			橙	2.5YR 6/8	密、雲母	良好	1/10	AG005	838.337	
61	1F436	土師器・壺	9C前半	3.9×5.1	暗文	ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/10	AH004	837.889	
62	1F444-1	土師器・皿	9C前半	2.4×5.2	暗文			明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	AF006	838.200	
63	1F447	土師器・壺	10C初頭	8.6×10.8	ヘラ削り	回転糸切り	明赤褐	5YR 5/6	密、雲母	良好	1/3	AF006	838.246		
	1F461											AF006	838.118		
	1F481											AG005	838.107		
64	1F449	土師器・壺	9C後中~10C初頭	5.0×7.4	ナデ	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/6	AF006	838.257	
65	1F450	土師器・壺	古代	4.5×5.1	ハケ	ハケ		にぶい赤褐	5YR 5/4	密、雲母・長石	良好	破片	AF006	838.215	
66	1F455	土師器・壺	古墳時代	2.6×4.2	ナデ	沈線		明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	AG005	838.162	
67	1F467-1	土師器・壺	古代	3.4×4.1			回転糸切り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AG005	838.178	刻書(底部)
68	1F470-1	土師器・壺	10C初頭	5.3×4.7		ヘラ削り		橙	5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	1/9	AH004	837.974	
69	1F472	土師器・壺	10C初頭	6.0×4.6	ナデ	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	2.5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	1/8	AH005	838.180	No.78と接合

No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率		標高	備考	
					内面	外面	底									
70	1F478	土師器・壺	9C後半	5.3×8.2		ヘラ削り		明赤褐	2.5YR 5/6	密、雲母	良好	1/6	AF005	838.196		
71	1F494	土師器・羽釜	古墳時代	1.0×2.4	ナデ	ナデ	ナデ	橙	2.5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	AF006	838.079		
72	1F497-1	土師器・壺又は壺	古墳前期	6.0×2.5	ハケ	ハケ		にぶい黄橙	10YR 7/4	密、雲母・長石	良好	破片	AG005	838.109		
73	1F502	土師器・壺	10C前半	2.3×3.7	ナデ	ナデ		明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	AG005	838.085		
74	1F507	土師器・皿	古墳中期	6.0×7.4	ミガキ	ヘラ削り	ヘラ削り	にぶい橙	7.5YR 6/4	密、雲母・長石	良好	破片	AG005	838.079		
75	1F516	土師器・壺	古墳前期	3.0×3.6	ハケ	ハケ		橙	2.5YR 7/8	密、雲母・長石	良好	破片	AG005	838.109		
76	1F528	土師器・壺	古代	3.2×2.0	ハケ	ハケ		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AF005	838.221		
77	1F532	製塩土器	古代	2.4×1.7	ナデ	ナデ		にぶい黄橙	10YR 7/4	密、長石	良好	破片	AF005	838.349	体部	
78	1F538	土師器・壺	10C初頭	3.5×5.4	ナデ	ヘラ削り		橙	2.5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	1/8	AG005	838.076	No.69と接合	
79	1F540	須恵器・壺	古代	3.2×2.4	タタキ	タタキ		灰白	2.5YR 7/1	密、雲母	良好	破片	AF006	838.292	助宗窯産	
80	1F553	土師器・壺又は壺	古墳時代	4.0×3.5	ナデ	ハケ		にぶい黄橙	10YR 7/4	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	838.258		
81	1F554	土師器・皿	9C前半	2.3×6.5	暗文	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	1/7	AI003	838.111		
82	1F558	土師器・壺	古代	1.7×1.9	ハケ	ハケ		赤褐	5YR 4/6	密、雲母・長石	良好	破片	AG005	838.065		
83	1F563	土師器・壺	9C前半	4.6×3.9	暗文	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	2.5YR 6/8	密、雲母	良好	1/8	AG005	838.201		
84	1F564	土師器・壺	古代	4.5×4.0	ナデ	ハケ		明赤褐	2.5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	AG005	838.222		
85	1F568	須恵器・皿	8C末～9C初頭	4.6×6.3	ナデ	ナデ		灰白	10YR 7/1	密	良好	1/6	AF006	838.314	助宗窯産	
86	1F571	土師器・皿	10C前半	2.5×5.0	ナデ	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/5	AI003	838.364		
87	1F576	土師器・壺又は壺	古墳前期	2.6×3.6	ナデ	ハケ		明赤褐	2.5YR 5/6	密、雲母	良好	破片	AF005	838.266		
88	1F581	土師器・皿	10C前半	4.1×5.5			ヘラ削り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/8	AG005	838.241		
89	1F589/24T	土師器・壺	古墳前期	3.2×6.5	ハケ	刺突痕・ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密、雲母	良好	破片	AI003	838.286	東海系在地	
90	1F590	土師器・壺又は壺	古墳前期	4.0×3.3	ナデ	ハケ		にぶい橙	7.5YR 7/4	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	838.145		
91	MF607	古銭	近代	外径2.3厚0.13										完形	AF004	838.213
92	1F609	土師器・壺	古代	4.2×4.8	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AF006	837.949		
93	1F621	土製品・土錘	古墳時代～古代	2.2×1.7		ナデ		明赤褐	2.5YR 5/8	密、雲母	良好	1/2	AF006	838.209		
94	1F624	土師器・壺又は壺	古代	3.6×3.6	タタキ	タタキ		灰黃	2.5YR 7/2	密	良好	破片	AF005	838.377	伊豆産か	
95	1F720	土製品・土錘	古墳時代～古代	1.5×3.5		ナデ		橙	5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	完形	AF006	838.005		
96	1F721	繩文土器・深鉢	繩文中期後葉	8.7×13	ナデ	繩文		橙	2.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AG005	837.818	曾利IV式又は加曾利EIV式	
97	1F722	土師器・皿	9C後半	4.8×2.2		回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	5YR 7/6	密、雲母	良好	破片	AF006	837.924		
98	1F848	土師器・壺	古墳時代	3.0×3.2	ナデ	ナデ		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AF005	837.891		
99	1F849	土師器・壺又は壺	古墳中期	2.6×3.2	ナデ	条痕		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	AG006	838.059		
100	2ソウ239	土師器・壺	古代	3.3×3.5		ハケ		明赤褐	2.5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI004	837.950		
101	2ソウ266	土師器・壺	古墳前期	2.0×2.4	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	837.796		
102	2ソウ268	製塩土器	古代	1.5×3.1	ナデ	ナデ		橙	7.5YR 7/6	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	838.081		
103	2ソウ272	土師器・壺	古墳前期	2.0×3.3		ナデ		にぶい黄橙	10YR 7/4	密、雲母・長石	良好	1/8	AI003	838.100	伊勢湾系	
104	2ソウ278	土師器・壺	古代	3.0×2.7	ハケ	ハケ		にぶい赤褐	5YR 5/4	密、雲母・長石	良好	破片	AI003	838.073		
105	2ソウ280	土師器・壺	9C前半	1.9×2.3	暗文			橙	5YR 7/6	密、雲母・長石	良好	破片	AJ002	838.420	刻書(体部)	

I 区 一括

No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
1	1-括130731	須恵器・壺	古代	6.0×6.5	ナデ	ナデ		灰白	2.5YR 8/	密、雲母・長石	良好	破片	—	—	
2	1-括130819	須恵器・壺	古代	4.0×5.0	ナデ	ナデ		灰	N 6/	密、雲母・長石	良好	破片	—	—	湖西窯産か
3	3T	土師器・壺	10C前半	3.8×3.5		ナデ		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	—	—	黒色土器

第3表 II区 出土遺物観察表

第1号 土石流・流路跡 出土遺物															
No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
1	2F 630	須恵器・壺又は甕	奈良～平安時代	3.5×6.0	ナデ	タタキ		灰白	10YR 7/1	密、雲母	良好	破片	AB007	837.099	
2	2F 632	土師器・甕	古墳時代	2.0×4.0	ナデ	ハケ		にぶい黄橙	10YR 7/4	密、雲母・長石	良好	破片	Z007	837.120	
3	2F 633	土師器・壺	平安時代	0.8×15.0				橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	Z007	837.094	墨書(体部)
4	2F 633-24	土師器・甕	古代	2.9×1.9	ハケ	ハケ		明赤褐	2.5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	Z007	837.094	
5	2F 633-31	土師器・甕	古代	2.2×2.3	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	Z007	837.094	
6	2F 635	土師器・壺	平安時代	4.2×3.7	ナデ		回転糸切り	橙	2.5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	破片	Z008	835.694	
7	2F 640	土師器・壺	10C初頭	2.7×4.0				橙	2.5YR 6/8	密、雲母	良好	破片	Z008	835.725	墨書「本」(体部)
8	2F 642	土師器・壺	9C末	4.5×5.5		ヘラ削り		橙	2.5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	1/8	Y008	835.824	
9	2F 644	土師器・壺	9C末	径11.5 底径4.7 高4.5	ナデ	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	2.5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	4/5	Y008	835.637	墨書「本・人」 (体部)
	2F906												W007	835.289	
	2F908												W007	835.307	
10	2F 645	土師器・皿	9C半ば	6.2×10.0	暗文	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/4	Y008	835.662	
11	2F 652	土師器・甕	古代	7.5×3.0	ナデ	ハケ	ナデ	橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	Y008	835.904	
12	2F 653	土師器・壺	9C末	3.0×4.7	ナデ			にぶい橙	7.5YR 7/4	密、雲母・長石	良好	破片	Y008	835.782	
13	2F 655	土師器・皿	9C後半	2.0×4.4	暗文	ヘラ削り		にぶい褐	7.5YR 5/4	密、雲母	良好	破片	Y008	835.830	
14	2F 659-2	土師器・壺	9C後半	3.6×5.8		ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/8	Y008	835.804	
15	2F 659-8	土師器・甕又は壺	古墳前期	2.2×3.7	ナデ	ハケ		橙	2.5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	破片	Y008	835.804	東海系在地
16	2F 660-2	土師器・壺	9C末～10C初頭	3.2×5.5		ヘラ削り		橙	2.5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	破片	Y008	835.762	
17	2F 670	土師器・皿	9C半ば	2.2×6.0				にぶい黄橙	10YR 6/4	密、雲母	良好	破片	X007	835.903	
18	2F 674-1	土師器・壺	9C後半	4.6×4.2		ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	Y009	836.143	
19	2F 678	土師器・皿	9C後半	3.4×4.5				橙	7.5YR 7/6	密、雲母・長石	良好	破片	Z008	835.653	
20	2F 680	土師器・壺	9C前半	4.6×7.1	暗文	ヘラ削り		橙	7.5YR 6/6	密、雲母	良好	1/6	Y008	835.522	黒色土器
21	2F 684	土師器・皿	9C半ば	5.0×6.0	ナデ	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	1/7	X008	835.613	
22	2F 689	土師器・壺	9C後半	3.5×5.2	暗文	ナデ		橙	7.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	Y008	835.495	黒色土器
23	2F 690	土師器・皿	9C前半	1.5×9.5	暗文	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/4	X008	835.605	
24	2F 691	土師器・甕	古代	1.7×3.3	ハケ	ハケ		赤褐	5YR 4/6	密、雲母・長石	良好	破片	Y008	835.809	
25	2F 693	土師器・甕	古代	2.3×4.2	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	X008	835.705	
26	2F 695	土師器・皿	9C	3.4×8.9				橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/6	X008	835.687	
27	2F 697	土師器・壺	9C前半以前	5.5×6.1	暗文	ヘラ削り	回転糸切り	橙	2.5YR 6/8	密、雲母	良好	1/5	Z008	835.501	
28	2F 698	土師器・壺	10C初頭	2.7×5.0		ナデ		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	Z008	835.484	黒色土器
29	2F 701	土師器・皿	9C後半	4.2×5.0	暗文	ナデ		橙	2.5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	1/7	Y008	835.472	
30	2F 705	土師器・壺	9C前半	2.6×5.4	暗文	ヘラ削り		橙	2.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	1/10	Y008	835.417	
31	2F 708	土師器・皿	9C前半	1.8×3.0	暗文	ナデ		橙	2.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	Y008	835.422	墨書(体部)
32	2F 713	土師器・甕	古代	2.0×3.4	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	Y008	835.443	
33	2F 716	土師器・皿	9C半ば	4.4×5.0	暗文	ナデ	回転ヘラ削り	橙	2.5YR 6/8	密、雲母	良好	1/8	Y008	835.542	
34	2F 729	土師器・壺	9C前半	5.5×2.3	暗文	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/6	Y008	835.456	
35	2F 732	土師器・甕	古代	3.2×2.9	ハケ	ハケ		赤褐	5YR 4/6	密、雲母・長石	良好	破片	X008	835.881	
36	2F 734	土師器・甕又は壺	古墳時代	3.0×3.5	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	Z008	835.834	
37	2F 744	土師器・甕又は壺	古墳時代	4.1×4.2	ナデ	ハケ		橙	2.5YR 7/6	密、雲母・長石	良好	破片	W008	835.783	
38	2F 745	土師器・甕	古代	4.7×2.7	ハケ	ハケ		橙	5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	破片	W008	835.751	
39	2F 746	土師器・甕	古代	4.0×2.3	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	W008	835.673	
40	2F 747	土師器・甕	古代	3.0×3.3	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	X008	835.513	
41	2F 748	土師器・壺	9C前半	5.6×4.8	暗文	ナデ		橙	2.5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	1/8	X008	835.447	

No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
42	2F 752	土師器・甕	古墳中期	2.8×4.2	ナデ	ハケ		橙	2.5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	V009	835.569	
43	2F 764	土師器・壺	9C前半	4.8×4.4	暗文	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	2.5YR 6/8	密・雲母	良好	破片	X008	835.592	
44	2F 765	土師器・壺	9C前半	4.5×6.1	暗文	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	5YR 6/8	密・雲母・長石	良好	1/4	X008	835.554	
45	2F 767	土師器・壺	9C前半	1.5×5.0	暗文	ヘラ削り	回転糸切り	橙	5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	1/5	W007	835.328	
46	2F 768	土師器・甕又は壺	古墳前期末	3.4×6.2	ハケ	ハケ		橙	5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	X008	835.804	伊勢湾系
47	2F 770	土師器・甕	古墳前期末	2.5×8.0	ナデ	ハケ		明黄褐	10YR 7/6	密・雲母・長石	良好	破片	X008	835.688	伊勢湾系
48	2F 772	土師器・壺	9C前半	4.0×5.6	暗文	ヘラ削り		橙	7.5YR 7/6	密・雲母	良好	1/8	X008	835.574	墨書「本」(体部)
49	2F 774	土師器・壺	9C前半	底径5.2高1.4	暗文	ヘラ削り	回転糸切り	橙	5YR 6/6	密・雲母	良好	1/4	X008	835.570	墨書「十」(底部)
50	2F 776	土師器・甕	古代	3.4×3.4	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	X008	835.625	
51	2F 780	土師器・壺	9C後半	4.6×5.2		ヘラ削り		橙	5YR 6/8	密・雲母	良好	1/8	X007	835.451	
52	2F 783	土師器・甕	古代	3.5×3.7	ハケ	ハケ		明赤褐	2.5YR 5/6	密・雲母・長石	良好	破片	X008	835.651	
53	2F 784	土師器・甕	古代	4.0×3.0	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密・雲母・長石	良好	破片	X007	835.591	
54	2F 787	土師器・壺	9C前半	4.6×4.5	暗文	ヘラ削り		橙	2.5YR 6/8	密・雲母・長石	良好	1/8	X007	835.717	
55	2F 788	土師器・壺	9C前半	5.8×5.4	暗文	ナデ		橙	2.5YR 6/8	密・雲母・長石	良好	1/8	Y008	835.558	
56	2F 789	土師器・壺	9C前半	4.1×3.0	暗文	ヘラ削り		橙	7.5YR 7/6	密・雲母・長石	良好	破片	Y008	835.729	墨書(体部)
57	2F 791	土師器・甕	古代	2.7×4.1	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密・雲母・長石	良好	破片	X007	835.837	
58	2F 803	土師器・皿	9C後半	4.5×5.0	暗文	ナデ	ヘラ削り	橙	2.5YR 6/8	密・雲母	良好	1/8	X007	835.342	
59	2F 813	土師器・壺	9C	5.0×5.1	暗文		回転糸切り	橙	2.5YR 6/8	密・雲母	良好	1/6	X007	835.882	
60	2F 819	土師器・甕又は壺	古墳前期	5.0×4.6	ナデ	条痕		橙	7.5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	X008	835.510	伊勢湾系
61	2F 820	土師器・壺	9C末～10C	4.5×4.5	暗文	ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	5YR 6/8	密・雲母	良好	1/6	W008	835.512	
62	2F 821-1	土師器・甕又は壺	古墳前期	3.5×3.2	ナデ	ハケ		橙	5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	W007	835.875	東海系在地
63	2F 822	土師器・壺	9C後半	5.8×4.7	ナデ	ナデ		橙	5YR 7/8	密・雲母・長石	良好	1/8	W007	835.764	墨書土器
64	2F 823	土師器・甕	9C	2.2×5.0	ハケ	ナデ		明赤褐	2.5YR 5/6	密・雲母・長石	良好	破片	W007	835.796	
65	2F 825	土師器・壺	9C後半～10C初頭	底径5.2高3.1	暗文	回転ヘラ削り	静止糸切り	橙	2.5YR 6/8	密・雲母・長石	良好	1/3	Y008	835.377	黒色土器
66	2F 830	土師器・甕又は壺	古墳時代	3.1×3.4	ハケ	ナデ		明赤褐	2.5YR 5/8	密・雲母・長石	良好	破片	X008	835.480	
67	2F 835	土師器・甕又は壺	古墳時代	2.5×2.9	ハケ	ハケ		明黄褐	10YR 7/6	密・雲母・長石	良好	破片	X008	835.457	
68	2F 836	土師器・壺	古墳中期	2.7×3.7	ミガキ	ミガキ		にぶい黄橙	10YR 7/4	密・雲母	良好	破片	W007	835.847	
69	2F 842	土師器・壺	9C前半	6.5×8.0	暗文	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	5YR 7/6	密・雲母・長石	良好	1/4	W008	835.778	
70	2F 843	土師器・甕	9C	2.9×2.2	ハケ	ナデ		にぶい褐	7.5YR 5/4	密・雲母・長石	良好	破片	W008	835.800	
71	2F 854	土師器・壺	9C前半	3.0×4.0	暗文	ヘラ削り		明赤褐	2.5YR 5/6	密・雲母	良好	破片	X008	835.887	墨書(体部)
72	2F 856	土師器・甕	古代	4.0×3.0	ハケ	ハケ		橙	5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	Y008	835.563	
73	2F 859	土師器・甕	古代	1.5×5.1	ハケ	ハケ	ヘラ削り	明赤褐	5YR 5/6	密・雲母・長石	良好	破片	W007	835.553	
74	2F 865	土師器・甕又は壺	古墳時代	5.1×5.5	ハケ	ハケ		橙	2.5YR 6/8	密・雲母・長石	良好	破片	X008	835.254	
75	2F 866	土師器・甕	古代	3.4×7.2	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	X008	835.400	木葉痕(底部)
76	2F 868	土師器・甕	古代	2.8×3.6	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	W008	835.748	
77	2F 870	土師器・皿	9C後半	2.8×6.1	暗文	ヘラ削り		橙	2.5YR 6/8	密・雲母	良好	破片	W007	835.481	黒色土器
78	2F 871-1	土師器・皿	9C前半	5.6×6.0	暗文	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	2.5YR 6/8	密・雲母	良好	1/5	W007	835.580	
79	2F 873	土師器・甕又は壺	古墳時代	3.3×5.0	ナデ	条痕		橙	5YR 7/6	密・雲母・長石	良好	破片	W007	835.375	
80	2F 883	土師器・甕又は壺	古墳時代	4.0×4.3	ハケ	ハケ		橙	5YR 7/6	密・雲母・長石	良好	破片	W007	835.376	
81	2F 897	須恵器・皿	9C初頭	3.0×11.5	ナデ	ナデ	回転ヘラ削り	灰白	2.5YR 7/1	密・雲母・長石	良好	1/3	W007	835.544	高台あり
82	2F 922	土製品・土錐	古墳時代～古代	外径1.3～2.0 内径0.3高3.8				明赤褐	5YR 5/6	密・雲母	不良	1/2	W007	835.437	
83	2F 937	土師器・壺	9C前半	4.3×1.7	暗文	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	7.5YR 7/6	密・雲母	良好	1/5	W007	835.663	
84	2F 945	土師器・甕	古代	3.6×3.1	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密・雲母・長石	良好	破片	W007	835.365	
85	2F 946	須恵器・壺	古代	5.0×3.5	ナデ	ナデ		灰白	N 7/	密・雲母・長石	良好	破片	W007	835.722	助宗窯産
86	2F 947	土師器・壺	9C前半	3.8×5.4	暗文	ヘラ削り		橙	7.5YR 7/6	密・雲母	良好	破片	Y008	835.322	

No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
87	2F 951	土師器・壺又は壺	古墳時代	3.4×2.6	ハケ	ハケ		橙	5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	X007	835.713	
88	2F 962	土師器・壺	9C前半	5.2×7.2	暗文	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	5YR 6/6	密・雲母	良好	1/7	X007	835.751	
	2F 963												X007	835.723	
89	2F 965	土師器・壺	9C後半	3.4×2.8				橙	5YR 6/6	密・雲母	良好	破片	X007	835.742	
90	2F 989	土師器・壺	古代	2.8×3.5	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密・雲母・長石	良好	破片	W007	835.683	
91	2F995	土師器・壺	9C後半	径11.5 底径5.0 高4.2		ヘラ削り	ヘラ削り	橙	2.5YR 6/8	密・雲母	良好	3/5	X007	835.425	土石流による粉 碎破片から接合
	2F997												X007	835.425	
	2F998												X007	835.436	
92	2F 996	土師器・壺	9C前半	5.8×3.7	暗文	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	5YR 7/6	密・雲母	良好	1/6	X007	835.740	
93	2F 999	土師器・壺	9C前半～9C半ば	2.7×2.9	ハケ	ハケ		橙	5YR 7/6	密・雲母・長石	良好	破片	W007	835.607	
94	2F1004	土師器・壺	古墳前期	3.5×3.7	ナデ	ハケ		橙	7.5YR 7/6	密・雲母・長石	良好	破片	X008	835.834	伊勢湾系
95	2F1017	土師器・壺	古墳時代	3.5×3.5	ハケ	ナデ		明赤褐	2.5YR 5/6	密・雲母・長石	良好	破片	X007	835.596	
96	2F1023	土師器・蓋	9C前半	3.6×3.2	暗文	ナデ		橙	5YR 7/8	密・雲母	良好	破片	Z008	835.640	
97	2F1026	土師器・壺	9C前半	7.2×8.0	暗文	ヘラ削り	回転糸切り	橙	2.5YR 6/8	密・雲母・長石	良好	1/3	Y008	835.547	
98	2F1027	土師器・壺	古代	2.9×3.2	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	Y008	835.248	
99	2F1028	土師器・壺	古代	4.5×3.4	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密・雲母・長石	良好	破片	X007	835.726	
100	2F1029	土師器・壺	9C前半	4.2×6.5	暗文	ヘラ削り		橙	2.5YR 6/8	密・雲母	良好	破片	Z008	835.588	
101	2F1034	土師器・壺	古代	2.9×5.1	ハケ	ハケ		橙	5YR 6/8	密・雲母・長石	良好	破片	Y008	835.881	
102	2F1040	土師器・壺	古代	3.0×3.0	ハケ	ハケ	ヘラ削り	橙	7.5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	Y008	835.226	
103	2F1079	土師器・壺	10C前半	3.4×3.7	暗文	ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	X008	835.815	
104	2F1081	土師器・壺	9C前半	2.9×3.6	暗文	ヘラ削り		橙	5YR 6/8	密・雲母	良好	破片	X008	835.473	墨書「夾」(体部)
105	2F1089	土師器・壺又は壺	古墳前期	2.6×4.7	ナデ	条痕		橙	5YR 7/6	密・雲母・長石	良好	破片	Y007	835.525	東海系在地
106	2F1090	土師器・壺	9C前半	3.7×5.8	暗文		回転ヘラ削り	橙	5YR 7/6	密・雲母・長石	良好	1/6	Y007	835.445	
107	2F1092	土師器・壺	古代	2.9×5.0	ハケ	ハケ		明赤褐	2.5YR 5/6	密・雲母・長石	良好	破片	Y007	835.630	
108	2F1100	土師器・壺	9C前半	4.3×5.0	暗文	ヘラ削り	ヘラ削り	橙	5YR 7/8	密・雲母・長石	良好	1/7	Y008	835.032	
109	2F1111	土師器・壺	9C前半	3.3×4.7	暗文	ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密・雲母	良好	破片	Y007	835.696	
110	2F1120	土師器・鉢	9C前半	5.0×7.3	暗文	ヘラ削り		橙	5YR 7/8	密・雲母・長石	良好	1/6	Y007	835.275	
111	2F1121	土師器・壺	古墳時代	4.5×3.5	ミガキ	ミガキ		橙	5YR 6/8	密・雲母・長石	良好	破片	Y009	835.182	外:赤褐色

II 区 一括															
No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
1	2-1括130808	土師器・皿	9C前半	3.8×4.7	暗文	ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	2.5YR 6/8	密・雲母・長石	良好	1/8	—	—	
2	2-1括130808	土師器・壺	古代	2.7×5.7	ハケ	ハケ		明赤褐	2.5YR 5/6	密・雲母・長石	良好	破片	—	—	
3	2-1括130809	土師器・壺	10C前半	2.6×2.0				橙	2.5YR 6/8	密・雲母	良好	破片	—	—	墨書(体部)
4	2-1括130809	土師器・皿	9C後半	3.1×6.6		ヘラ削り		橙	5YR 7/8	密・雲母・長石	良好	破片	—	—	
5	2-1括130809	土師器・壺	10C前半	2.7×3.3	ナデ	ヘラ削り		橙	5YR 7/8	密・雲母・長石	良好	破片	—	—	
6	2-1括130809	土師器・壺	古代	2.6×4.4				橙	7.5YR 7/6	密・雲母・長石	良好	破片	—	—	墨書(体部) 黒色土器
7	2-1括130812	土製品・土錐	古墳時代～古代	1.0×2.2				橙	2.5YR 6/8	密・雲母	良好	1/2	—	—	
8	2-1括130812	土師器・壺	9C～10C	2.7×4.0	暗文	ヘラ削り		橙	2.5YR 6/8	密・雲母	良好	破片	—	—	墨書(体部) 黒色土器
9	2-1括130812	土師器・壺	9C～10C	1.3×2.5		ヘラ削り		橙	7.5YR 6/6	密・雲母	良好	破片	—	—	墨書(体部)
10	2-1括130813	土師器・皿	9C後半	1.7×4.3				橙	2.5YR 6/6	密・雲母	良好	破片	—	—	墨書(体部)
11	2-1括130813	土師器・壺	9C前半	2.0×3.0	暗文	ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密・雲母	良好	破片	—	—	墨書・刻書(体部)
12	2-1括130814	土師器・壺	10C前半	2.6×2.4	暗文	ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密・雲母	良好	破片	—	—	墨書(体部)
13	2-1括130820	土師器・壺	9C	1.8×2.1	暗文			明黄褐	10YR 7/6	密・雲母・長石	良好	破片	—	—	墨書(体部) 黒色土器
14	2-1括130820	土師器・壺	古代	3.0×2.0	ハケ	ハケ		橙	7.5YR 6/6	密・雲母・長石	良好	破片	—	—	

No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
15	2-括130821	土師器・壺	9C後半	4.0×2.0		ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	—	—	墨書(体部)
16	2-括130829-1	土師器・壺	9C後半	2.3×3.0		ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	—	—	墨書(体部)
17	2-括130829-2	土師器・壺	9C前半	2.5×2.9	暗文	ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	—	—	墨書(体部)
18	2-括130829-3	土師器・壺	9C後半~10C初頭	1.1×1.8	暗文	ヘラ削り		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	—	—	刻書(体部)
19	2-括130830	土師器・皿	10C前半	4.1×4.7	暗文	回転ヘラ削り		橙	7.5YR 6/6	密、雲母	良好	1/8	—	—	黒色土器
20	24T	土師器・壺(脚)	古墳前期	3.0×6.0	ナデ	ナデ	ナデ	橙	2.5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	破片	—	—	東海系在地
21	24T	土師器・壺	9C前半	5.0×4.7	暗文	ヘラ削り		橙	7.5YR 7/6	密、雲母	良好	1/8	—	—	平成24年度試掘
22	24T	土師器・壺	9C前半	5.3×7.2	ハケ	ハケ		明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	破片	—	—	平成24年度試掘
23	24T	土師器・壺	9C前半	2.2×5.0	暗文	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/8	—	—	平成24年度試掘
24	24T	土師器・皿	9C前半~9C半ば	5.0×5.4	暗文	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	2.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	1/5	—	—	平成24年度試掘
25	24T	土師器・壺	9C後半~10C初頭	3.0×3.1	暗文	ヘラ削り		橙	7.5YR 7/6	密、雲母・長石	良好	破片	—	—	墨書「本」(体部)
26	24T	土師器・壺	9C前半	7.0×5.6	暗文	ヘラ削り	回転糸切り	橙	5YR 7/6	密、雲母・長石	良好	1/4	—	—	平成24年度試掘
27	2K671-2H	土師器・皿	9C後半~10C初頭	4.8×5.0	暗文	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	5YR 7/8	密、雲母・長石	良好	1/8	—	—	表土剥ぎ
28	2K671-2H	土師器・壺	9C後半~10C初頭	3.3×4.5		ヘラ削り		橙	2.5YR 6/8	密、雲母・長石	良好	破片	—	—	表土剥ぎ
29	2K671-2H	土師器・皿	9C後半~10C初頭	0.8×5.0		回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	橙	5YR 7/6	密、雲母	良好	破片	—	—	墨書(体・底部)
30	2K671H	土師器・壺	9C前半	6.3×4.5	暗文	ヘラ削り		橙	7.5YR 6/6	密、雲母	良好	1/8	—	—	表土剥ぎ

第4表 III区 出土遺物観察表

III区 遺物包含層出土遺物					III区 遺物包含層出土遺物											
No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考	
					内面	外面	底									
1	3F 815	土師器・壺	古墳中期	5.5×7.6	ミガキ	ミガキ		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	H013	834.380		
2	3F 816	土師器・壺	古墳中期	3.4×4.9	ミガキ	ミガキ		橙	5YR 6/8	密、雲母	良好	破片	H013	834.383		
3	3F 817	土師器・壺	古墳中期	3.4×3.8	ミガキ	ミガキ		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	H013	834.392		
4	3F 860	土師器・壺又は壺	古墳中期	5.8×6.7	ハケ	ハケ		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	F014	834.345		
	3F861												F014 834.361			
5	3F876	土師器・壺	古墳中期	径17.5 底 高(18.0)	ナデ	ナデ		赤褐	5YR 4/8	密、雲母・長石	良好	1/8	E014	834.245	接合遺物	
	3F974												E014	834.198		
	3F976												E014	834.197		
	3F978												E014	834.191		
	3F984												E014	834.188		
	3F993												E014	834.152		
	一括130822												—	—		
6	3F 880	土師器・壺	古墳中期	4.5×5.7	ハケ	ハケ		橙	5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	G013	834.400		
7	3F 886	土師器・高壺	古墳中期	3.6×4.1	ミガキ	ミガキ	ミガキ	橙	5YR 6/8	密、雲母	良好	破片	H013	834.391		
8	3F887	土師器・壺	古墳中期	6.2×9.2	ミガキ	ミガキ		橙	5YR 6/8	密、雲母	良好	破片	H013	834.379		
	3F888												H014	834.307		
	3F904												H014	834.269		
	3F912												G014	834.326		
	3F925												G014	834.311		
9	3F 889	土師器・壺	古墳中期	5.0×7.0	ミガキ	ミガキ		橙	5YR 6/8	密、雲母	良好	1/6	H014	834.327		
	3H												—	—		
10	3F 891	土師器・壺	古墳中期	6.6×8.2	ミガキ	ミガキ	ミガキ	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	H013	834.367		
	3F895												H013	834.317		
	3H												—	—		
	一括130821												—	—		

No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
11	3F 892	土師器・壺	古墳中期	3.6×5.7		ヘラ削り	ヘラ削り	橙	2.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	破片	H014	834.304	
12	3F894	土師器・壺	古墳中期 5C後半	径14.5 底4.0 高5.5	ミガキ	ミガキ	ミガキ	橙	7.5YR 7/6	密、雲母・長石・砂	良好	1/2	G014	834.303	
	3F956												G013	834.321	
	3F1002												G014	834.299	
	3F1075												G014	834.308	
	3F1076												G014	834.304	
	3F1077												G014	834.290	
	3F1080												G014	834.272	
	3F1083												G014	834.268	接合遺物
	3F1084												G014	834.285	
	3F1085												G014	834.283	
	3F1086												G014	834.260	
	3F1087												F013	834.255	
	3F1095												G014	834.238	
	3F1103												G014	834.230	
	3F1104												G014	834.241	
	3F一括												—	—	
13	3F896	土師器・壺	古墳中期 5C後半	径15.0 底5.0 高6.0	ミガキ	ミガキ	ミガキ	明赤褐	5YR 5/6	密、雲母	良好	1/2	G014	834.340	
	3F901												G014	834.285	
	3F902												G014	834.290	
	3F903												G014	834.268	
	3F909												G014	834.235	接合遺物
	3F910												G014	834.246	
	3F911												G014	834.225	
	3F928												G014	834.252	
	3F975												G014	834.297	
	3F913												G013	834.369	
14	3F914	土師器・壺	古墳中期 5C後半	径15.0 底4.0 高6.5	ミガキ	ミガキ	ミガキ	明赤褐	2.5YR 5/8	密、雲母・長石	良好	7/10	G013	834.343	
	3F915												G013	834.334	
	3F916												G013	834.347	
	3F917												G013	834.341	接合遺物
	3F918												G013	834.353	
	3F919												G013	834.334	
	3F923												G013	834.234	
	3F924												H013	834.291	
	3F961	土師器・甕	古墳中期 5C後半	径18.0 高(14.0)	ハケ	ハケ	ナテ	赤褐	2.5YR 4/6	密、雲母・長石	良好	1/5	D014	834.167	
	3F1021												D014	834.092	
	3F1041												D014	834.181	
	3F1044												D014	834.252	接合遺物
	3F1049												D014	834.182	
	3F一括												—	—	
	3F967	土師器・壺	古墳中期 5C後半	径15.0 底5.0 高6.0	ミガキ	ミガキ	ミガキ	赤褐	5YR 4/6	密、雲母	良好	1/3	C015	834.210	
	KNM677-1 T32												—	—	
18	3F1013	土師器・甕	古墳中期 5C後半	径(12.8) 底7.0 高(19.5)	ナテ	ヘラ削り	ナテ	暗赤褐	2.5YR 3/6	密、雲母・長石	良好	7/10	E013	834.034	
	3F1078												F013	834.263	
	3F1094												F013	834.248	
	3F1114												F013	834.135	
	3F1115												F013	834.135	
	3F1118												F013	834.136	
	3F1014	縄文土器・鉢	縄文中期	1.6×5.0	ナテ	縄文		にぶい黄橙	10YR 7/4	やや密、雲母・長石	やや良	破片	I013	834.552	舊利IV～V式
20	3F1032	土師器・壺	古墳中期	6.5×4.8	ミガキ	ミガキ	ミガキ	橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	破片	I013	834.558	

No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
21	3F1045	土師器・甕	古墳中期 5C後半	径16.4 底径7.4 高17.0	ナデ	ミガキ	ナデ	橙	7.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	1/6	D014	834.184	
	3F1046												D014	834.192	
	3F1048												D014	834.163	
	3F1050												D013	834.184	
	3F1051												D013	834.176	
	3F1053												D013	834.135	
	3F1054												D013	834.151	
	3F1055												D013	834.099	
	3F1056												D013	834.110	
	3F1057												D013	834.082	
	3F1058												D013	834.163	
	3F1060												D013	834.152	
	3F1061												D013	834.086	
	3F1062												D013	834.084	
	3F1063														
	3F1066												D013	834.086	
	3F1067												D013	834.112	
	3F1068												D013	834.071	
	3F1069												D013	834.111	
	3F1070												D013	834.067	
	3F1071												D013	834.128	
	3F1072												D013	834.145	
	3F1073												D013	834.083	
	3F1074												D013	834.100	
	3												—	—	
22	3F1113	土師器・甕	古墳中期	3.7×5.6	ミガキ	ミガキ		赤褐	2.5YR 4/6	密、雲母・長石	良好	破片	F013	834.173	
23	3F1122	土師器・高坏	古墳中期	6.1×9.5	ミガキ	ミガキ	ミガキ	橙	5YR 7/8	密、雲母	良好	1/6	G014	834.198	
	3F1123												G014	834.189	

III区 一括															
No.	注記番号	器種・器形	時代	大きさ 縦×横(cm)	整形方法			色調		胎土	焼成	残存率	グリッド	標高	備考
					内面	外面	底								
1	3-括130823	土師器・坏	古墳中期	径14.0高(3.3)	ミガキ	ミガキ		橙	5YR 6/6	密、雲母	良好	1/7	—	—	
2	3-括H24T19121128	土師器・甕	古墳中期	2.7×5.0	条痕	条痕	敷物の痕跡	橙	7.5YR 6/6	密、雲母・長石	良好	1/10	—	—	
3	KNM676 1-T27	土師器・壺	古墳中期 5C半ば	径13.5 底6.7 高8.5	ナデ	ナデ	ナデ	明赤褐	5YR 5/6	密、雲母・長石	良好	2/5	—	—	平成24年度試掘

第5表 出土動物遺体一覧

調査区	No.	注記番号	種	上下	左右	個体分類	推定年齢	歯種	残存状況	整理番号	グリッド	標高	備考		
I	106	1F 307	ウマ	下	?			P/M	舌側破片	20	A1003	837.906	I区第1号土石流・流路跡出土		
I	107	1F 548	哺乳類	?	?			齒/骨	破片	25	AG005	838.229	I区第1号土石流・流路跡出土		
I	108	1F 800	シカ	下?	左?			M	破片	24	AG006	838.322			
I	109	1F 857	ウマ	上	左	D?	5	M3		04	AF006	837.709	I区第1号土石流・流路跡出土		
I	—括	1-括130731	ウマ	?	?			切歯	完存	21	—	—	I区面下げ時に出土		
II	112	2F 723	ウマ	上	右	D?	3.4~4.0	P3/4?		05	Y008	835.464	II区第1号土石流・流路跡出土		
II	113	2F 724	ウマ	下	右	C'	8.8	M3	頬側、舌側分離	18	Y008	835.835	II区第1号土石流・流路跡出土		
II	114	2F 726	ウマ	上	右	D?	3.3~4.3	P3/4?		06	X008	835.876	II区第1号土石流・流路跡出土		
II	115	2F 775	ウマ	上	右		3.7	M1~3		07~09	X008	835.865	II区第1号土石流・流路跡出土		
II	116	2F 790	ウマ	下	左	A'	?	P2	破片	10~16	X008	835.528	II区第1号土石流・流路跡出土		
II	117	2F 844	ウマ	下	右	C'	7.0~8.3	P3~M2のい ずれか	頬側、舌側分離	17	W007	835.669	II区第1号土石流・流路跡出土		
II	118	2F 932	ウマ?	?	?			切歯?	破片	22	W007	835.669	II区第1号土石流・流路跡出土		
II	119	2F 952	ウマ	下	左	B'	13.6	P2	頬側、舌側分離	16	X008	835.247	II区第1号土石流・流路跡出土		
II	120	2F 982	ウマ	下	?	?	11.5~12.3	P/M		02	Y008	835.423	II区第1号土石流・流路跡出土		
II	121	2F 1011	ウマ	上	左	C	6.8~7.5	M1/2		03	S010	835.057	II区第1号土石流・流路跡出土		
II	122	2F 1012	シカ	上	?			M	破片	23	AD007	836.808	II区北東隅のサブレンチ出土		
II	123	2F 1015	ウマ	上	右	A	15.6~18.5	P3~M2のい ずれか		01	X007	835.874	II区第1号土石流・流路跡出土		
II	124	2F 1088	哺乳類	?	?			骨	破片	26	Y007	835.762	II区第1号土石流・流路跡出土		
II	125	2F 1108	哺乳類	?	?			骨	破片	27	Y007	835.681	II区第1号土石流・流路跡出土		

*詳細はp59の第1表を参照

P:前臼歯 M:後臼歯

写真図版



鯉ノ水遺跡 全景 垂直モザイク写真



鯉ノ水遺跡上空より河口湖を望む

I 区の調査



第1号道路遺構(旧鎌倉往還跡)垂直写真



第1号道路遺構(旧鎌倉往還跡)近景



I 区 土層堆積状況



第2号道路遺構 検出状況



第2号道路遺構 調査状況



第2号道路遺構 路面検出状況



現地説明会の開催状況(平成 25 年 8 月 10 日)



I 区全景



第2号道路遺構 断面1(南サブレンチ)



第2号道路遺構 断面2(中央サブレンチ)



第2号道路遺構 硬化面除去後



第2号道路遺構 下部構造確認状況



第2号道路遺構 断面剥ぎ取り状況



第1号硬化面 検出状況



第1号硬化面 断面



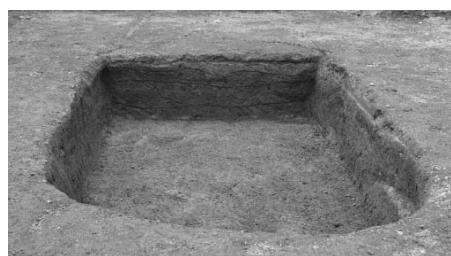
第1号土坑 検出状況



第1号土坑 覆土断面



第1号土坑 完掘状況



第2号土坑 覆土断面



第2号土坑 完掘状況



I 区調査状況



第1号土石流・流路跡 検出状況



土石流・流路跡 遺物出土状況



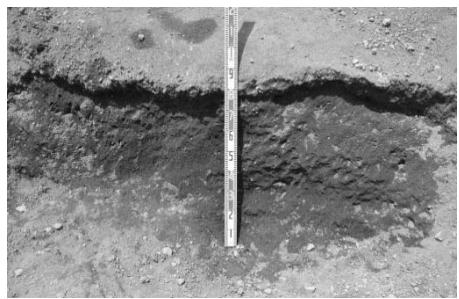
土石流・流路跡 遺物出土状況



土石流・流路跡 遺物出土状況



第1号土石流・流路跡 覆土断面



第2号道路遺構・土石流破壊箇所近景



土石流・流路跡 第2号道路遺構破壊箇所



土石流・流路跡 全景

II区の調査



土石流・流路跡 馬齒出土状況(1)



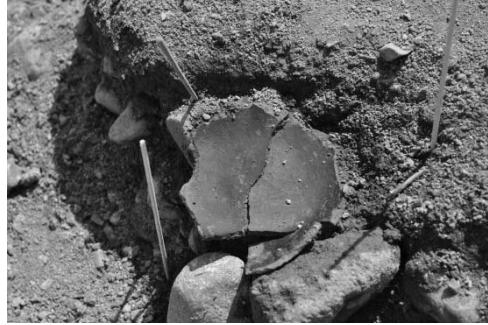
土石流・流路跡 馬齒出土状況(2)



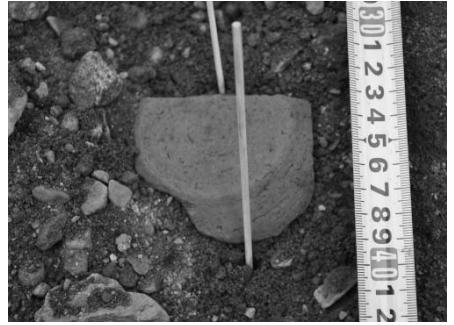
土石流・流路跡 馬齒出土状況(3)



II区 調査状況



土石流・流路跡 土器出土状況(1)



土石流・流路跡 土器出土状況(2)



土石流・流路跡 調査状況



土石流・流路跡 完掘状況(1)



土石流・流路跡 完掘状況(2)



II区 全景

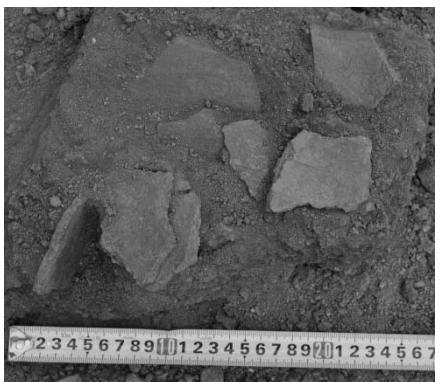
III区の調査



土器出土状況(1)



III区 調査状況



土器出土状況(2)



土器出土状況(3)



土器出土状況(4)



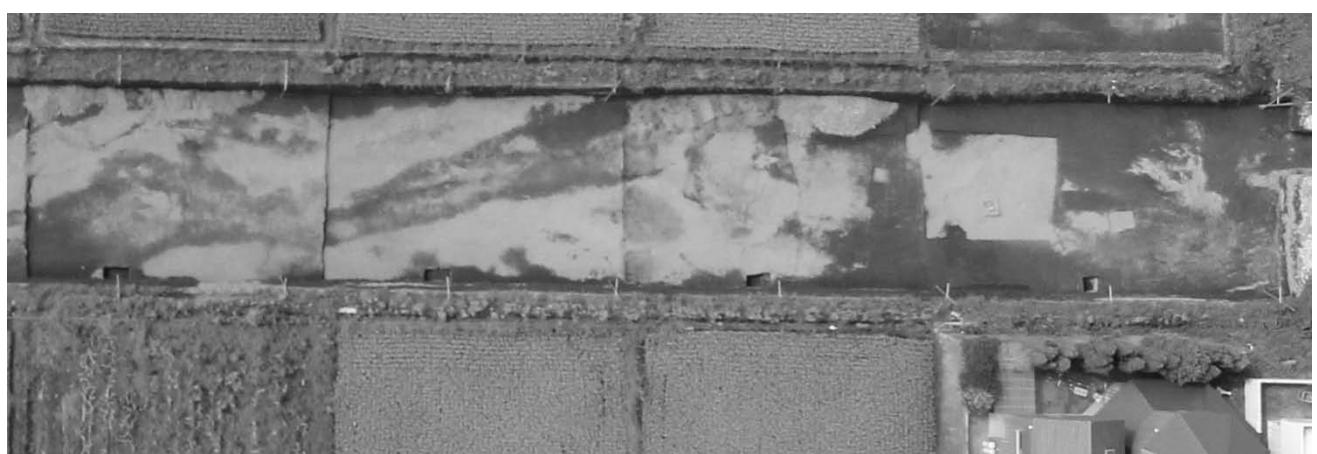
土器出土状況(5)



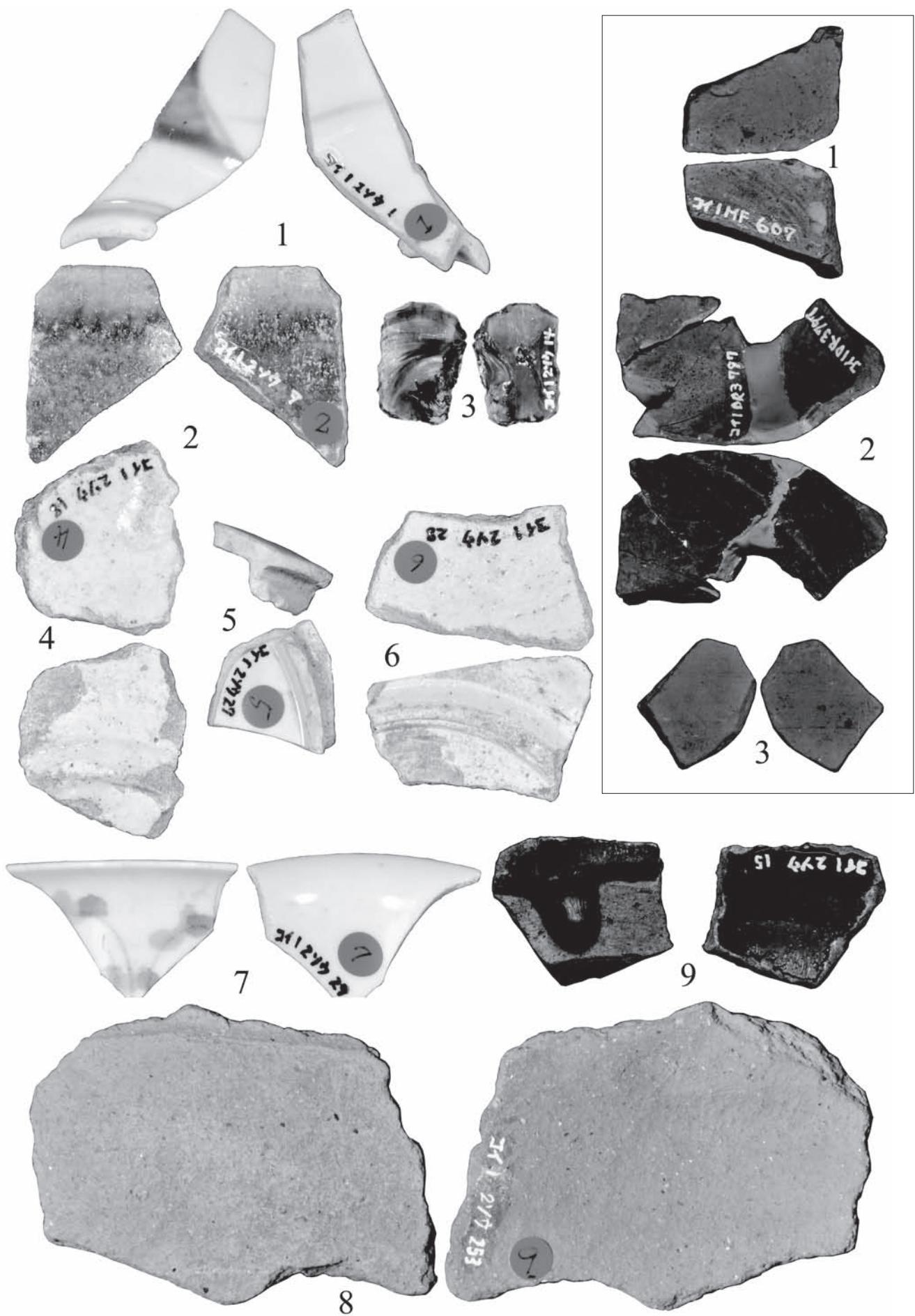
III区 調査状況



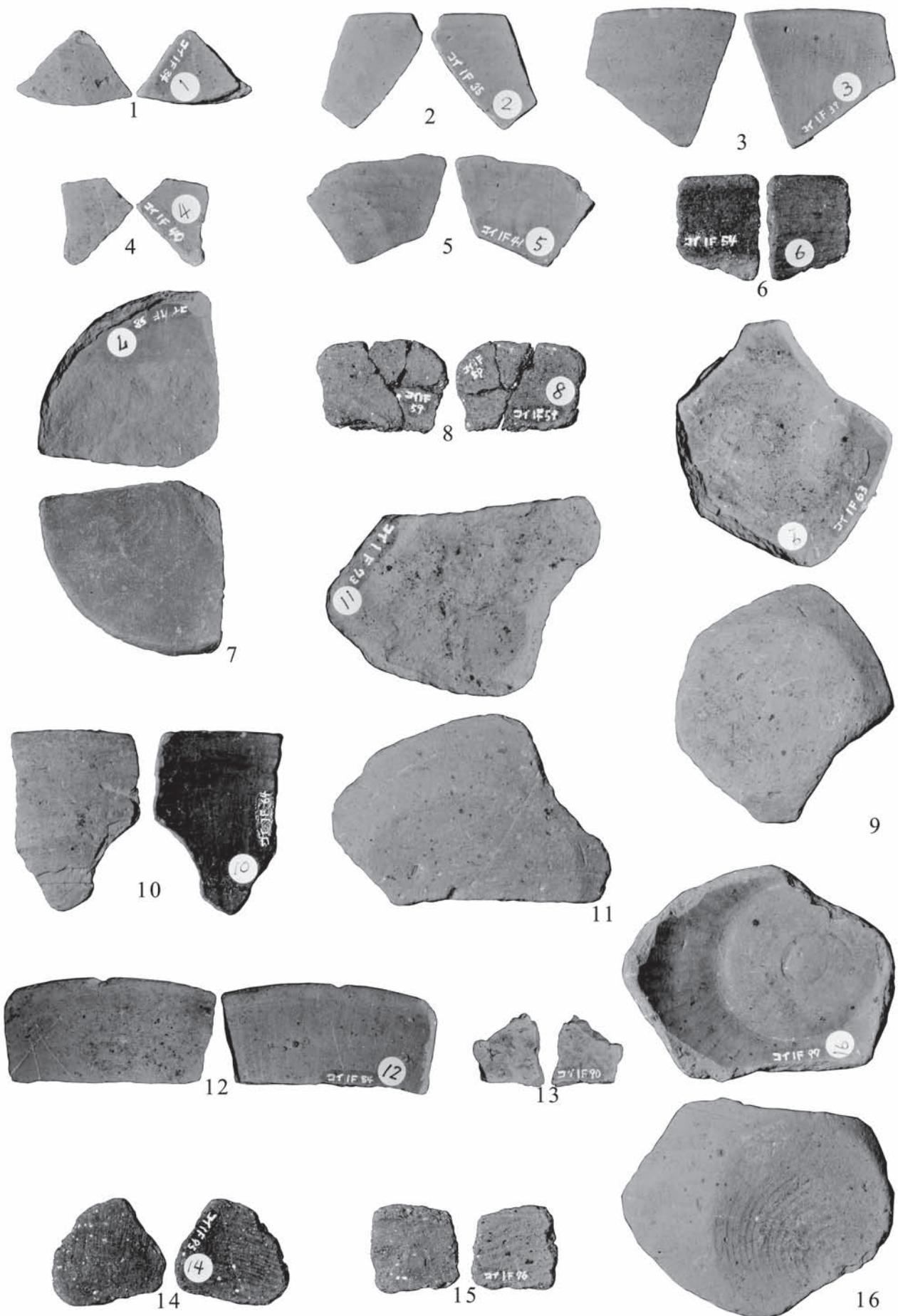
土器出土状況(6)



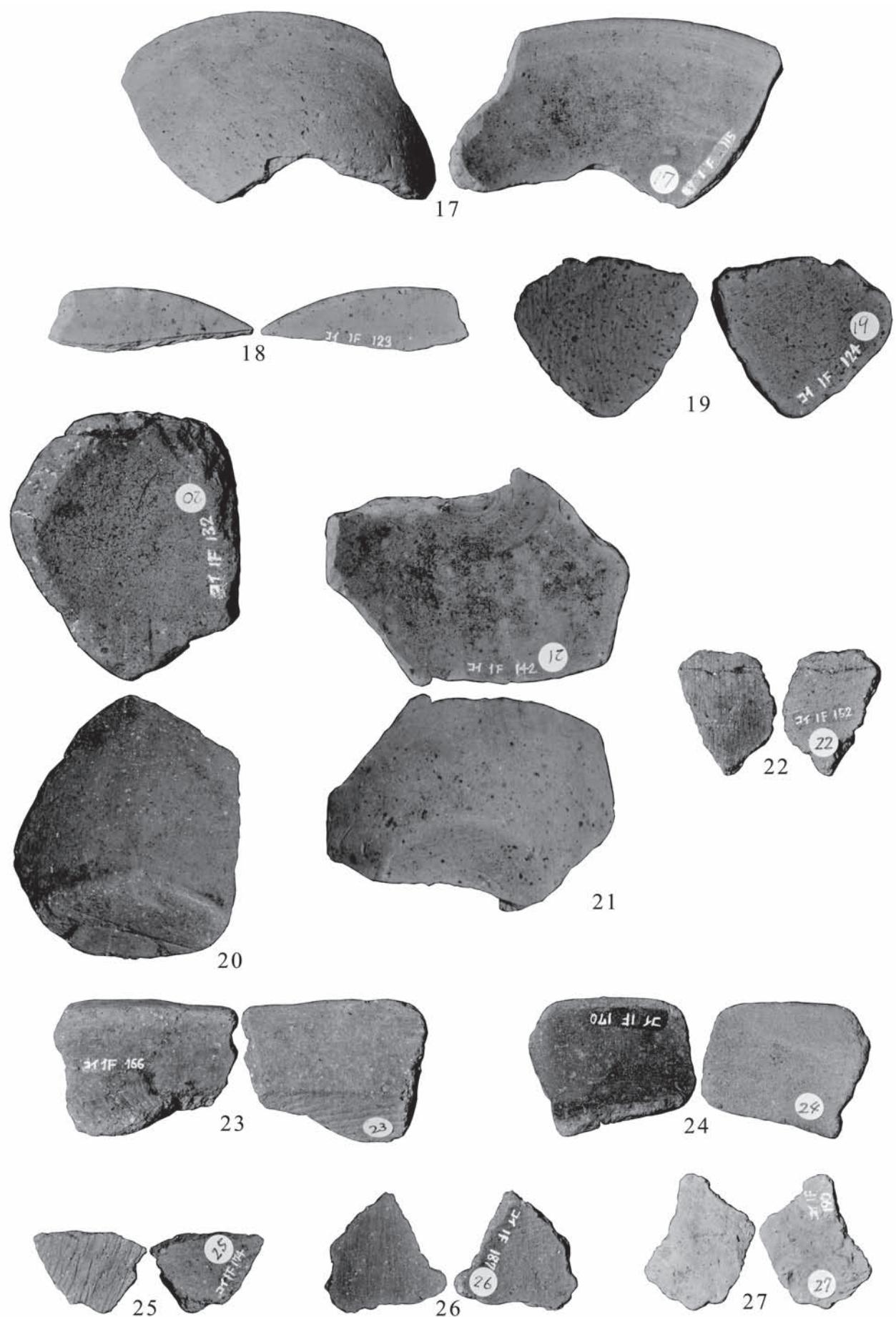
III区 全景



遺物写真1 I区出土遺物(1) 第1号道路遺構・第2号道路遺構(枠内) 出土遺物



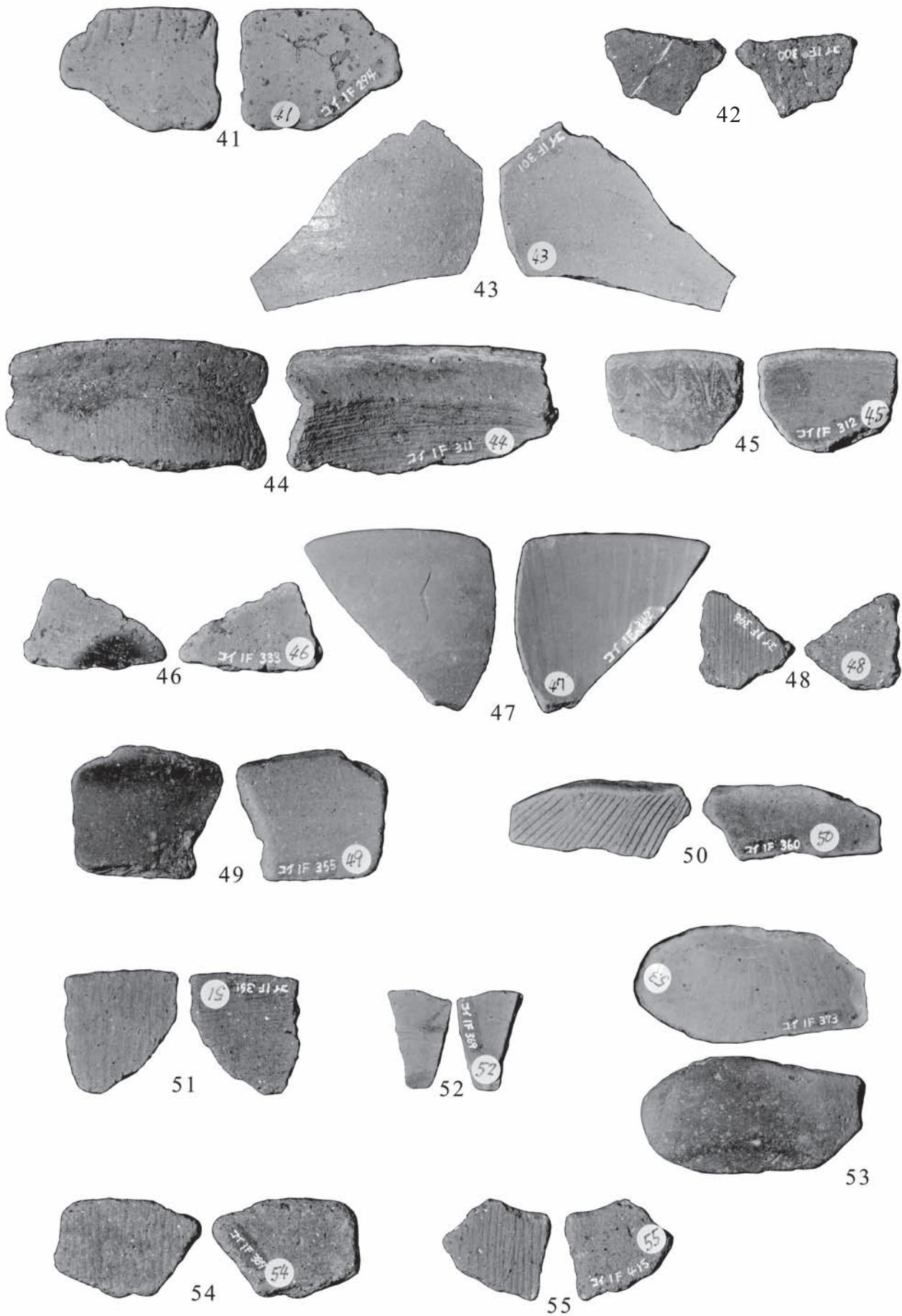
遺物写真2 I 区出土遺物(2) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



遺物写真3 I 区出土遺物(3) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



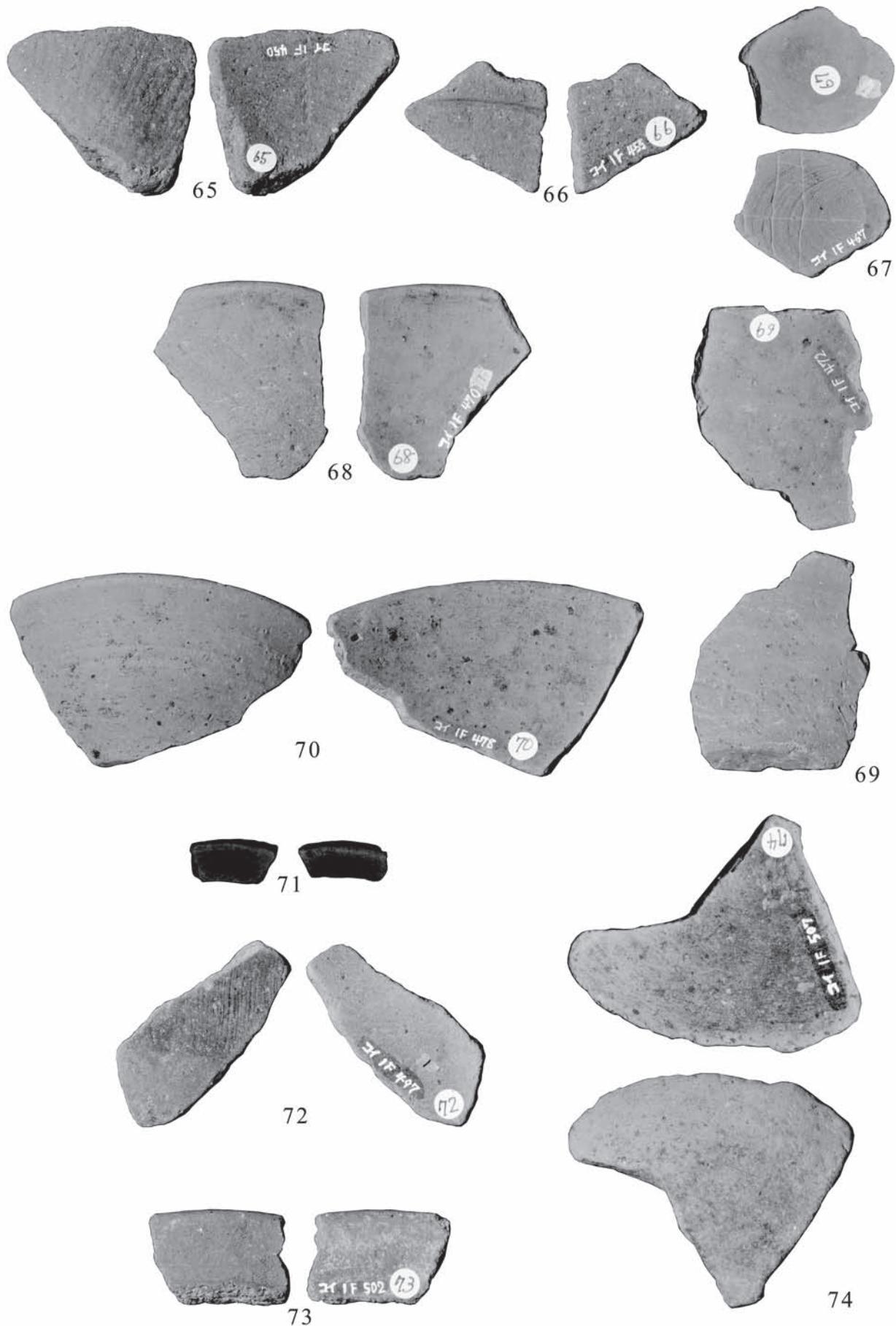
遺物写真4 I 区出土遺物(4) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



遺物写真5 I 区出土遺物(5) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



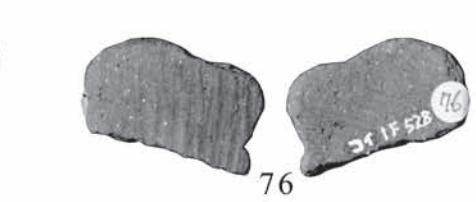
遺物写真6 I 区出土遺物(6) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



遺物写真7 I 区出土遺物(7) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



75



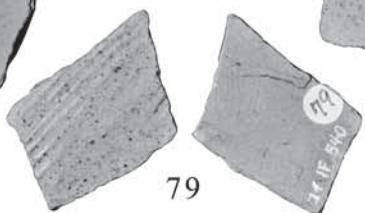
76



77



78



79



80



31 IF 554



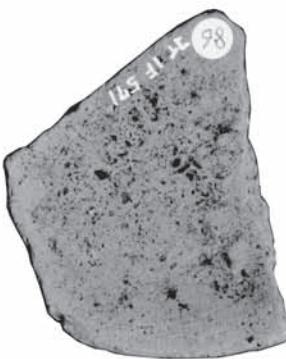
81



82



83



84



85

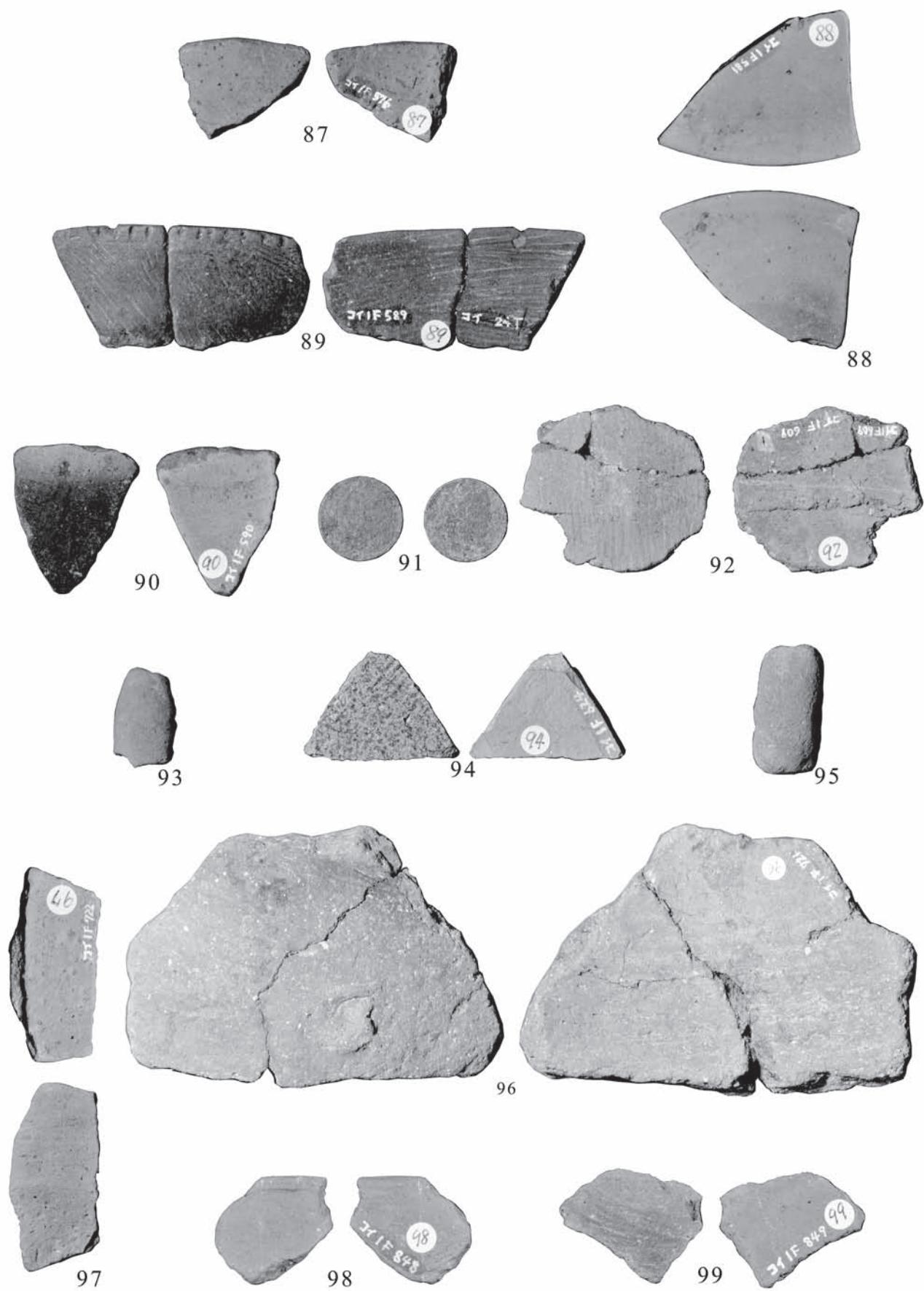


85

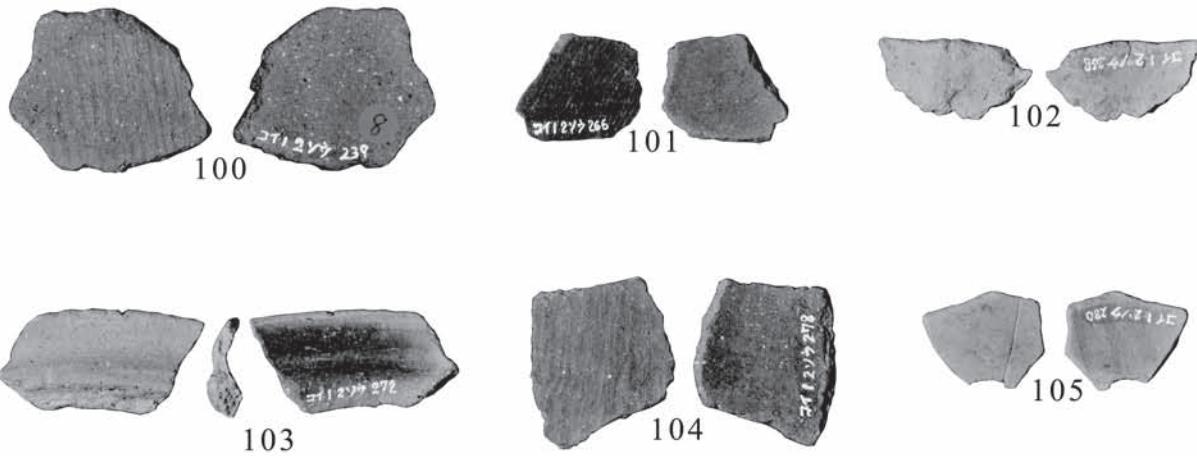


86

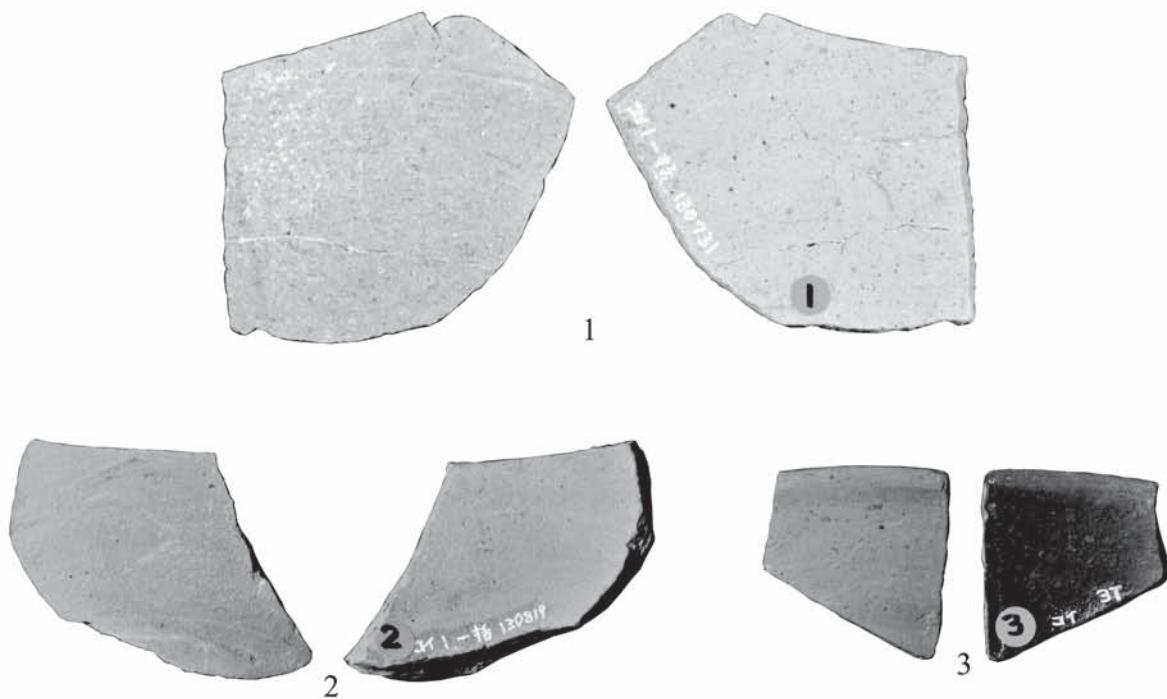
遺物写真8 I 区出土遺物(8) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



遺物写真9 I 区出土遺物(9) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



第1号土石流・流路跡 出土遺物

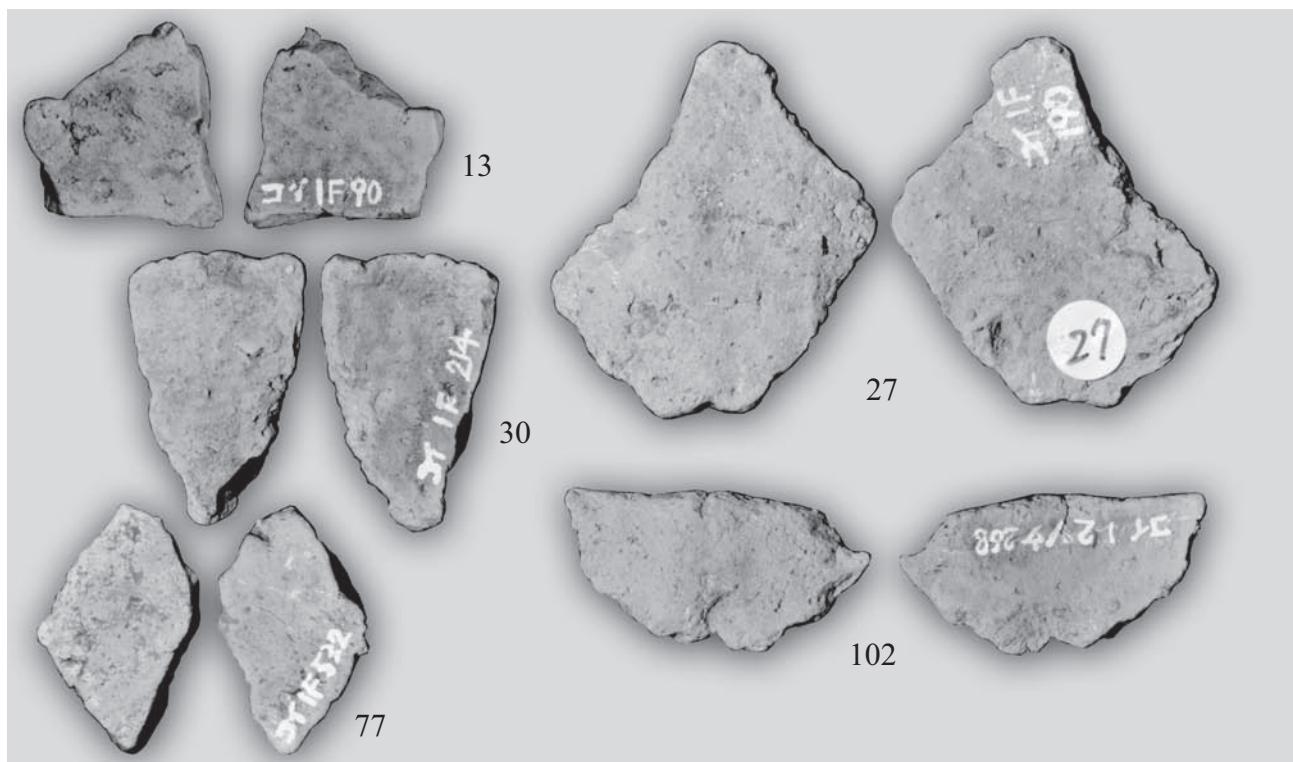


一括資料(第1号土石流・流路跡 出土遺物)

遺物写真10 I 区出土遺物(10)

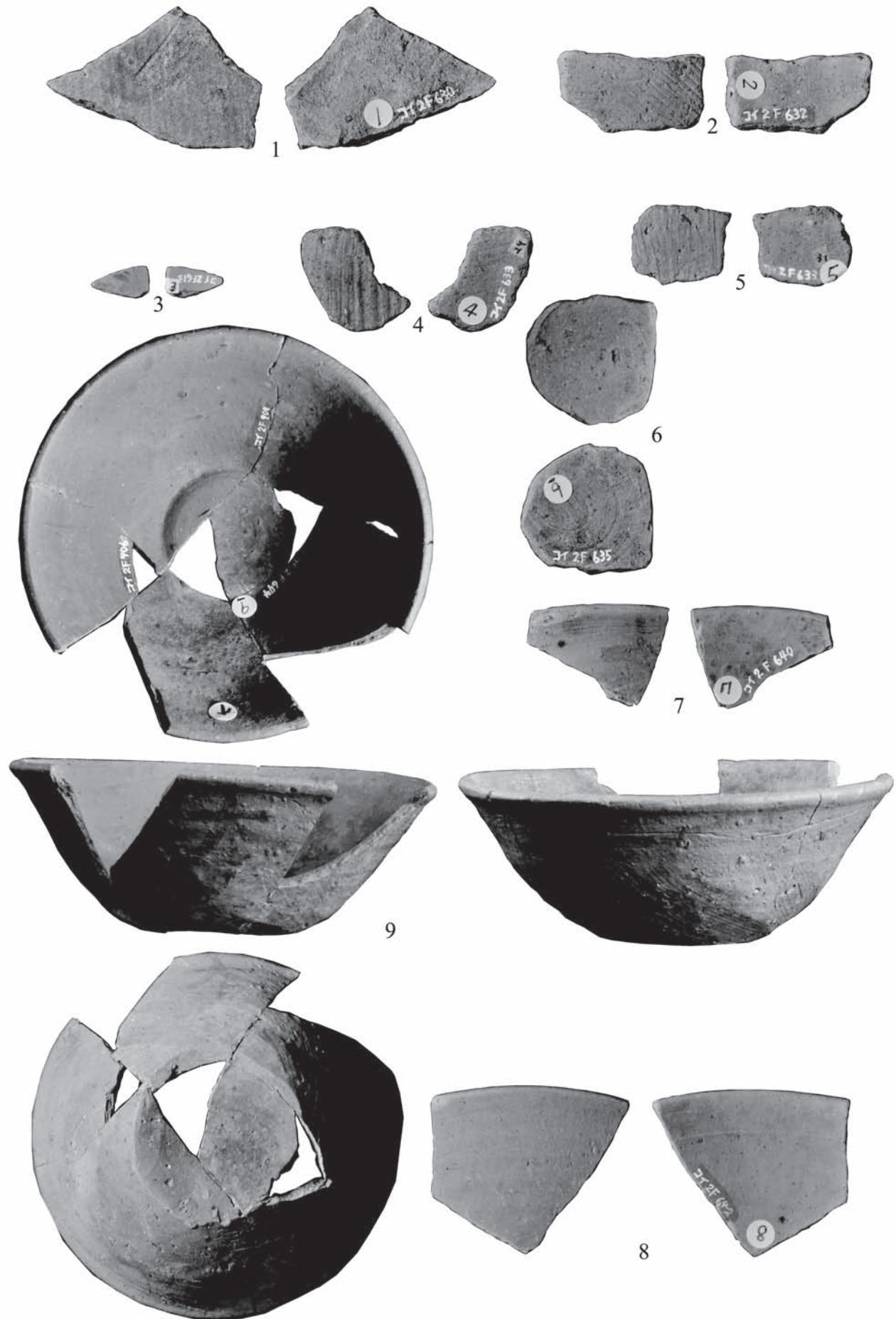


I 区出土 土師器 甲斐型坏(No.69と78の接合資料・No.63)

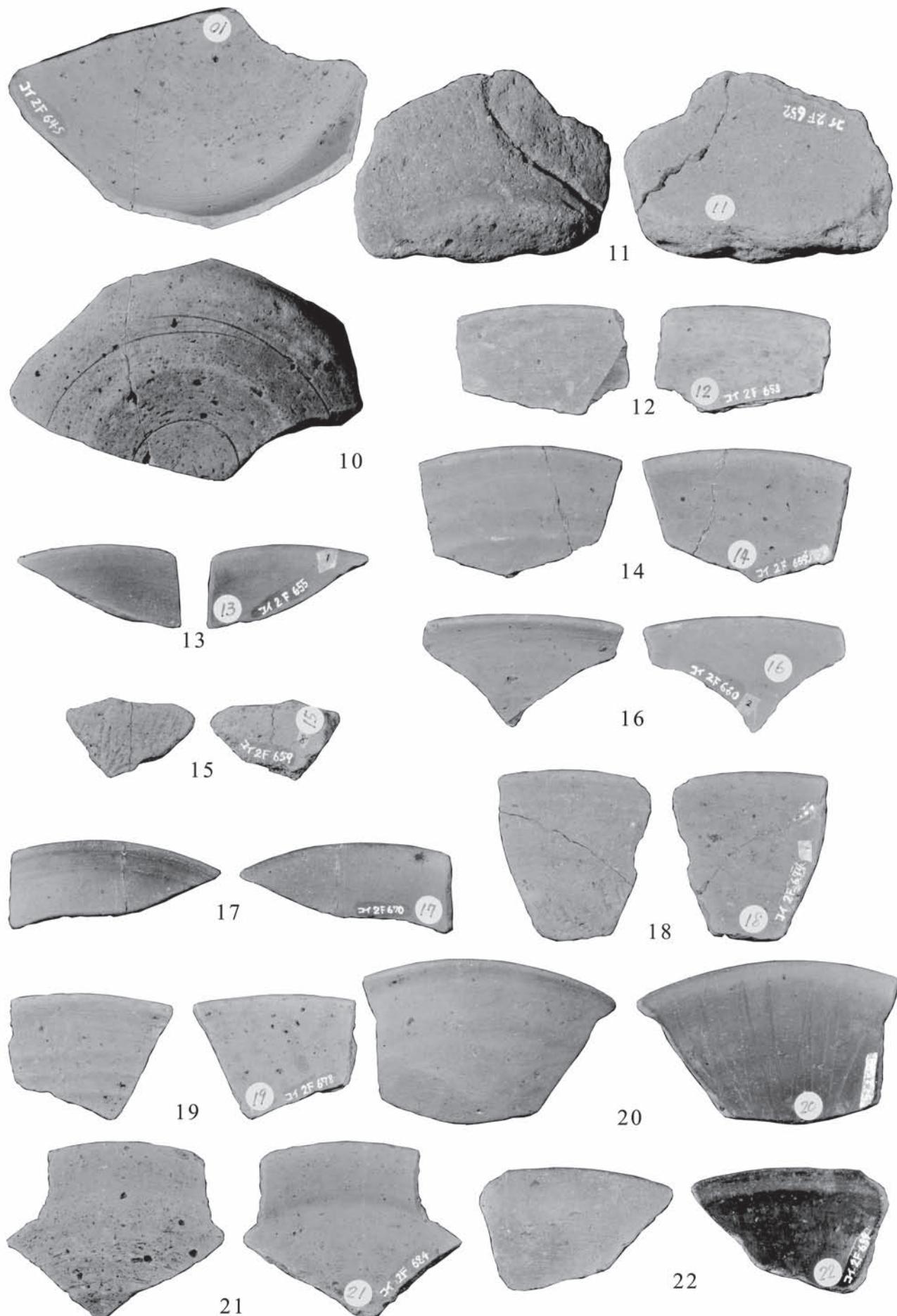


I 区出土 古代製塩土器(実寸大)

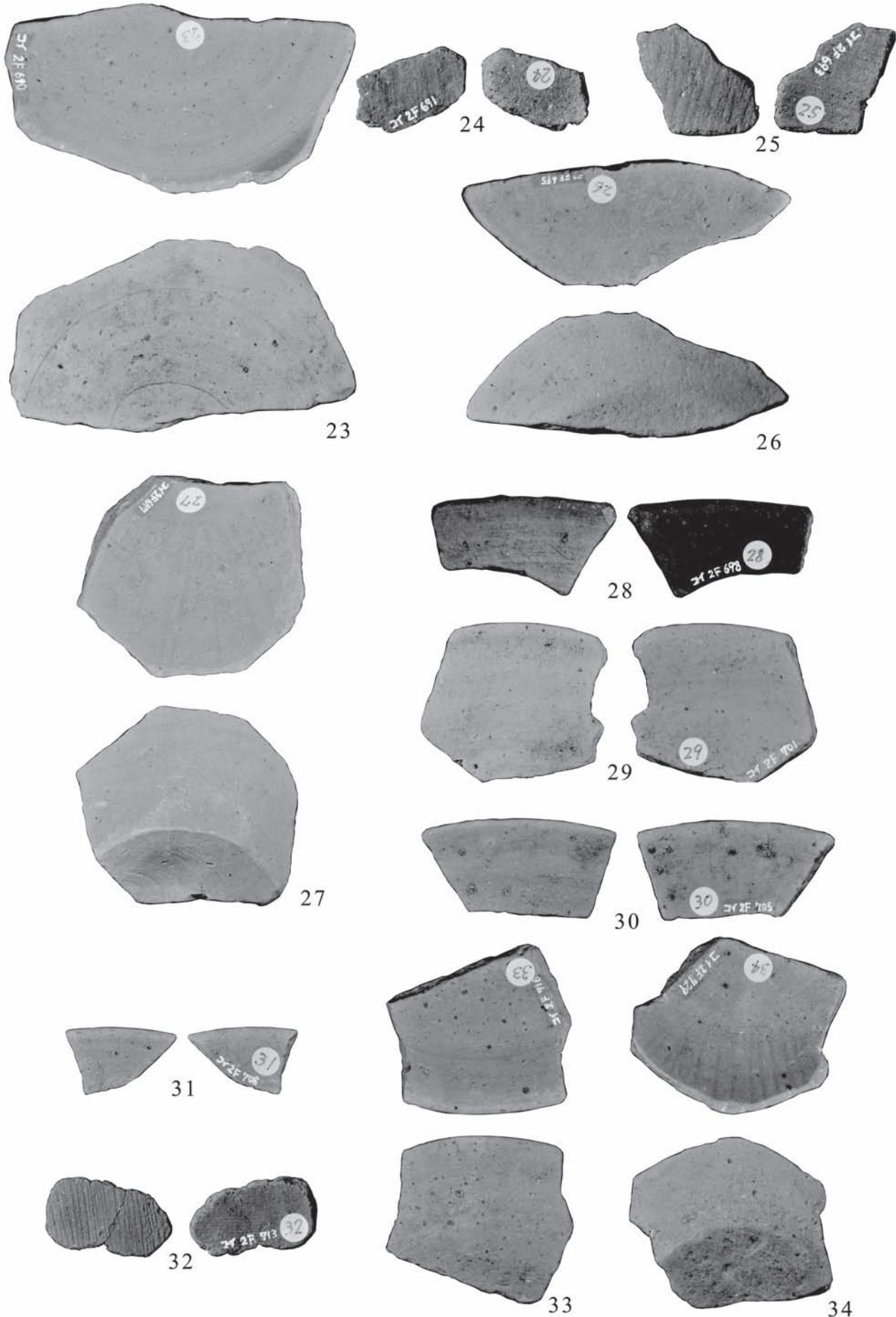
遺物写真11 I 区出土遺物(11)



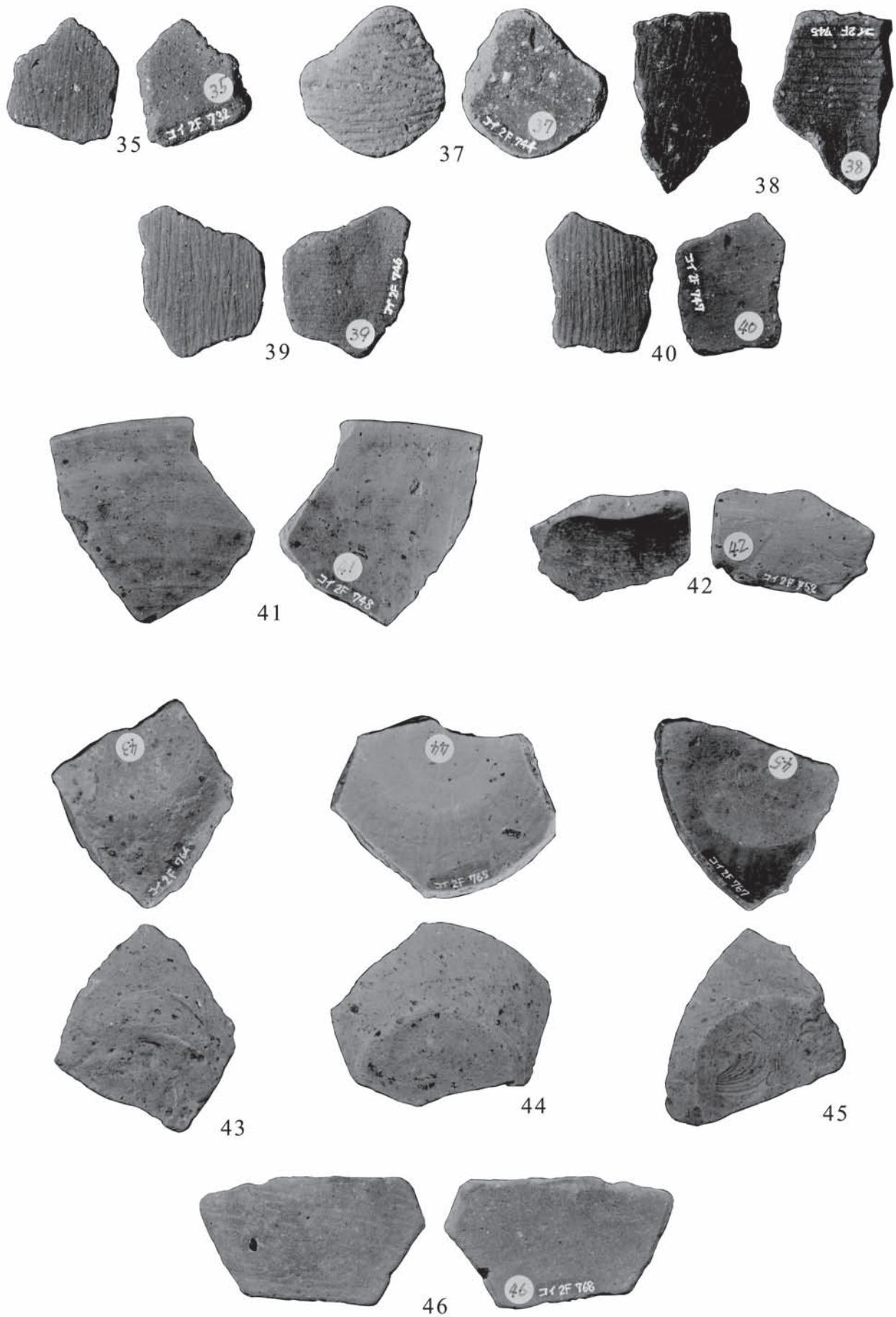
遺物写真12 II区出土遺物(1) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



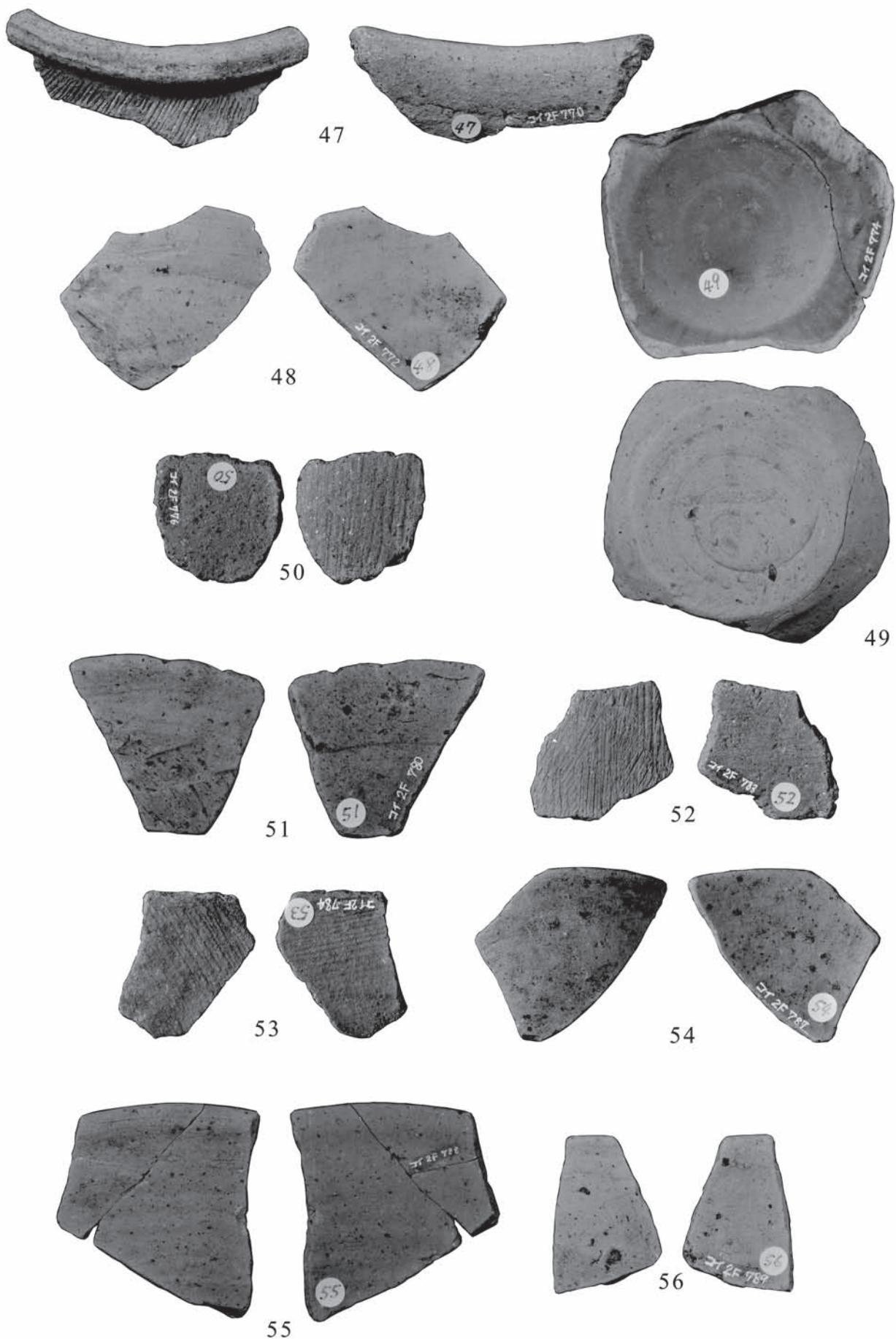
遺物写真13 II区出土遺物(2) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



遺物写真14 II区出土遺物(3) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



遺物写真15 II区出土遺物(4) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



遺物写真16 II区出土遺物(5) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



57



58



60



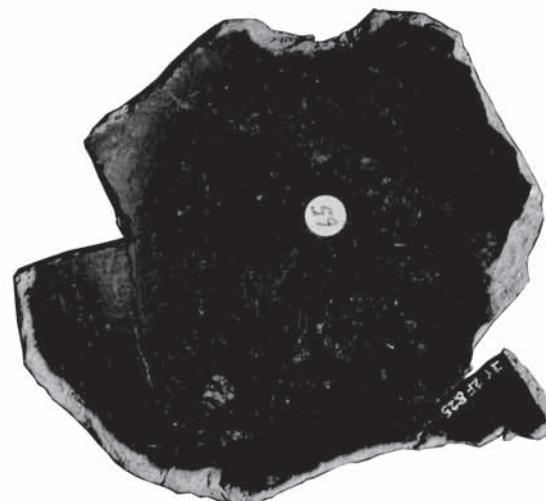
61



59



62



63

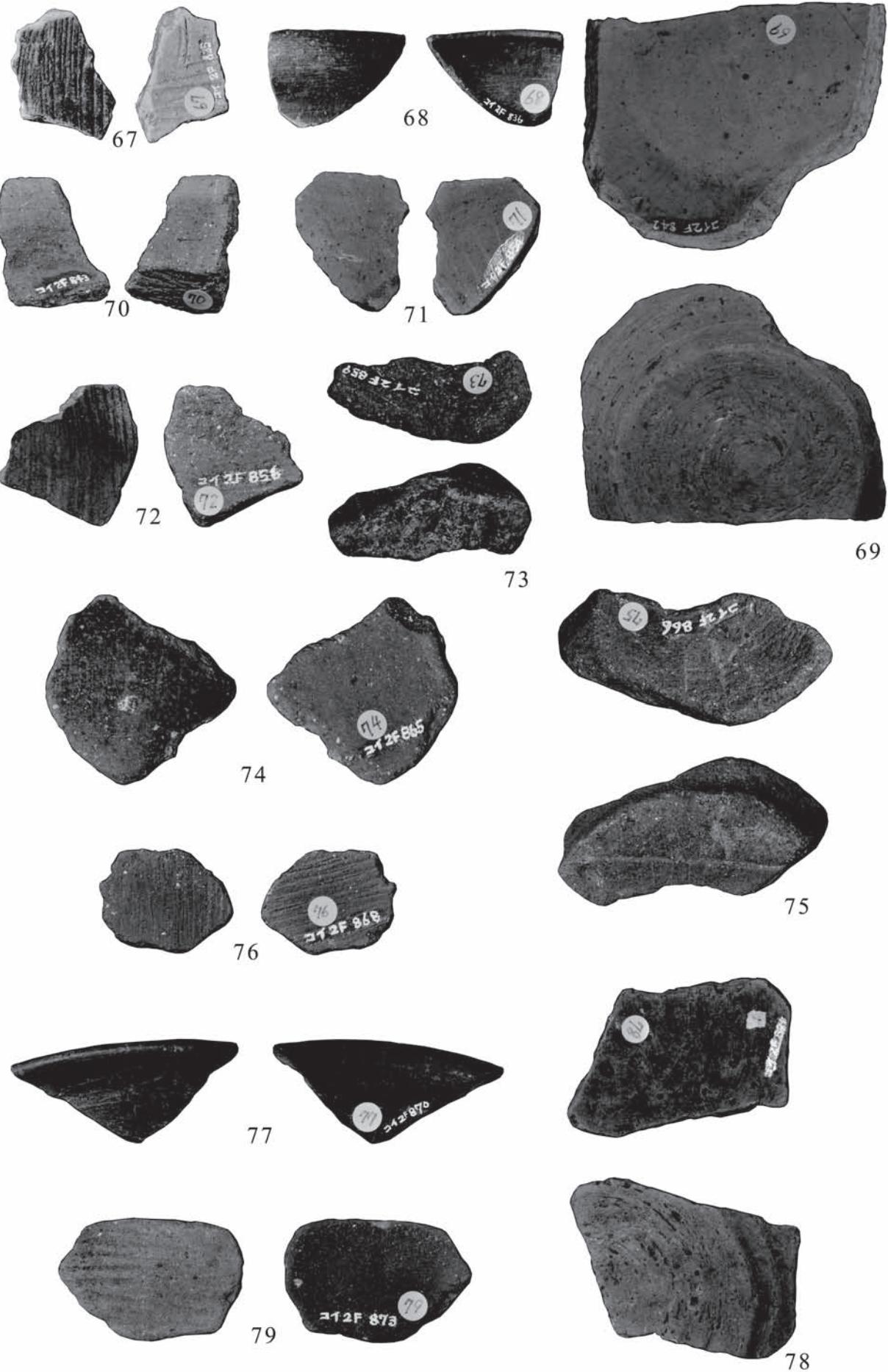


64

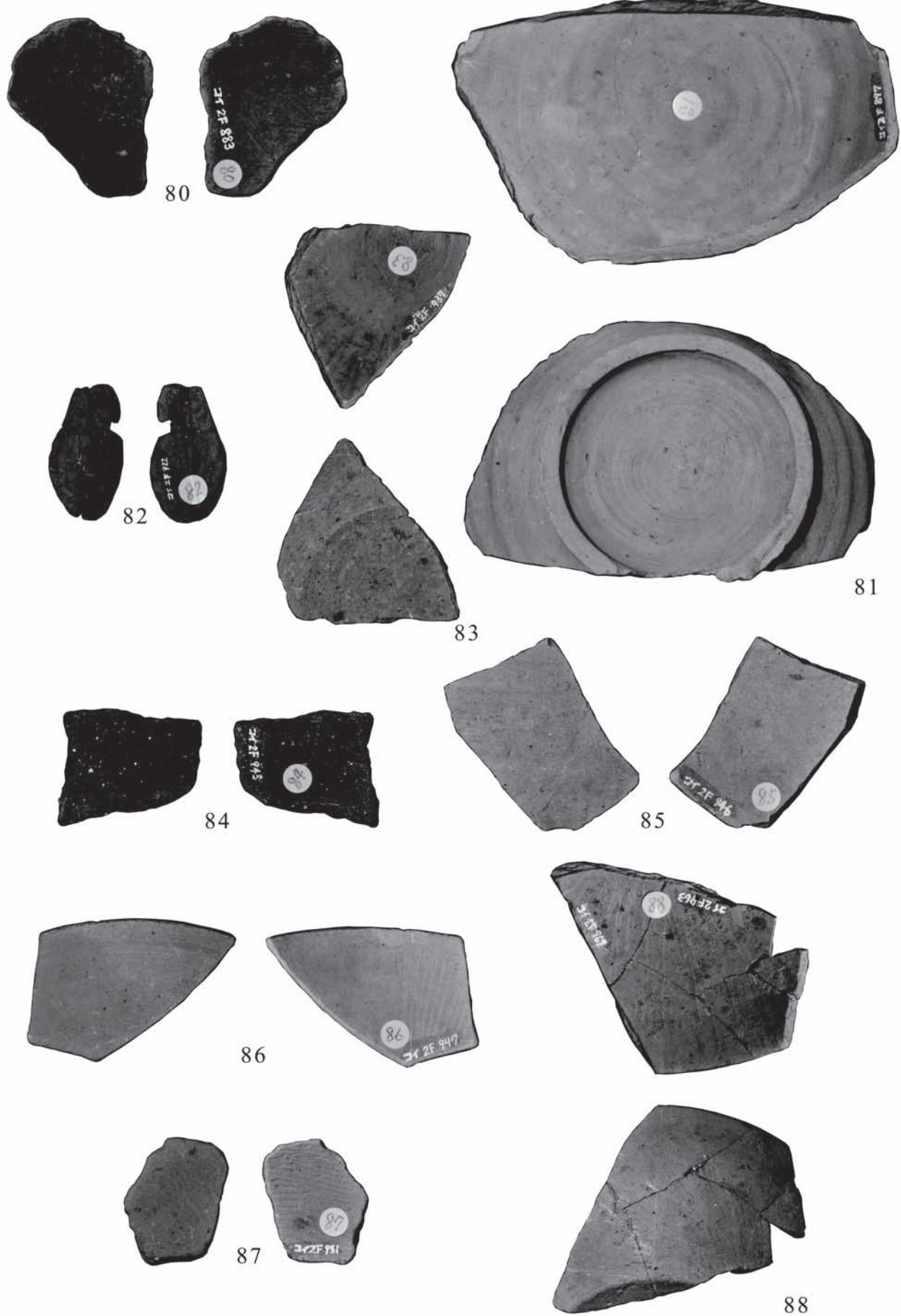


65

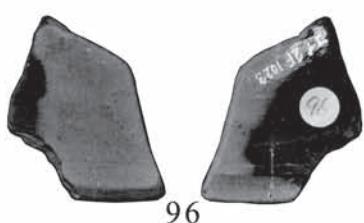
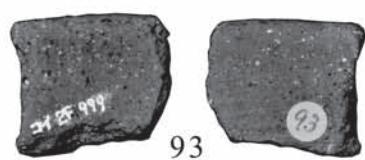
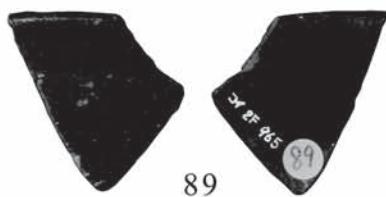
遺物写真17 II区出土遺物(6) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



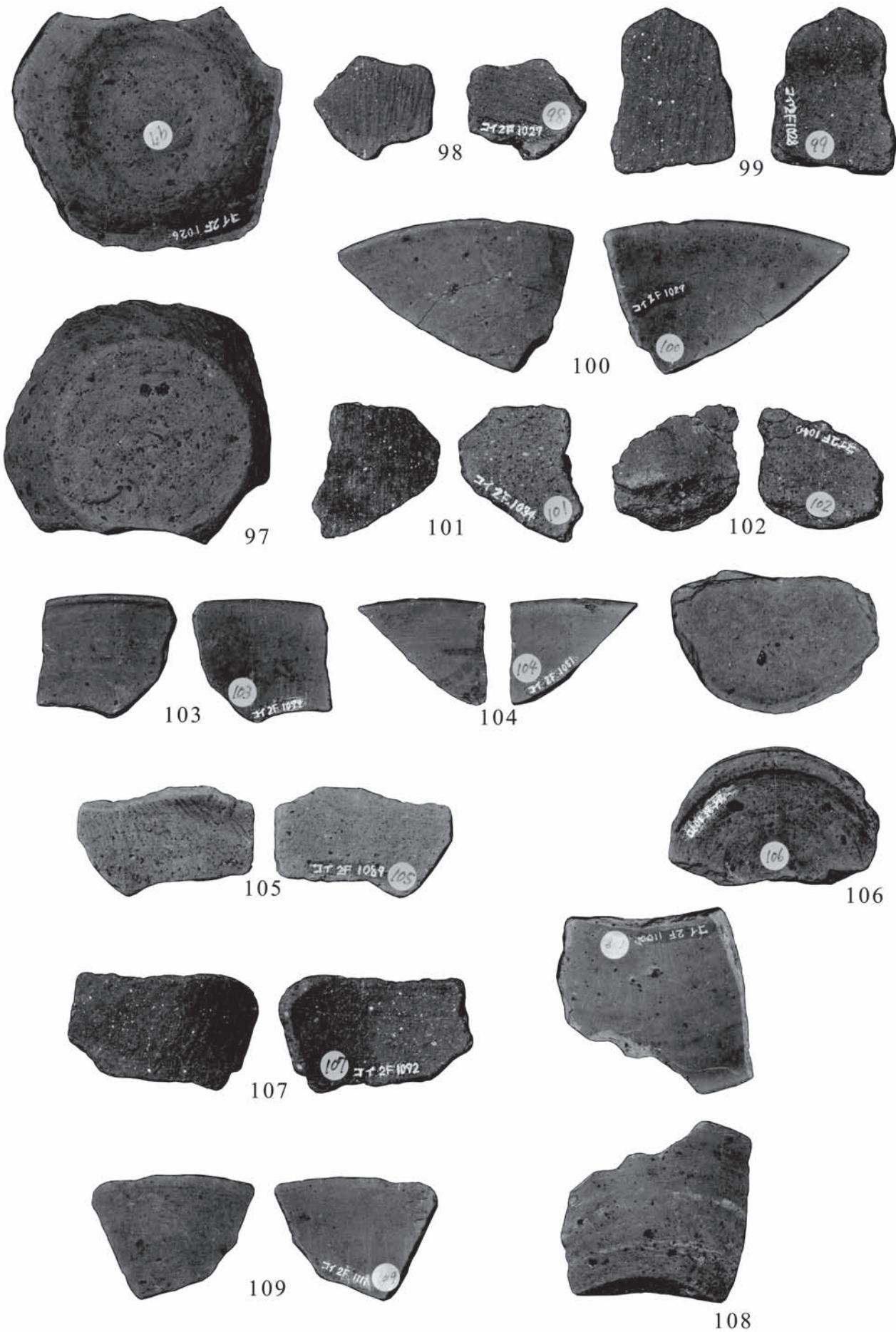
遺物写真18 II区出土遺物(7) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



遺物写真19 II区出土遺物(8) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



遺物写真20 II区出土遺物(9) 第1号土石流・流路跡 出土遺物

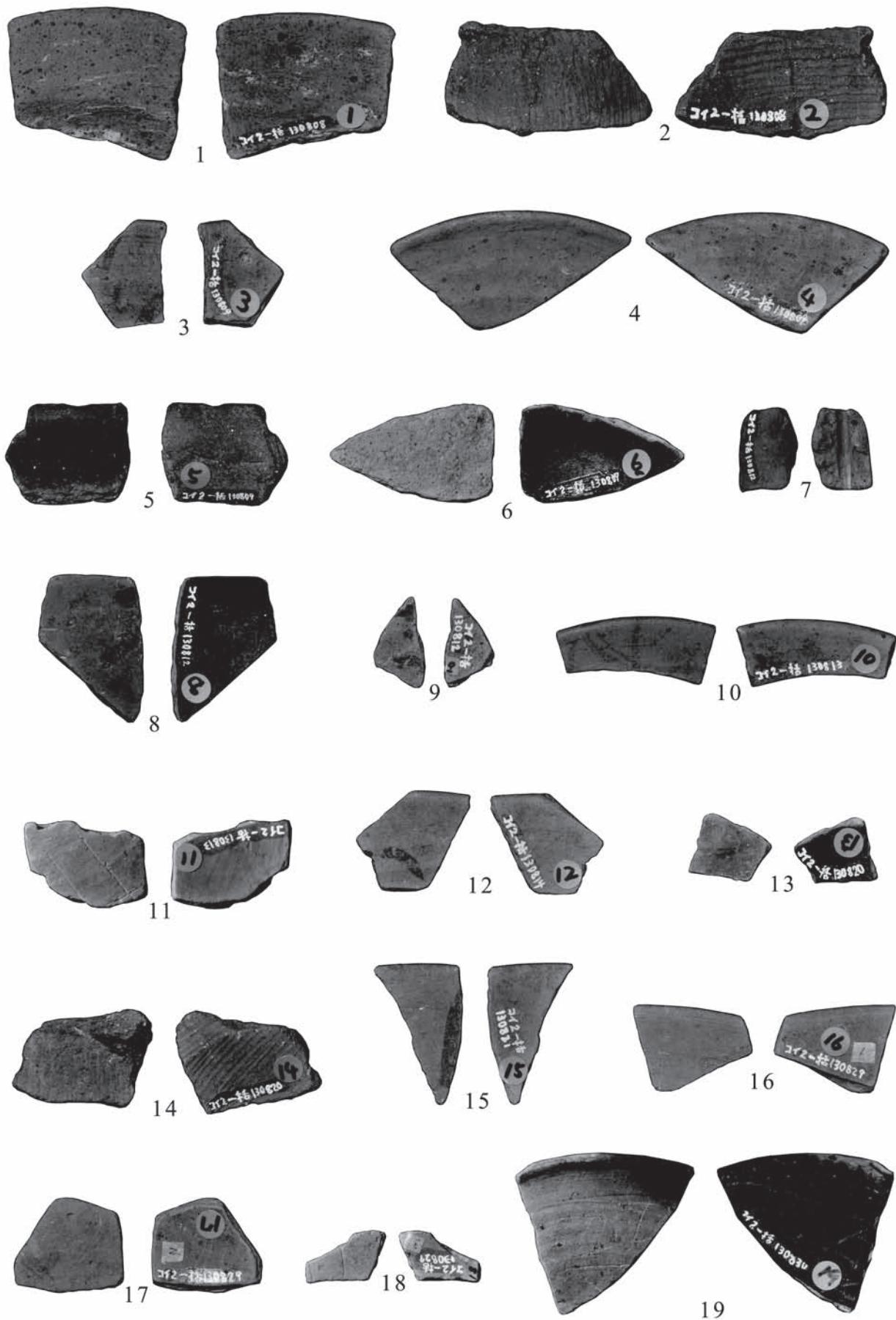


遺物写真21 II区出土遺物(10) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



II区出土遺物の土師器 甲斐型壺(No.9・No.91)

遺物写真22 II区出土遺物(11) 第1号土石流・流路跡 出土遺物



遺物写真23 II区出土遺物(12) 一括資料(第1号土石流・流路跡 出土遺物)



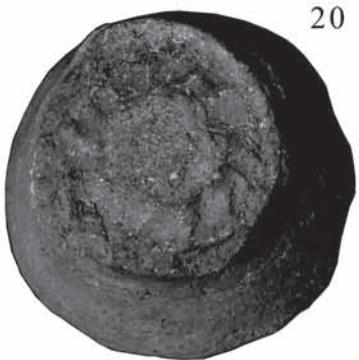
20



21



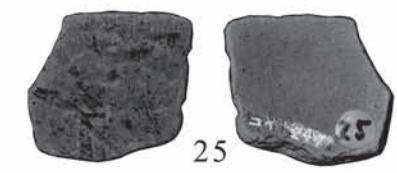
22



24



26



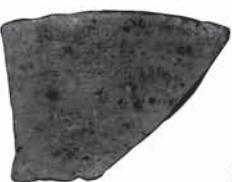
25



27



遺物写真24 II区出土遺物(13) 一括資料(第1号土石流・流路跡 出土遺物)



28



29

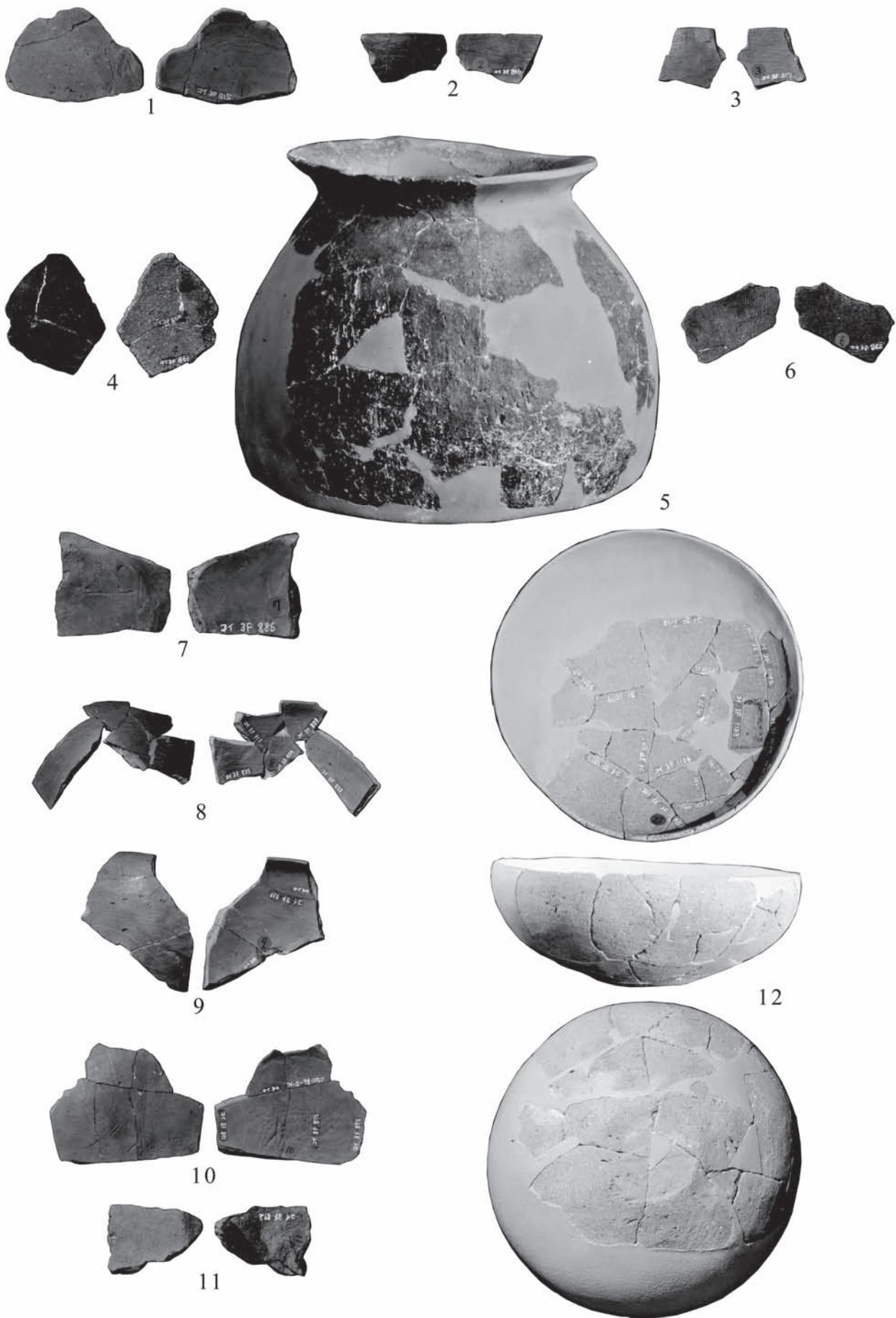


30

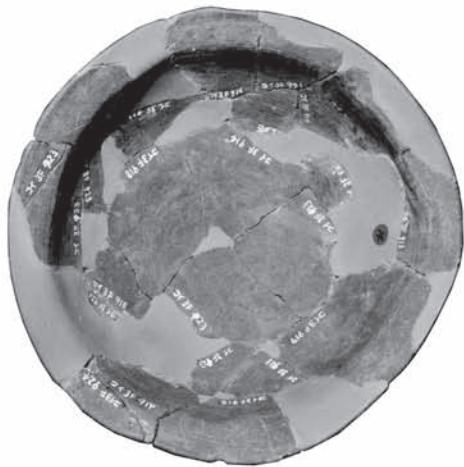


平成24年度 試掘確認調査における一括資料No.20の出土状況

遺物写真25 II区出土遺物(14) 一括資料(第1号土石流・流路跡 出土遺物)



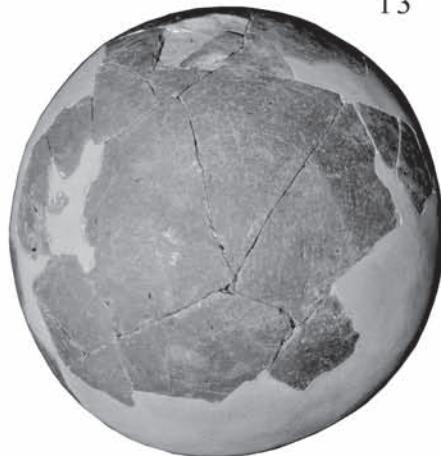
遺物写真26 III区出土遺物(1) 古墳時代遺物包含層 出土遺物



13



14



15



16

遺物写真27 Ⅲ区出土遺物(2) 古墳時代遺物包含層 出土遺物



17



19



20



18



遺物写真28 III区出土遺物(3) 古墳時代遺物包含層 出土遺物



21



22



23

古墳時代遺物包含層 出土遺物



1



2



3

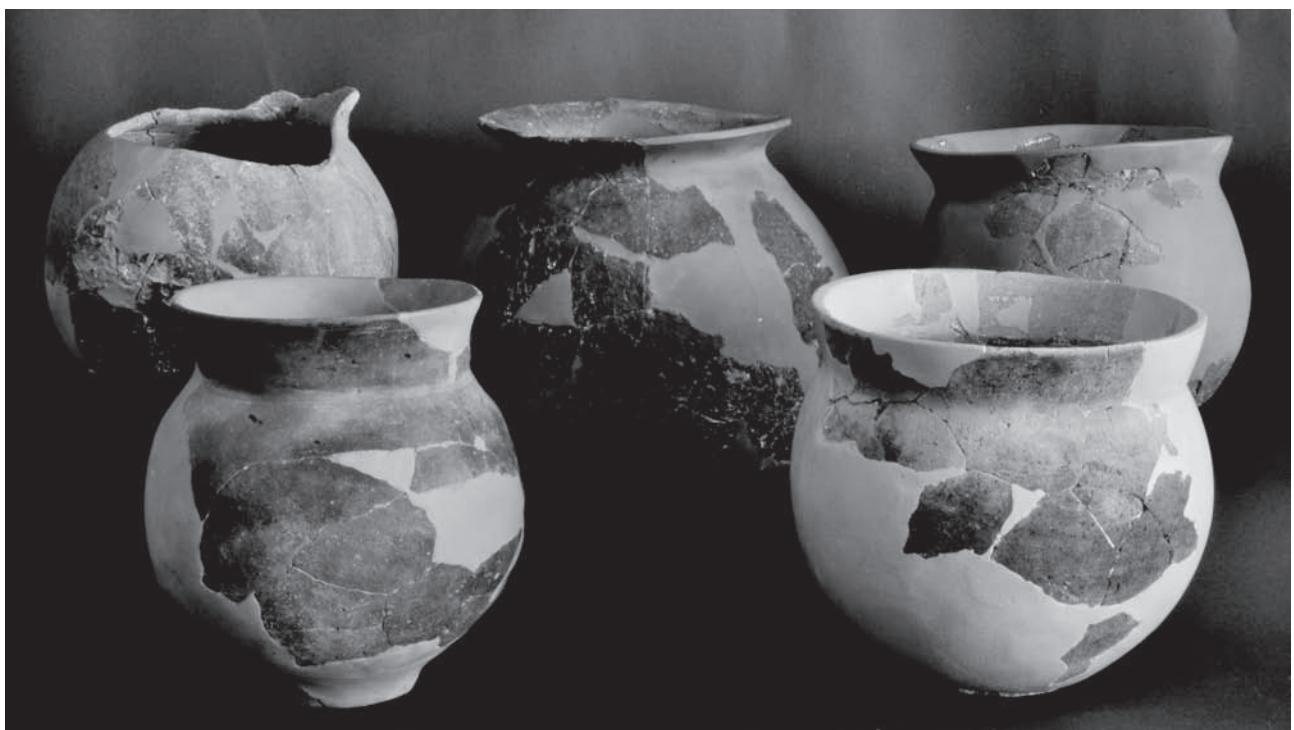


一括資料(古墳時代遺物包含層 出土遺物)

遺物写真29 III区出土遺物(4) 古墳時代遺物包含層 出土遺物



III区出土遺物 古墳時代遺物包含層 出土坏類



III区出土遺物 古墳時代遺物包含層 出土甕類

遺物写真30 III区出土遺物(5) 古墳時代遺物包含層 出土遺物

報告書抄録

富士河口湖町埋蔵文化財調査報告書 第1集

鯉ノ水遺跡

－主要地方道河口湖精進線の建設に伴う発掘調査報告書－

印刷日 2015年（平成27年3月16日）

発行日 2015年（平成27年3月16日）

編 集 富士河口湖町教育委員会

〒401-0392 山梨県南都留郡富士河口湖町船津1700

TEL 0555-72-6053 FAX 0555-73-1358

発 行 富士河口湖町教育委員会

山梨県県土整備部

印 刷 株式会社 サンニチ印刷

**Fujikawaguchiko Board of Education
ARCHAEOLOGICAL RESEARCH PAPERS No.1**

KOINOMIZU-SITE

**Results of an Excavation
for Construction of the Main Regional Road “Kawaguchiko-Shoji-Line”**



The Ancient Road Remains “Tokaido-Kaiji”

March 2015

Fujikawaguchiko Board of Education

Yamanashi Prefectural Land Development Department